2区第2次面（西から）

3区第2次面（南から）

ＳＢ203（西から）

図版4

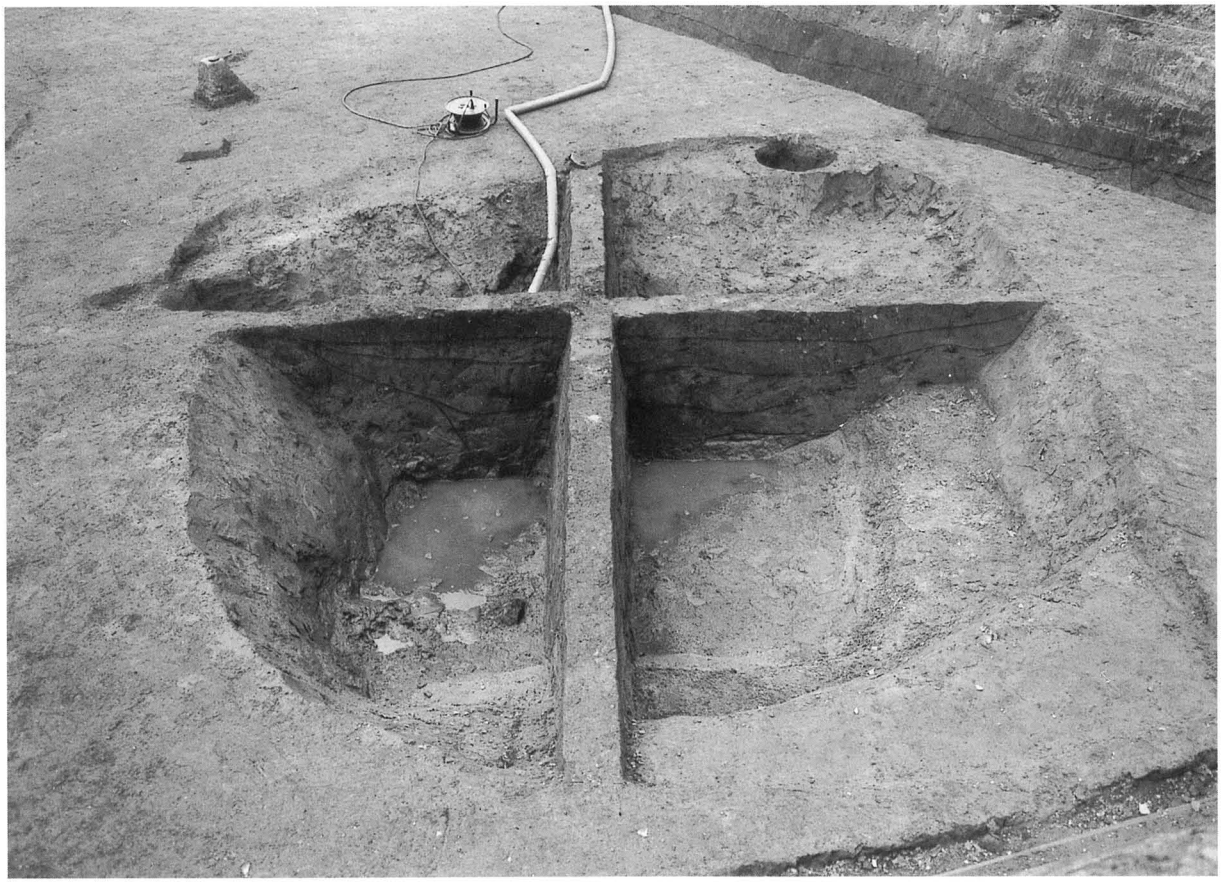
ＳＫ201西壁（東から）

ＳＫ201（東から）

ＳＫ201（北から）

ＳＫ201下層（北から）

ＳＫ202（西から）

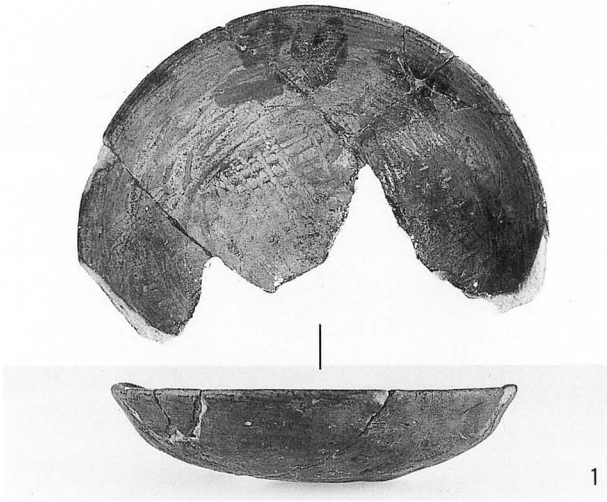


ＳＫ204（南東から）

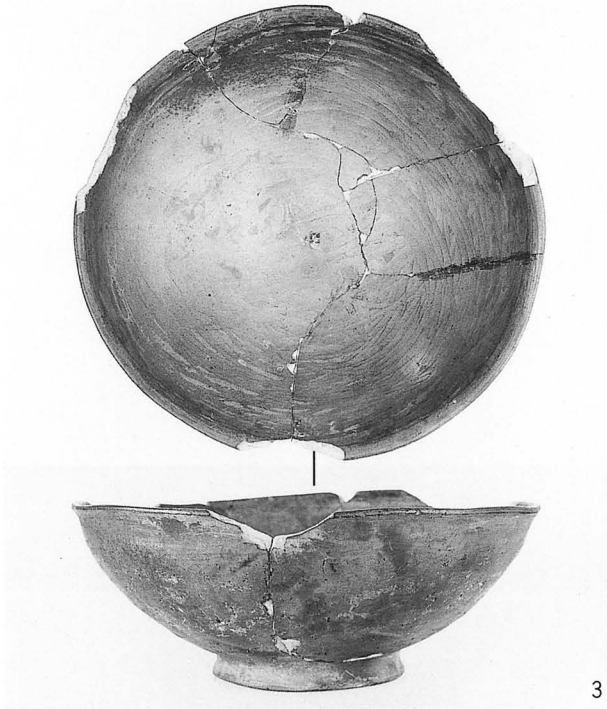
図版6

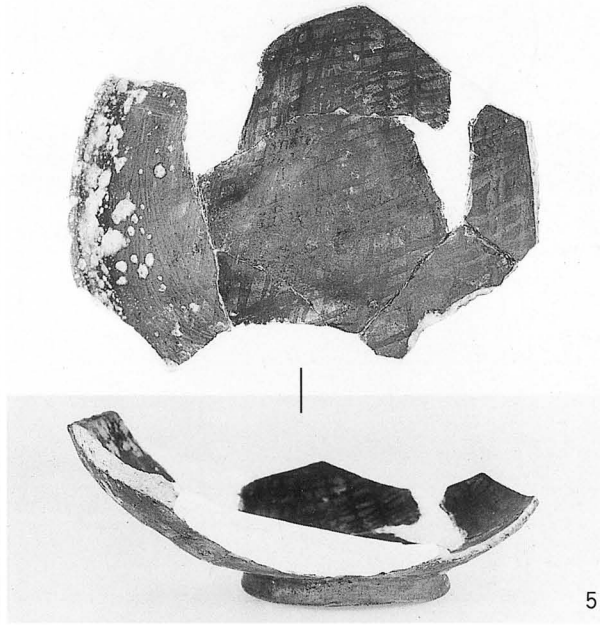
ＳＫ206（南から）

ＳＫ206（東から）

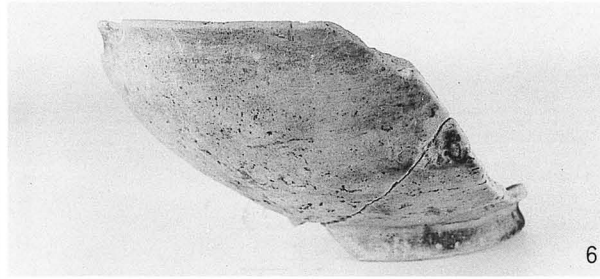

1

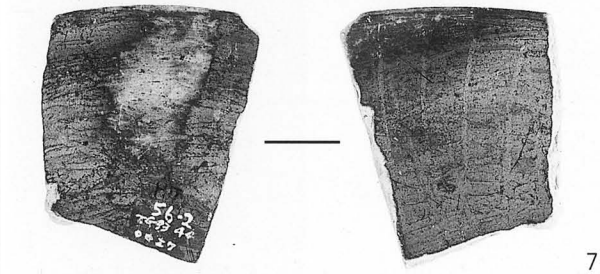
2


3

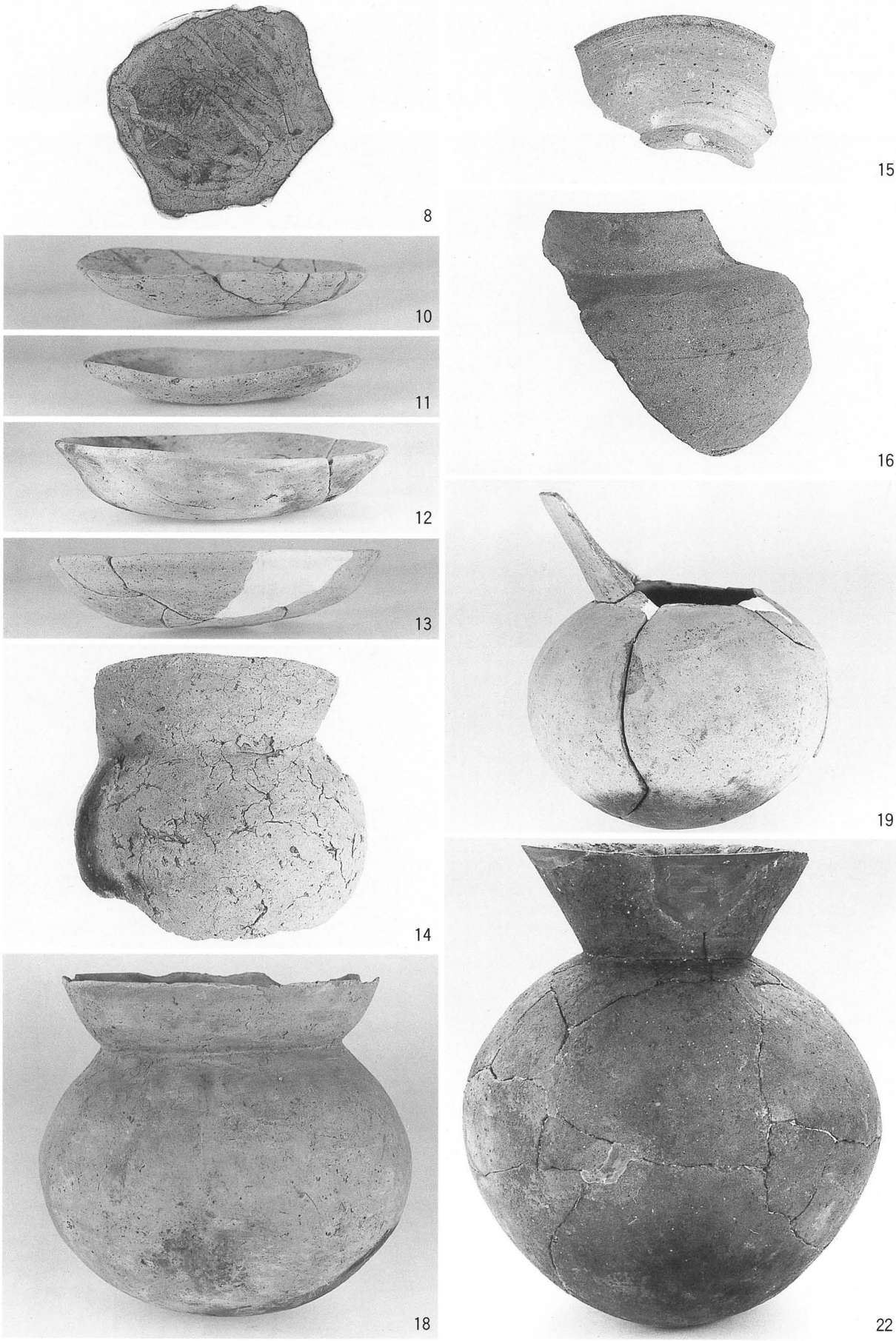

5

4

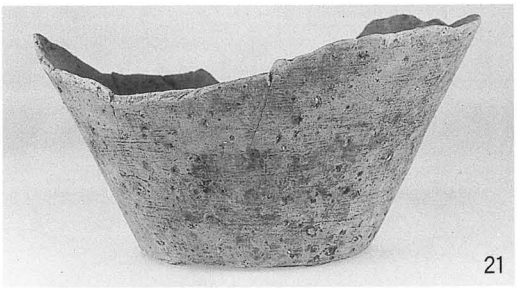

6

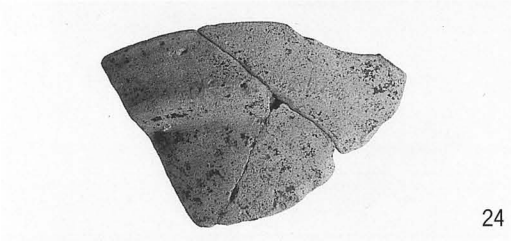

7

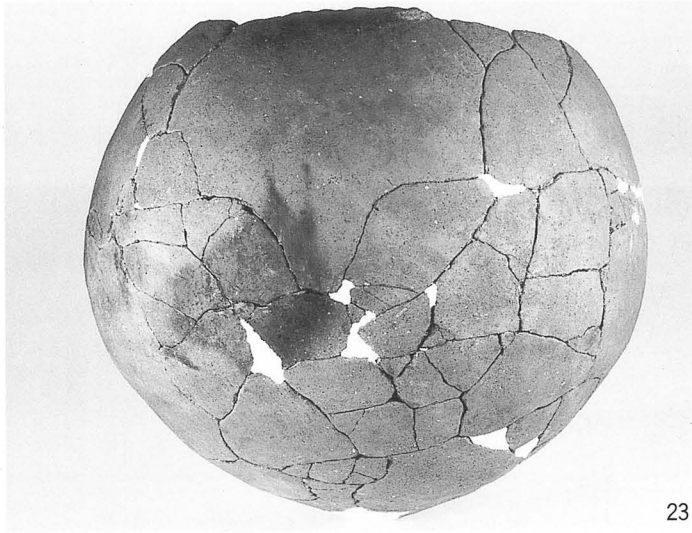
SD101

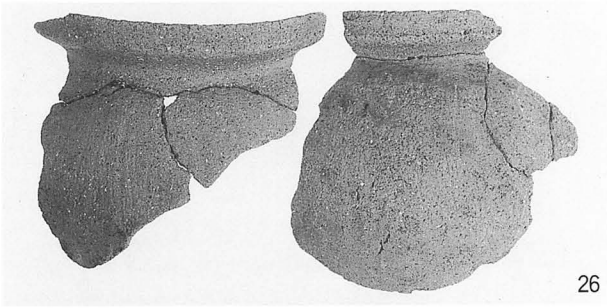


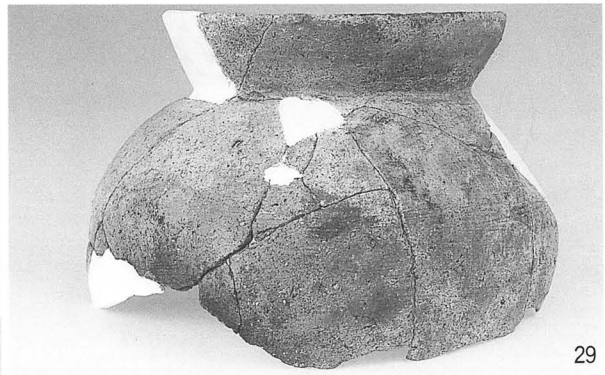
ＳＤ101（8・10～14）、ＳＯ101（15・16）、ＳＫ201（18・19・22）

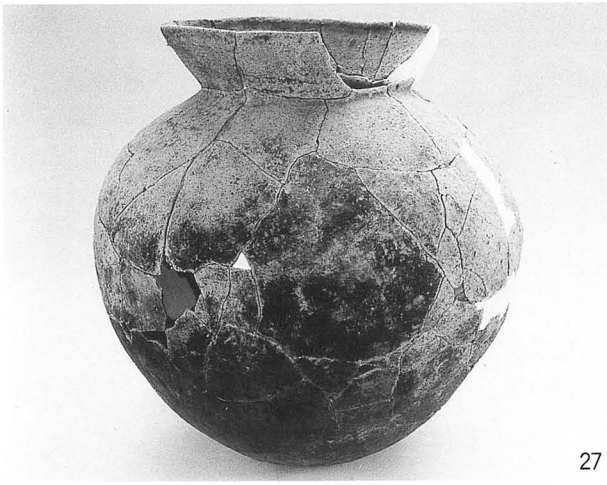

21

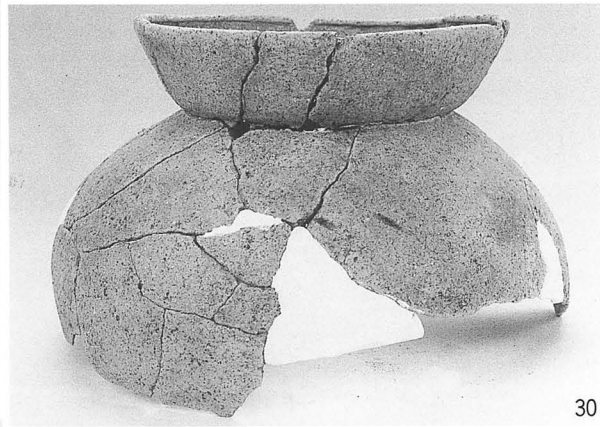

24


23

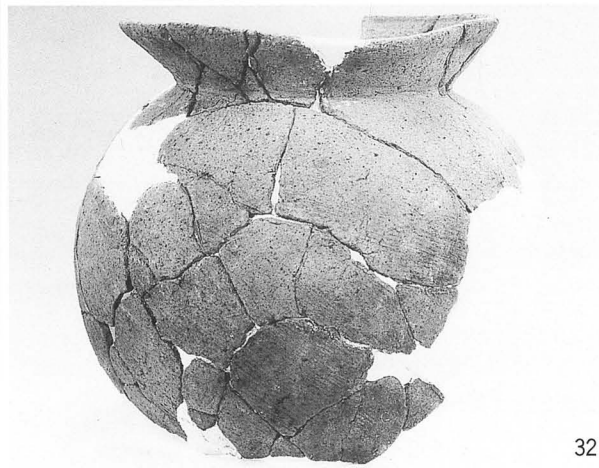

26


29


27


30

28


32

S K 201

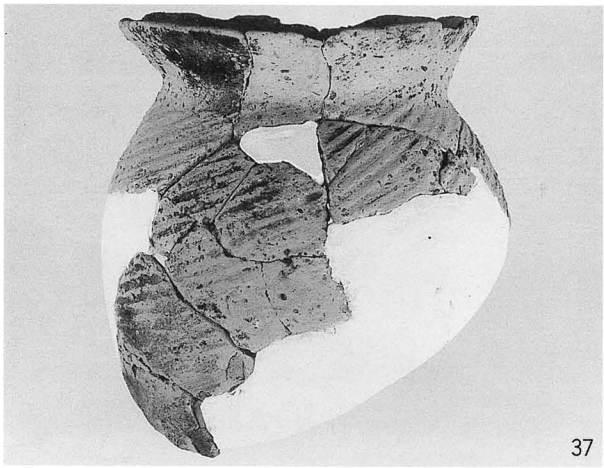
図版10

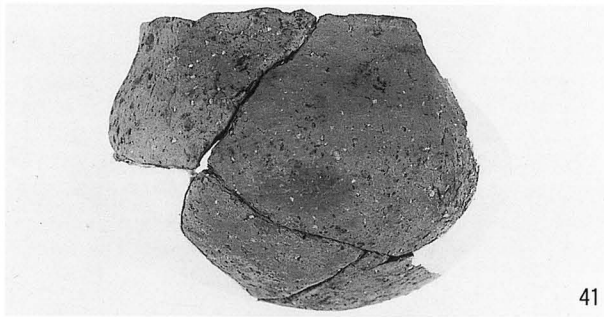
34

36

35

38

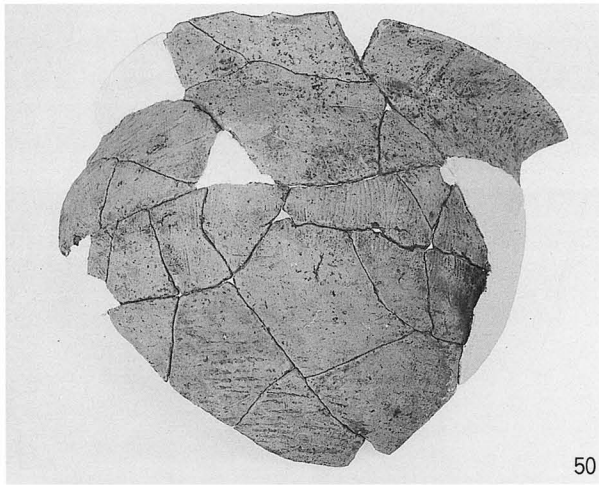

37

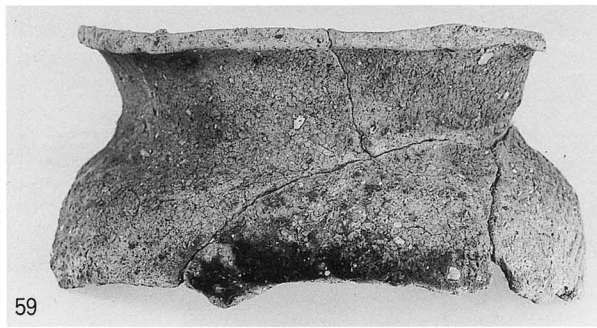

41

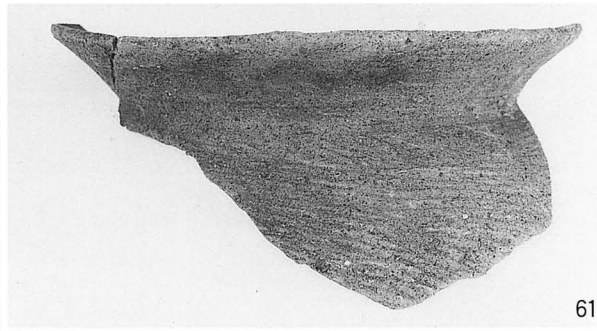
39

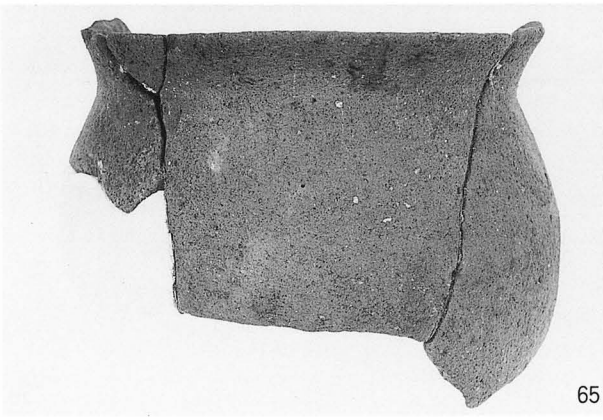
42

ＳＫ201（34～39）、ＳＫ202（41・42）



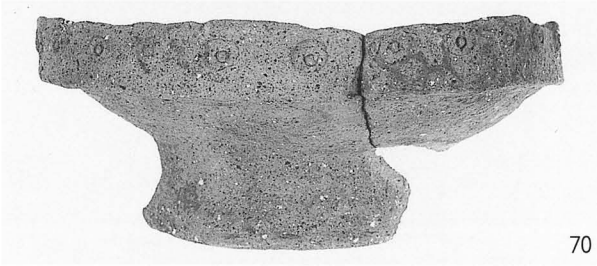


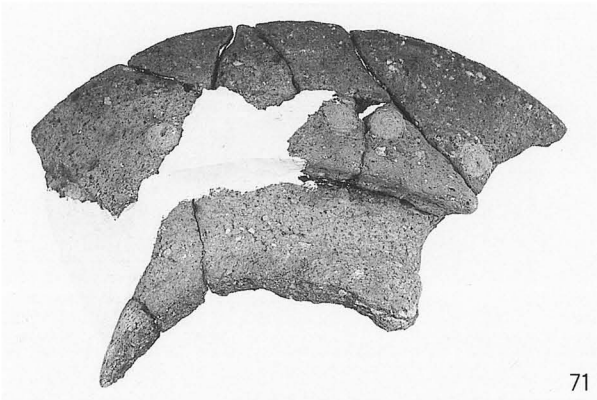




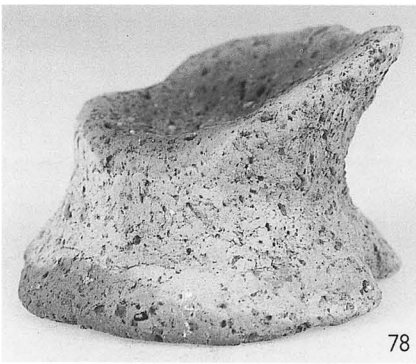
ＳＫ202（49・50）、ＳＫ204（51・58～61・65・68）

69


70

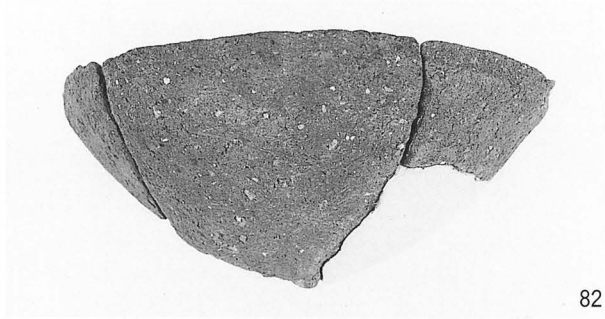

71

76


78

81

75


82

87

86

ＳＫ204（69～71・75・76・78・81・82）、ＳＫ206（86・87）

89

90

93

91

92

94

95

96

97

S K 206

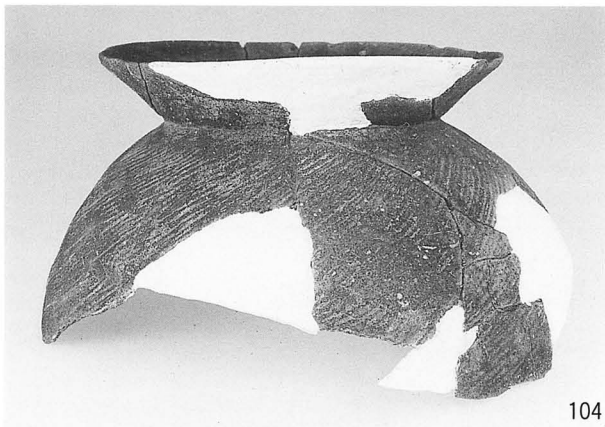
図版14

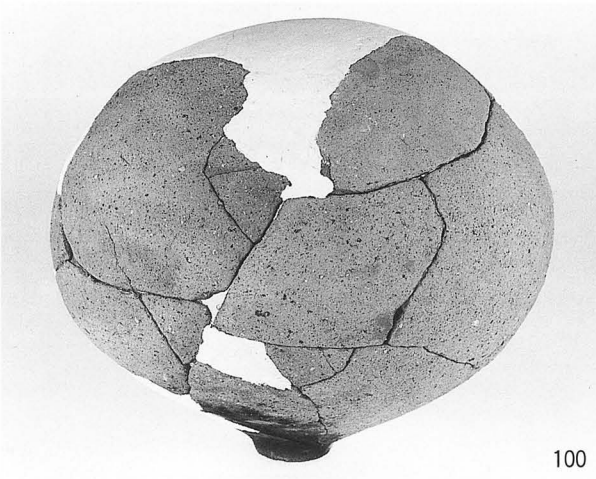
98

101

103

99

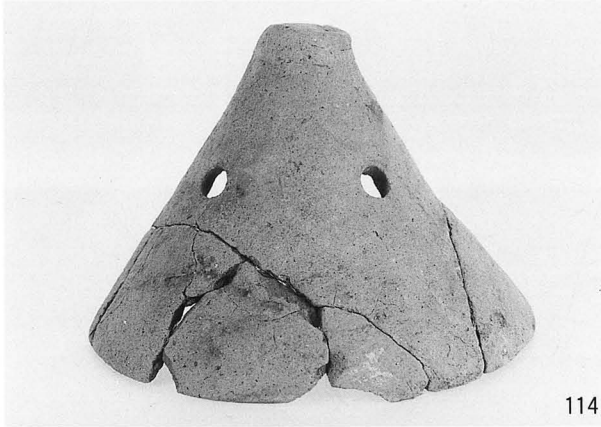

104


100

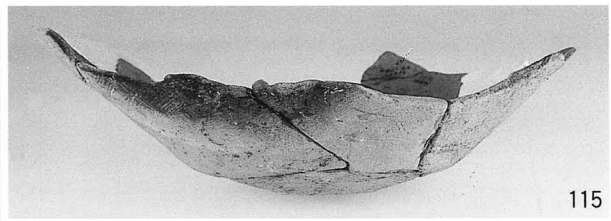
105

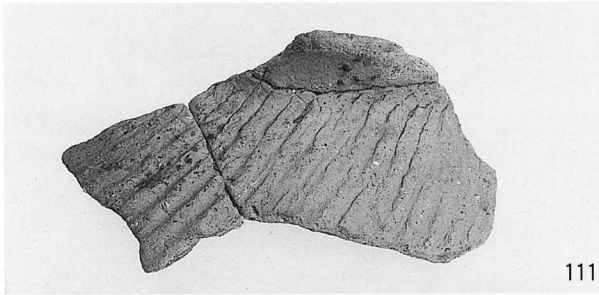
S K 206

108


114

110


115


111

116

112

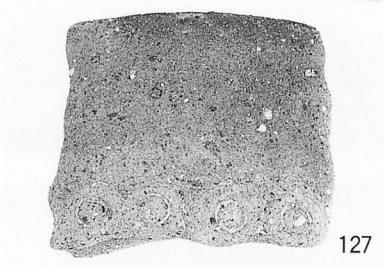
118

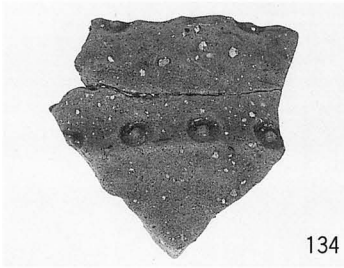
113

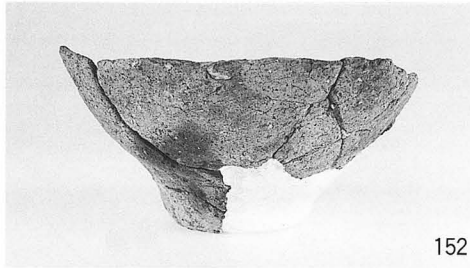
119

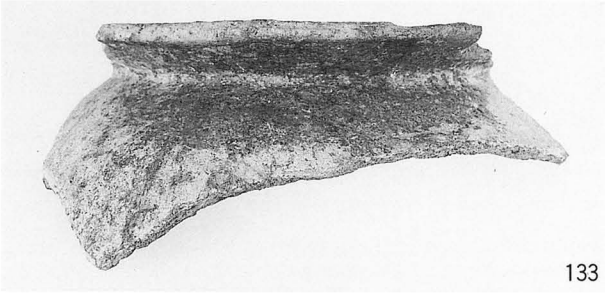
ＳＫ206（108・110～115）、ＳＫ207（116・118）、ＳＤ205（119）

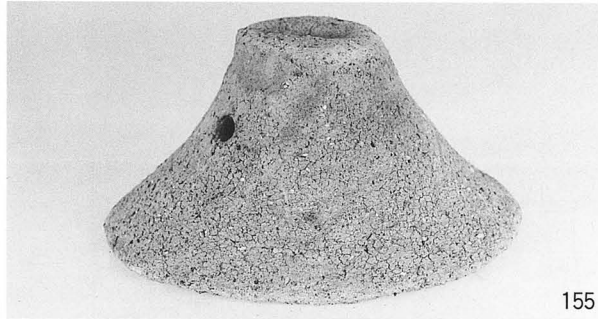
図版16


127


134

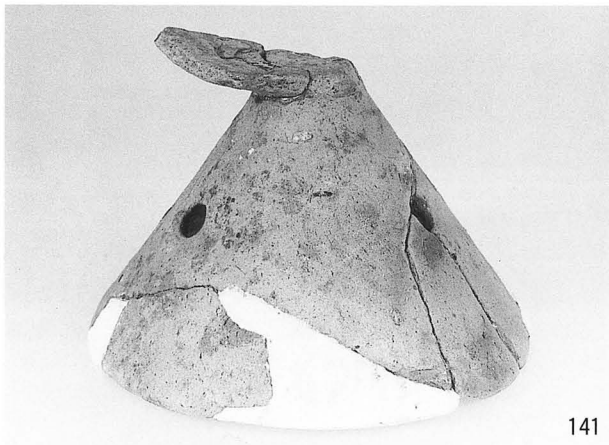

152


133

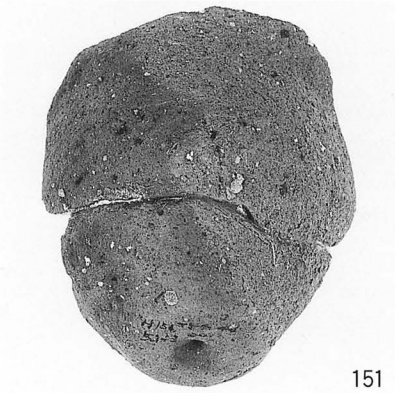

155

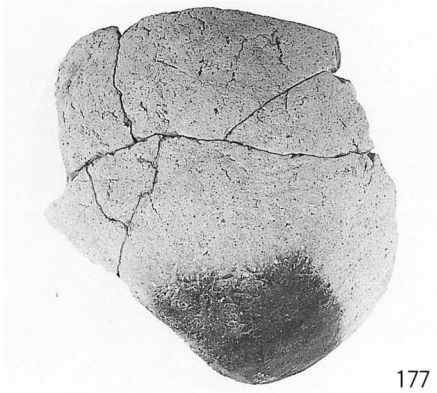
138

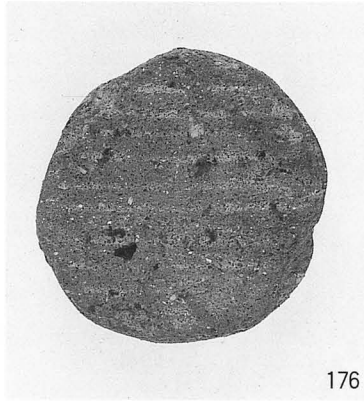
156


141

169


151


177


176

第４層（127）、第５層（他）

Ⅲ　中田遺跡第26次調査（ＮＴ94－26）

例　　言

1．本書は、八尾市中田1丁目20．21－2．22．33で実施した共同住宅建設工事に伴う中田遺跡第26次調査（ＮＴ94－26）の報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋14－3号）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が石山巖氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成６年７月４日から同年７月15日（実働10日間）にかけて岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約270㎡を測る。現地調査には、辻野優子・能勢尚樹・吉田由美恵が参加した。

1．内業整理は、遺物実測一宮崎寛子・村井俊子、トレースー辻野優子、遺物撮影および本文執筆・編集は岡田が行なった。

1．石材の鑑定については、八尾市立曙川小学校教諭　奥田尚氏に御教示を賜わった。

本　文　目　次

第１章　はじめに……89
第２章　調査の方法と経過……90
第３章　調査概要……91
　第１節　基本層序……91
　第２節　検出遺構と出土遺物……91
　第３節　出土遺物観察表……102
第４章　まとめ……104

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……89
第２図　調査地地区割り図……90
第３図　基本層序模式図……91
第４図　第１遺構平面図……92
第５図　第２遺構平面図……93
第６図　ＳＸ－101出土遺物実測図……94
第７図　ＳＥ－201平・断面図……94
第８図　ＳＥ－201出土木製品実測図……95
第９図　ＳＥ－201出土遺物実測図……95
第10図　ＳＥ－202平・断面図……96

第11図　ＳＥ－202出土遺物実測図……96
第12図　ＳＥ－203平・断面図……96
第13図　ＳＥ－203出土遺物実測図……97
第14図　ＳＰ－202出土遺物実測図……98
第15図　ＳＫ－301平・断面図……99
第16図　ＳＫ－301出土遺物実測図……100
第17図　第３層出土遺物実測図……100
第18図　第４層出土遺物実測図……101
第19図　第５層出土遺物実測図……101

表　目　次

第２遺構面　小穴（ＳＰ）一覧表……98

写　真　目　次

調査風景（南東から）……106

図　版　目　次

図版　一　　遺構面全景＜室町時代初頭＞（北から）
同上　ＳＸ－101（西から）
同上　ＳＸ－101（東から）
同上　ＳＸ－101西部セクション西壁（東から）
図版　二　　遺構面全景＜鎌倉時代＞（北から）
同上（南から）
同上　北部（東から）
同上　中央東部（東から）
同上　南東部（北西から）

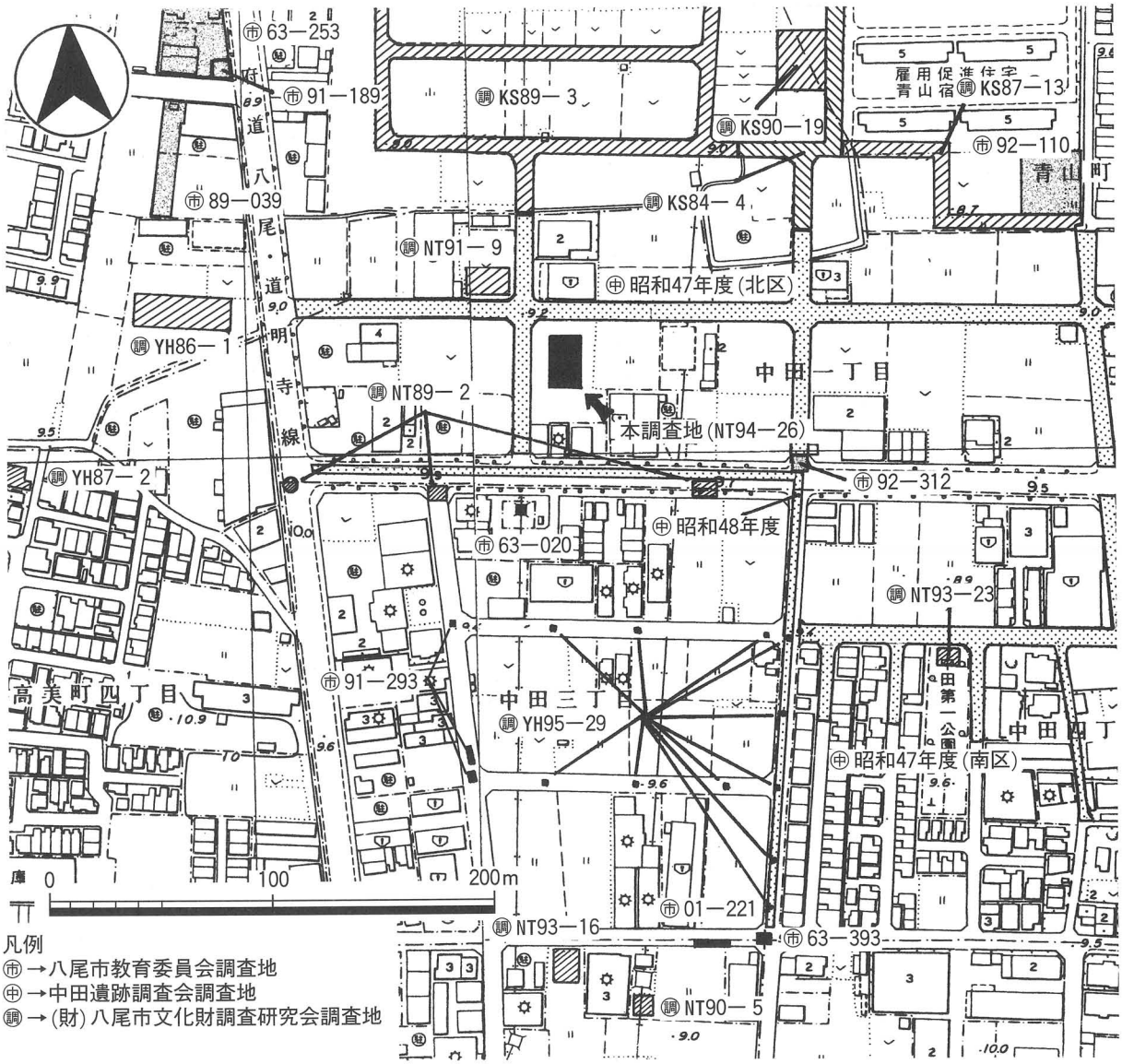
図版　三　　ＳＥ－201上部（南から）
同上　完掘断ち割り状況（南から）

図版　四　　ＳＥ－202（南から）
　　同上　井戸底部（南から）
図版　五　　ＳＥ－203　上部（東から）
　　同上　完掘断ち割り状況（東から）
図版　六　　ＳＫ－301（南東から）
　　同上　遺物出土状況（南東から）
図版　七　　調査区北壁（南西から）
　　調査区近景（北東から）
図版　八　　ＳＸ－101、ＳＥ－201、ＳＥ－202出土遺物
図版　九　　ＳＥ－203出土遺物
図版一〇　　ＳＥ－203、ＳＰ－202、ＳＫ－301、第３層出土遺物
図版一一　　第３層、第４層出土遺物
図版一二　　第４層、第５層、ＳＥ－201＜木製品＞出土遺物
　　遺構実測風景（北東から）

第１章　はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目付近がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置する。今回の調査地は当遺跡内の北西部にあたる。当遺跡の周辺には、北に小阪合遺跡、南に東弓削遺跡、西に矢作遺跡が隣接する。

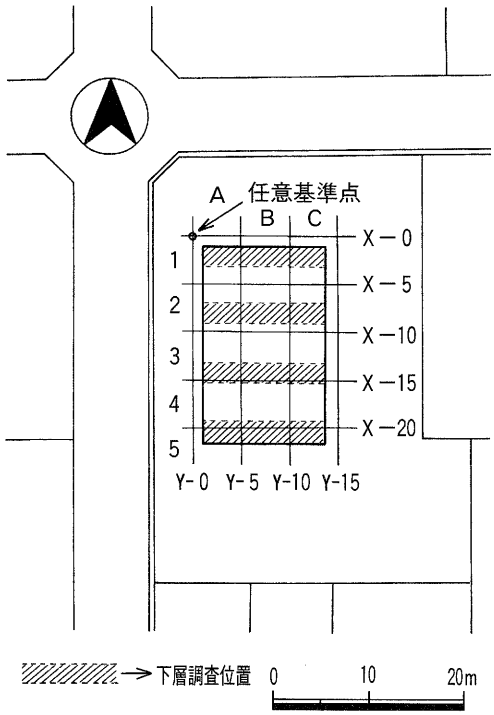
当遺跡内における考古学的調査は、昭和46年に中田遺跡調査会によって実施された土地区画整理事業に伴う調査に端を発し、現在まで大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会においても数多くの調査[註1]が実施されている。今回の調査地付近の既往調査をみると、先述の土地区画整理事業に伴う調査が西接（第３地区）および北接（第４地区）する道路にあたり、ここでは鎌倉時代後半頃に比定される溝・柱痕・井戸・土坑といった集落に伴う遺構が検出されている。



第１図　調査地周辺図

さらに調査地南部に近接する東西に伸びる安中・教興寺線（道路）では、昭和46年２月～３月に大阪府教育委員会によって実施された道路築造工事に伴う調査[註2]で、古墳時代・奈良時代の集落に伴う井戸・溝・ピット（柱穴）が検出されている。さらに同道路内では昭和47年に中田遺跡調査会によって実施された電話地下線埋設工事に伴う調査[註3]で、弥生時代後期～古墳時代前期の自然河川と平安時代～鎌倉時代頃の土坑・落ち込み・廃瓦集積遺構が検出されている。調査地から北西へ約30mの地点では、平成３年に当調査研究会が実施した共同住宅建設工事に伴う第９次調査[註4]が実施されており、鎌倉時代の集落に伴う土坑溝・小穴と江戸時代の農耕に関連するとみられる小溝群が検出されている。以上今回の調査地周辺における既往の調査結果を概観すると、当地一帯は概ね弥生時代後期～古墳時代前期と平安時代～鎌倉時代の二時期の生活面の存在が確認できる。既往調査結果のなかで特筆すべきものに平安時代～鎌倉時代に比定される廃瓦の集積遺構がある。報告によれば、廃瓦集積遺構以外にもこのあたりに寺院の存在したことを示唆する柱穴が確認されている[註1]ことと「ゼンボウジ」という小字名が近辺に伝えられていることから、調査地から南東へ約400m地点の中田4丁目に現存する善坊寺（浄土眞宗本願寺派淨雲山　善坊寺）の旧地ではなかったかと推測されている。

第２章　調査の方法と経過



第２図　調査地地区割り図

調査区の規模は、共同住宅建築基礎工事によって破壊される部分の南北長21m×東西幅13mの面積約270m²を測る。調査区内の地区割りについては、調査地北西隅に設けた任意の基準点から１区画５m四方として東西をアルファベッド（西からＡ～Ｃ）、南北を算用数字（北から１～５）で示し、１Ａ区～６Ｃ区と呼称した。掘削は八尾市教育委員会の遺構確認調査資料を参考に、現地表から0.3m前後の現耕作土および床土を重機によって排除した後、以下0.5m前後の土層を人力によって層毎に掘削・精査し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査終了後は調査区内に東西長13m×南北幅２mのトレンチを南北間約４mおきに４箇所設定し、最終遺構面からさらに0.5m前後の下層確認を実施した。

第３章　調査概要

第１節　基本層序

調査区内において普遍的に堆積する７層を抽出して基本層序とした。現地表の標高値はT.P.＋9.0m前後を測る。第１層～第５層の各層についてはフラットな堆積様相を呈するが、下層確認も含め標高8.3m前後において、調査区の東半部から西方に向かって緩やかに落ち込む埋没河川あるいは洪水層ともみられる砂層の堆積（第７層）を確認した。

第１層：7.5YR4/2灰褐色シルト。層厚20cm前後。現代の耕作土にあたる。上面の標高は9.0m前後を測る。

第２層：5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト。層厚５～10cm。上層の耕作土に付随する床土である。

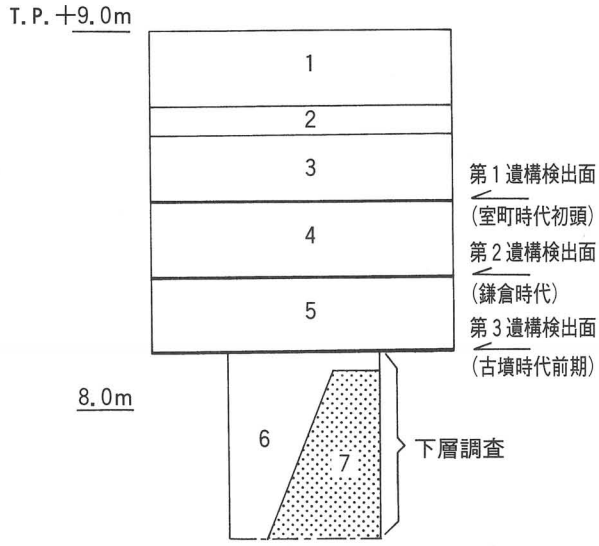
第３層：7.5YR6/4にぶい橙色砂質シルト。層厚15～20cm。国産陶磁器類等の近世遺物を包含する。

第４層：10YR3/4暗褐色砂礫混じり粘土質シルト。層厚20cm前後。鎌倉時代～室町時代初頭の遺物を包含する。本層の上面が第1遺構検出面（室町時代初頭）になる。検出面の標高は8.7m前後を測る。

第５層：10YR5/6黄褐色粘土質シルト。層厚５～30cm。調査区の北西部で古墳時代～奈良時代の遺物が散見されるが、それ以外の地点ではひじょうに稀薄な堆積層となり、遺物はほとんど含まない。本層の上面が第2遺構検出面（鎌倉時代2次面）である。検出面の標高は8.5m前後を測る。

第６層：10YR6/2灰黄褐色極細粒砂。層厚５～50cm以上。本層は調査区の中央を境に東側は希薄であり、西側へ向かうほどに厚く堆積する。本層の上面が第３遺構検出面（古墳時代前期）になる。検出面の標高は8.3m前後を測る。

第７層：N7/灰白色極粗粒砂～細礫。層厚50cm以上。細礫を多量に含む本層は、河川の水流の激しさを示している。この埋没河川の深度については、下層確認でもみることはできず、かなり大型の規模のものであると思われる。周辺の既往の調査結果から、弥生時代後期頃に埋没したものと思われる。

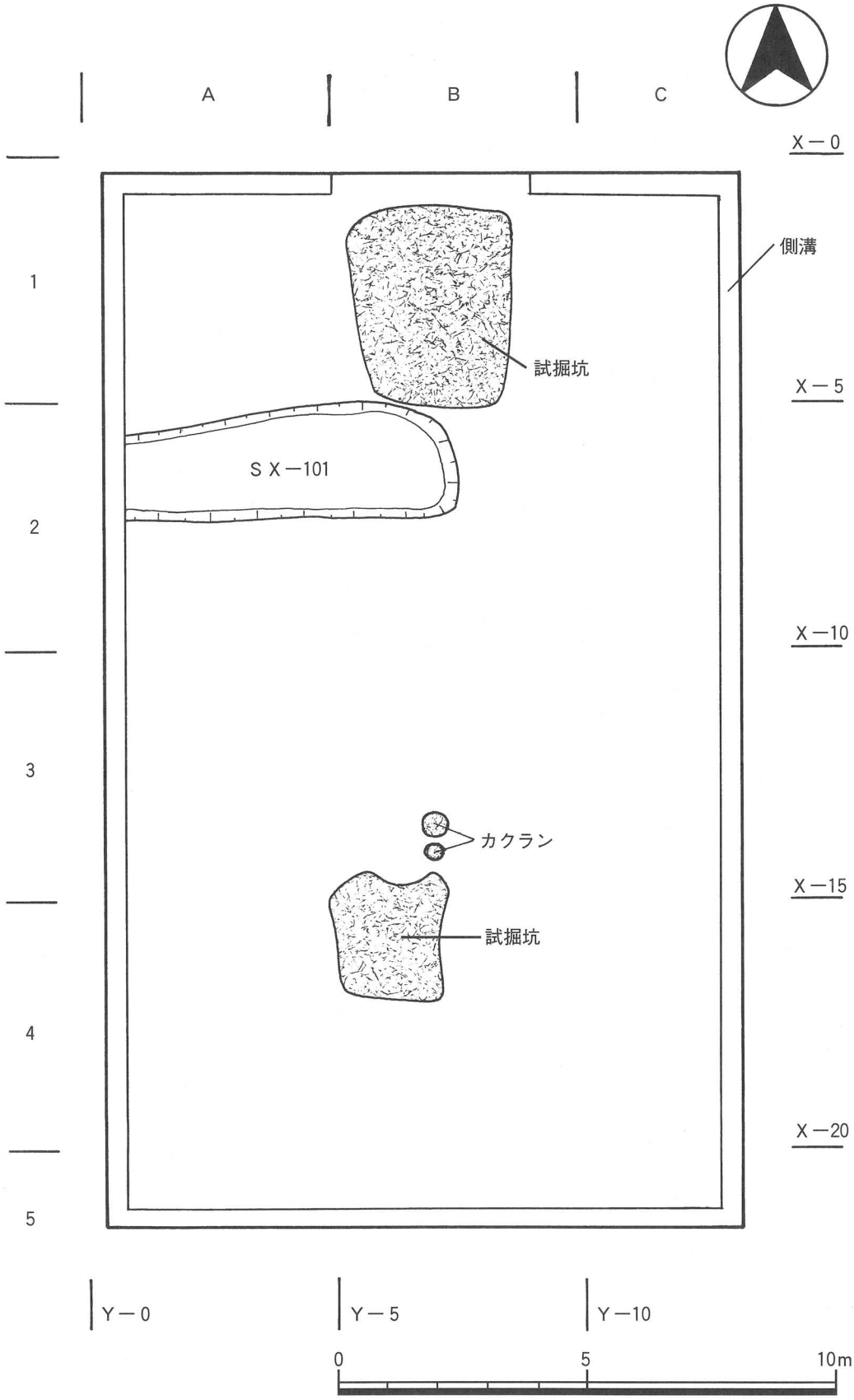


〔層　序〕
1．7.5YR4/2灰褐色シルト
2．５Y6/2灰オリーブ色砂質シルト
3．7.5YR6/4にぶい橙色砂質シルト
4．10YR3/4暗褐色砂礫混じり粘土質シルト
5．10YR5/6黄褐色粘土質シルト
6．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂
7．N7/　灰白色極細粒砂～細礫

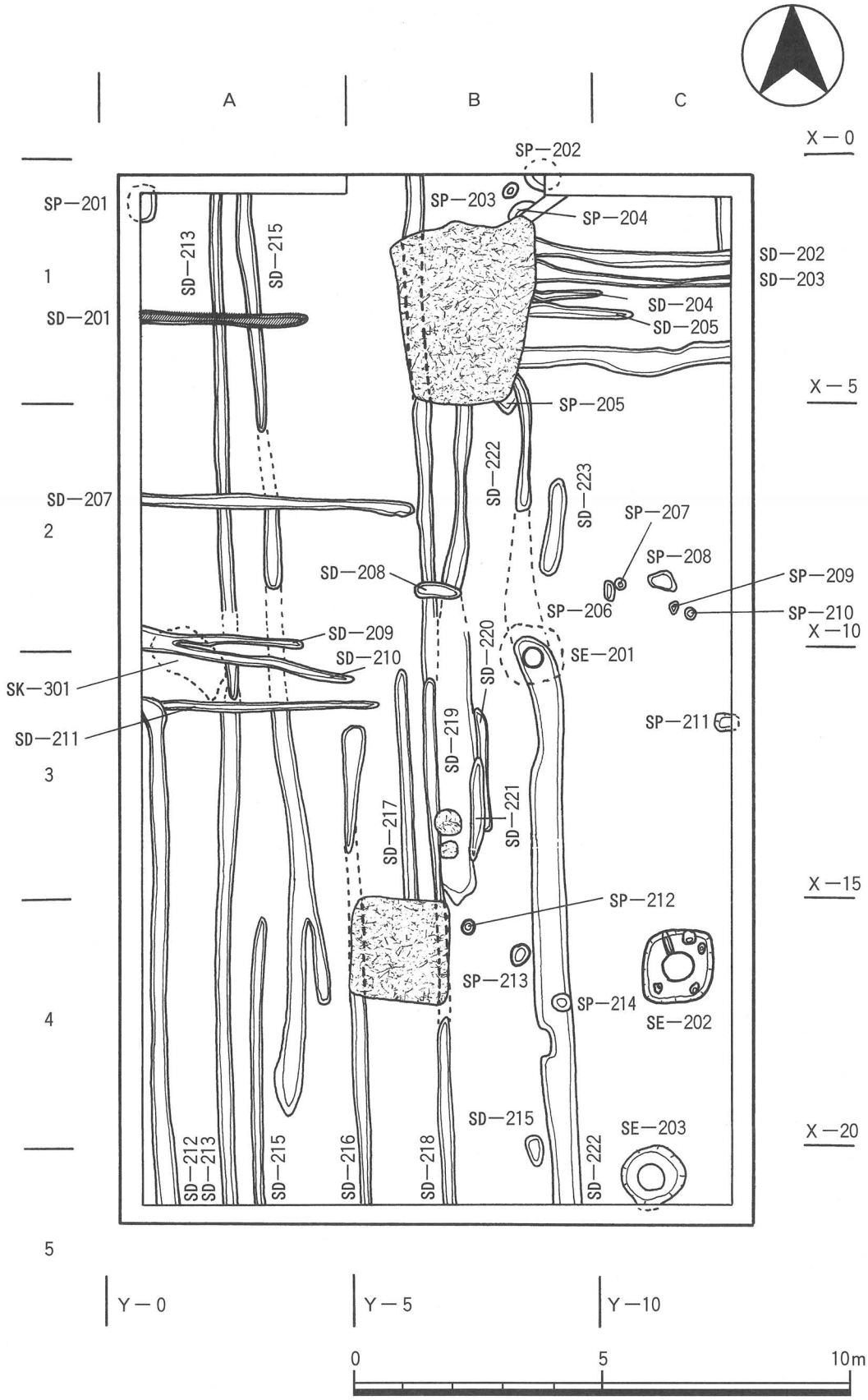
第３図　基本層序模式図

第２節　検出遺構と出土遺物

今回の調査では、第１遺構面では室町時代初頭の不明遺構1箇所（ＳＸ－101）、第２遺構面では同一面において鎌倉時代中葉～後葉の小溝23条（ＳＤ－201～223）と鎌倉時代前葉～中葉の井


A
B
C
X－0
X－5
X－10
X－15
X－20
1
2
3
4
5
側溝
試掘坑
SX－101
カクラン
試掘坑
Y－0
Y－5
Y－10
0
5
10m

第４図　第１遺構平面図


A
B
C
X－0
X－5
X－10
X－15
X－20
Y－0
Y－5
Y－10
1
2
3
4
5
SP－201
SP－202
SP－203
SP－204
SP－205
SP－206
SP－207
SP－208
SP－209
SP－210
SP－211
SP－212
SP－213
SP－214
SD－201
SD－202
SD－203
SD－204
SD－205
SD－207
SD－208
SD－209
SD－210
SD－211
SD－212
SD－213
SD－215
SD－216
SD－217
SD－218
SD－219
SD－220
SD－221
SD－222
SD－223
SK－301
SE－201
SE－202
SE－203
0
5
10m

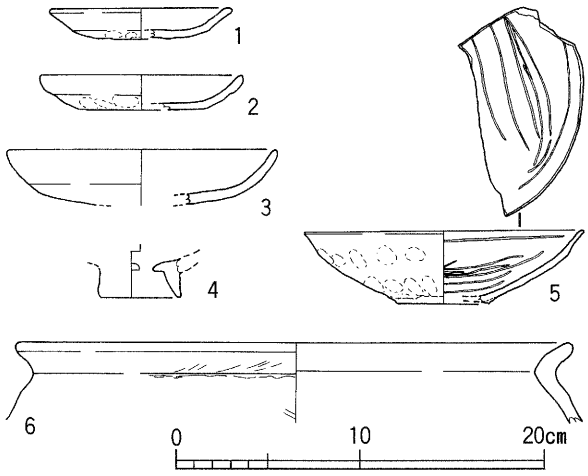
第５図　第２遺構平面図

戸３基（ＳＥ－201～203）・小穴15個（ＳＰ－201～215)、第３遺構面では古墳時代前期の土坑１基（ＳＫ－301）の４時期の遺構面を検出した。以下、各時期毎に概説する。

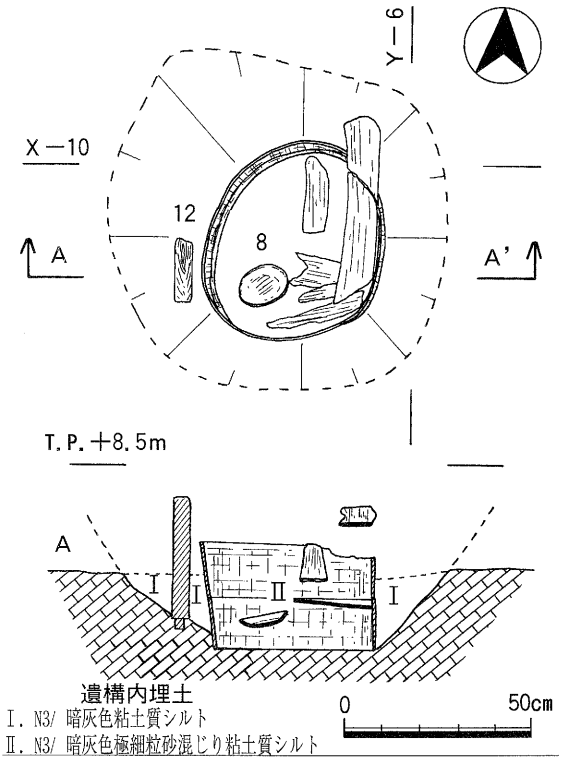
＜第１遺構面＞

不明遺構　ＳＸ－101

調査区北西部２Ａ～２Ｂ区で検出した。東西方向に長い土坑状を呈する遺構で、西部は調査区外に至っているため全容は不明である。検出規模は、南北幅1.8～2.5m・東西長7.0m前後・深さ0.3m前後を測る。遺構内埋土は上から第1層N3/暗灰色シルト・第２層7.5YR3/3暗褐色粘土質シルトの２層に分層できる。遺物は第１層内から出土し、そのうち図化できたものは土師器小皿２点（１・２)、土師器中皿１点（３)、台付皿１点（４)、瓦器椀１点（５)、羽釜１点（６）がある。土師器小皿（１・２）は双方とも平底の底部からヨコナデ調整される口縁部に至り、端部は丸く納める。土師器中皿（３）は、内彎気味に伸びる口縁部で端部はややつまみ上げる。（４）はその形態から台付皿と思われるもので、底部のほぼ中央には穿孔が認められる。（５）の瓦器椀は形骸化した高台で器高が低く、体部内面のヘラミガキは粗い。森島編年のⅣ－１期頃[註5]に比定されよう。（６）の羽釜は、肩部と口縁部の境目に明瞭な接合痕がみられ、端部は丸く納める。遺構から出土した遺物は図化できなかったものも含め、時期的に13世紀後葉～14世紀前葉に比定される。



第６図　ＳＸ－101出土遺物実測図



第７図　ＳＥ－201平・断面図

＜第２遺構面＞

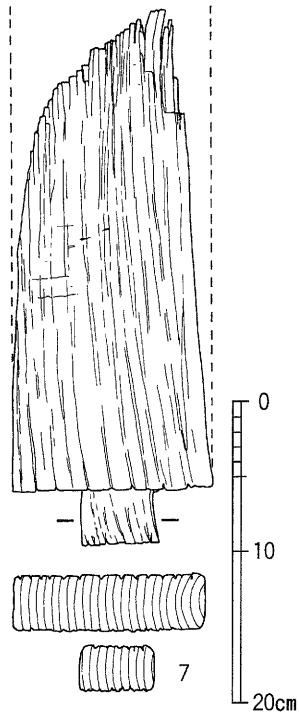
小溝（ＳＤ）

調査区のほぼ全域で東西方向11条（ＳＤ－201～211)、南北方向12条（ＳＤ－212～223)の総数24条を検出した。これらの小溝はその検出状況から、耕地化に伴う鋤溝跡と考えられる。規模は幅0.2～0.8m・深さ0.1～0.2mを測る。断面形はほとんどＵ字形を呈する。溝内埋土は、ＳＤ－201の炭化物を多量に含むN2/黒色粘土質シルトを除くとすべて10YR3/4暗褐色または7.5YR4/2灰褐色粘土質シルトの単一層である。内部からは土師器・須恵器・瓦器の小破片が少量出土した。そのなかで図化できるものはなかったが、時期的には鎌倉時代中葉～後葉に比定されるものと思われる。

井戸（ＳＥ）

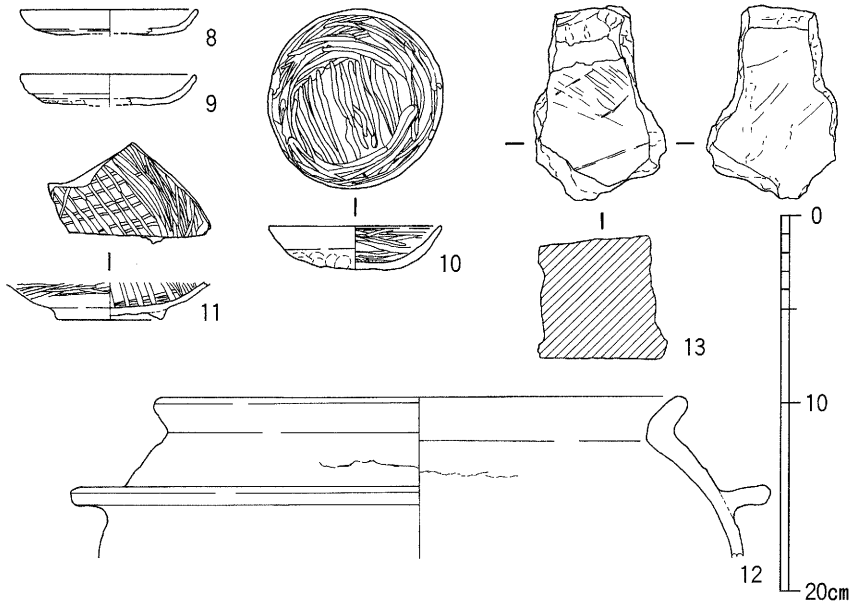
ＳＥ－201

調査区中央やや東寄りの２Ｂ・３Ｂ区の境界付近で検出した曲物井戸である。上面の掘方形状は小溝（ＳＤ－222）によって削平されているため詳細については不明である。検出時点での規模は掘方上面径0.9m・深さ0.4mを測る。曲物は、直径0.5m・高さ0.15mのものを二段積み重ねられていたが、曲物内に落ち込んでいる数枚の板状の断片から、曲物の上部にはさらに板組みの井戸側（桶？）が積み重ねられていたと考えられる。また、曲物の西側には長さ36cm・幅13.5cm・厚さ3.5cmの一端にホゾを有する建築部材（７）が突立てられていた。おそらく曲物枠を補強する目的で転用されたものと思われる。遺構内埋土は、曲物内－N3/暗灰色極細粒砂混じり粘土質シルト、掘方内－N3/暗灰色粘土質シルトである。遺物は曲物内部から瓦器・土師器・羽釜・砥石が出土した。そのうち図化できたものは、土師器小皿２点（８・９）・瓦器小皿１点（10）・瓦器椀１点（11）・羽釜１点（12）・砥石１点（13）である。土師器小皿（８・９）はいずれも平底の底部から内彎気味に伸びる口縁部を呈するが、（９）の方が深身をもつ。瓦器小皿（10）はやや深みのあるもので、内面には周密なヘラミガキが施される。この瓦器皿は唯一完形品である。12世紀後葉の所産であろう。瓦器椀（11）は、底部に逆三角形の高台が貼り付けられ、見込みには格子状の暗文が施される。森島編年[註5]のⅡ－３期に比定されるもので、12世紀後葉の所産であろう。



第８図　ＳＥ－201出土木製品実測図

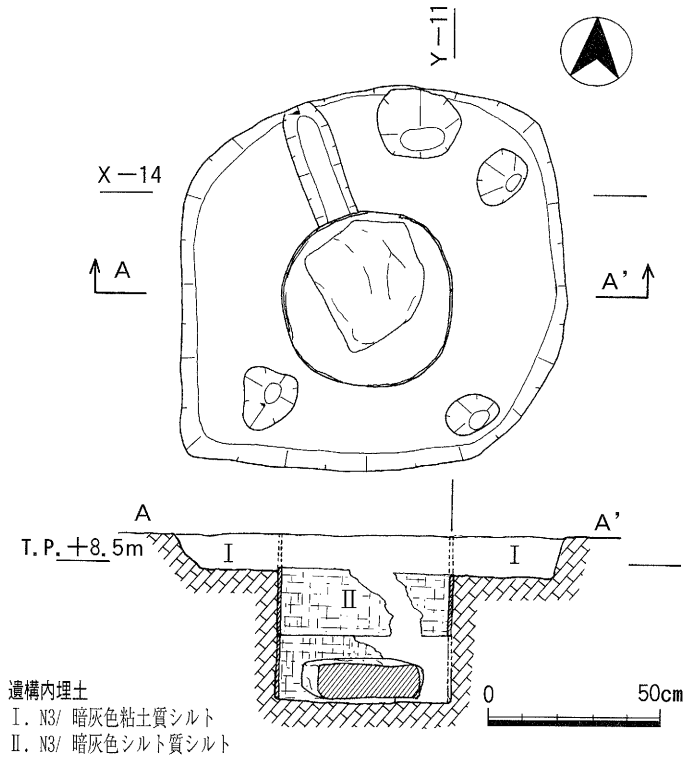
(12)の羽釜は、口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部および鍔の先端部は丸く納める。森島編年[註6]によるＡ型式に属するものとみられ、時期的に12世紀後葉～13世紀初頭頃に位置付けられよう。(13)は7.5YR2/3極暗赤褐色を呈した安山岩を素材とした砥石で、表裏両面に擦痕が認められる。



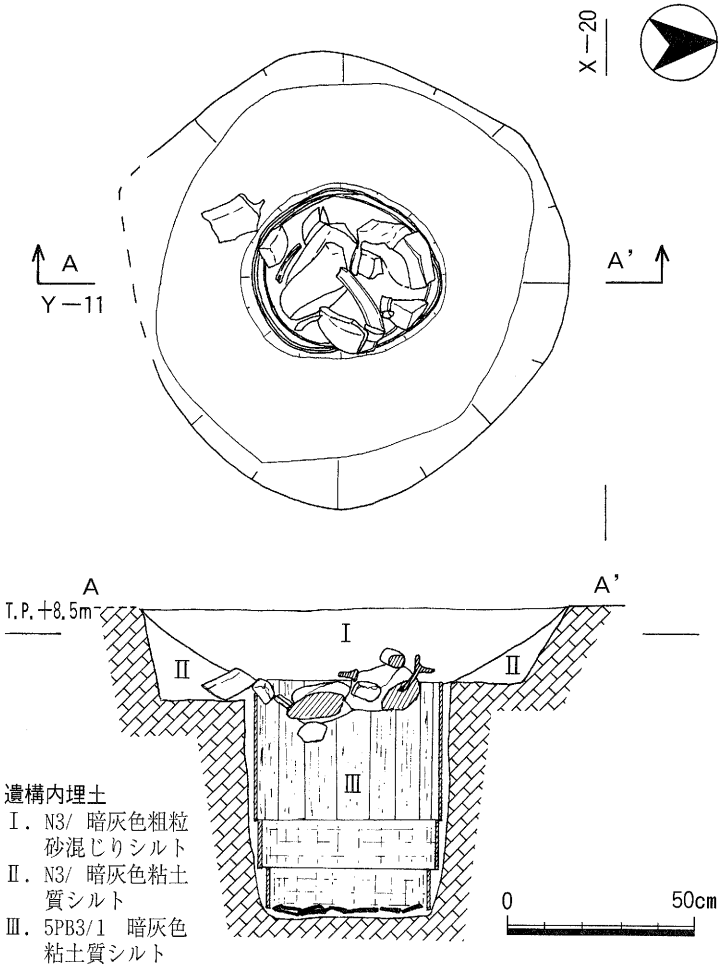
第９図　ＳＥ－201出土遺物実測図

ＳＥ－202

調査区南東部の４Ｃ区で検出した。曲物二段を積み重ねた井戸で、掘方の上面形状は隅丸方形を呈する。規模は掘方上面が一辺1.0～1.1m・深さ0.5mを測る。井戸側の周辺には径0.3～0.4m・探さ0.1m前後の柱穴状の窪み４箇所と、長さ0.5m・幅0.3m・深さ0.1m前後の溝状の掘り

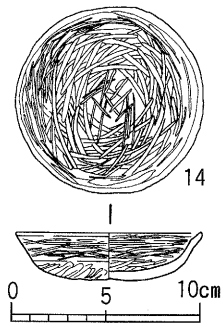


第10図　ＳＥ－202平・断面図



第12図　ＳＥ－203平・断面図

込み１条が確認できたことから、柱穴が覆屋等の上部構造に伴う可能性が高い。曲物の法量は、２点とも径50cm・高さ18cmを測る。遺構内埋土は地物内－N3/暗灰色シルト質粘土、掘方内－N3/暗灰色粘土質シルトである。遺物は曲物内から瓦器・土師器の小破片に混じって１点だけ完形品の瓦器小皿（14）が出土した。形態は内彎気味に伸びる口縁部につまみ上げの端部を呈するもので、見込みには細筋のヘラミガキが圏線状に周密に施される。



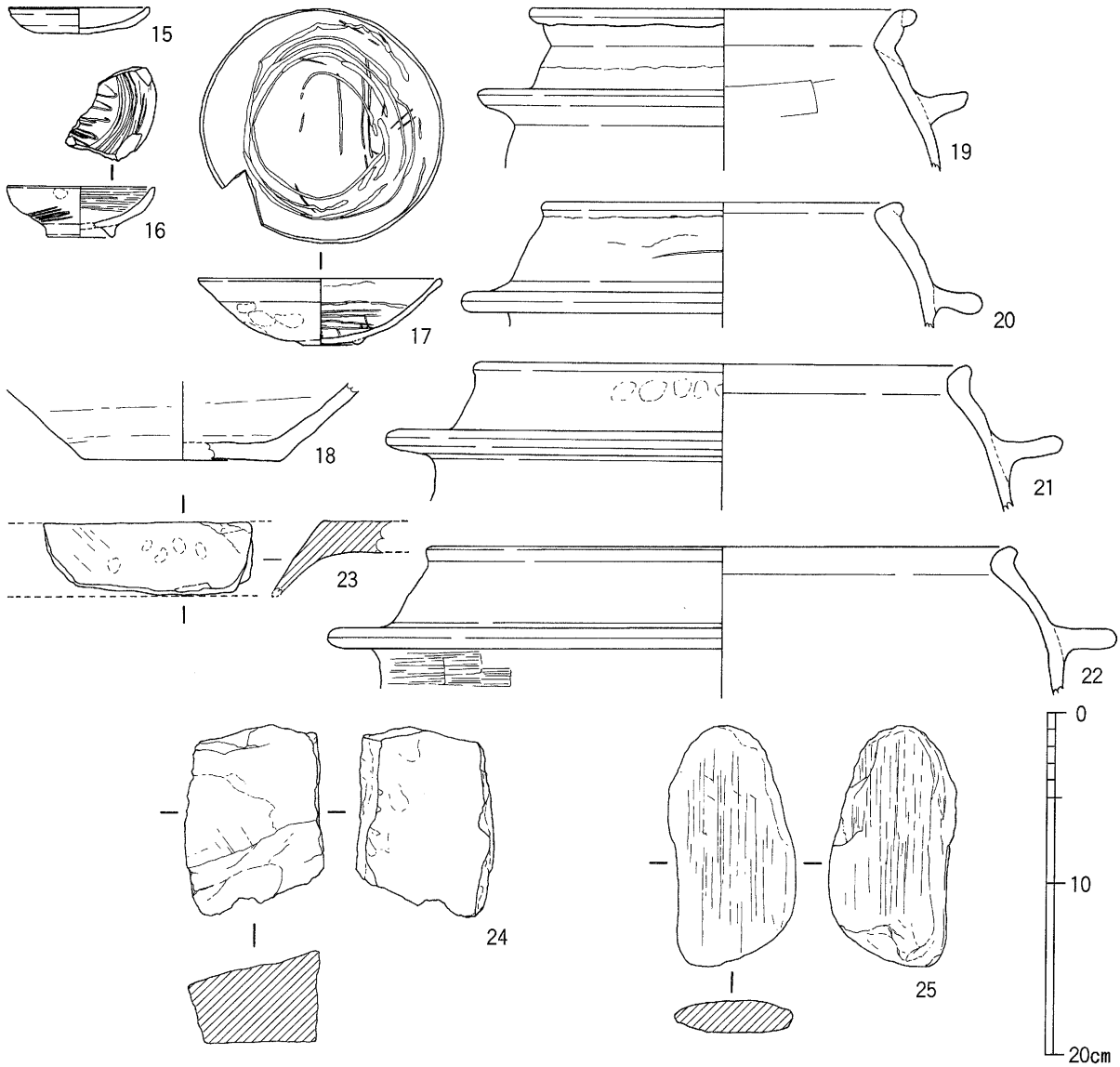
第11図　ＳＥ－202出土遺物実測図

ＳＥ－301出土の（９）と同様に12世紀後葉頃の所産であろう。土器以外では最深部から一辺40cm前後・厚さ10cmのやや方形で扁平な巨礫１点がみられた。

ＳＥ－203

調査区南東隅の５Ｃ区で検出した。曲物と桶枠を伴った井戸である。掘方上面の一部は東西側溝によって削平してしまったが、検出状況から見てほぼ円形を呈するものと思われる。規模は掘方上面径1.2m・深さ0.8mを測る。桶枠は二段の曲物の上に積み重ねられているが、遺存状況はひじょうに悪く原形を留めない。また、井戸底には須恵器甕の体部片が数枚敷き詰められ、清水を保持しようとした工夫が窺われる。桶枠の法量は推定径50cm前後・残存長38cmを測る。曲物の高さはともに13cmを測るが、径は上段の方が48cm・下段の方が42cmと上段の方が上回る。遺構内埋土は曲物－5PB3/1暗青灰色粘

土質シルト、掘方内－上層N3/暗灰色粗粒砂混じりシルト・下層N3/暗灰色粘土質シルトである。遺物は曲物内最深部から完形の土師器小皿1点と桶枠内上位から瓦器・土師器・羽釜・砥石が出土したが、そのうち完形の土師器小皿については廃絶時の祭祀用であろう。出土遺物の内図化できたものは、土師器小皿１点（15）・瓦器小椀１点（16）・瓦器椀１点（17）・須恵器鉢１点（18）・羽釜４点（19～22）・埴輪１点（23）・砥石２点（24・25）である。（15）の土師器小皿は口縁部が底部から直線的に張り出すもので、口縁端部は「面取り」が施される。（18）の瓦器小椀には断面形が逆三角形を呈する高台が貼り付けられ、見込みにはジグザグ状の暗文を施す。12世紀後半頃の所産と思われる。（17）の瓦器椀は断面形が半円形を呈する高台が貼り付けられ、体部内面の圏線状のヘラミガキは粗い。Ⅳ－１期頃に比定されよう。（18）は東播系の捏鉢で、内外面共に回転ナデによって成形・調整される。（19）の羽釜は、外反する口縁部からさらに外傾する端部を付け加える。（20～22）の羽釜は内彎する口縁部から短く外に折り返して丸くおさめる端部が付く。以上４点の羽釜についてはその形態から13世紀中葉頃の所産とみられる。（23）は形象埴輪の一部とみられ、推測ではあるが家形埴輪の床の外縁部分にあたるものではないかと



第13図　ＳＥ－203出土遺物実測図

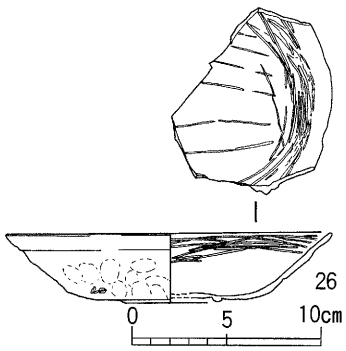
思われる。(24) は安山岩製、(25) は偏平な結晶片岩製の砥石で双方とも表裏に刻線状の擦痕が確認される。

第２遺跡構面　小穴（ＳＰ）一覧表

遺構番号	地点	長径	短径	深さ	断面形	遺構内埋土	備　考
ＳＰ-201	1A	50	—	7～15	不　明	暗褐色 (7.5YR3/4) シルト	北部及び西部は側溝によって削平
ＳＰ-202	1B	37	—	9	椀　形	灰褐色 (7.5YR2/4) シルト	北部及び東部は側溝によって削平
ＳＰ-203	1B	16	—	5	椀　形	同上	
ＳＰ-204	1B	37	—	10	不　明	同上	南部及び東部は側溝によって削平
ＳＰ-205	2B	55	—	11	不　明	同上	北部を試掘、東部をＳＤ-222によって削平
ＳＰ-206	2C	30	24	15	逆台形	暗褐色 (7.5YR3/4) シルト	
ＳＰ-207	2C	22	—	26	半円形	黒褐色 (7.5YR3/1) シルト	
ＳＰ-208	2C	57	38	38	半円形	上層－黒褐色 (7.5YR3/1) シルト 下層－暗灰色 (N3/) 粘土質シルト	
ＳＰ-209	2C	23	—	29	逆台形	黒褐色 (7.5YR3/1) シルト	
ＳＰ-210	2C	20	—	10	皿　形	同上	
ＳＰ-211	3C	33	—	8	逆台形	同上	東部は側溝によって削平
ＳＰ-212	4B	25	—	5～10	皿　形	暗灰色 (N3/) 粘土質シルト	
ＳＰ-213	4B	40	45	20	椀　形	上層－黒褐色 (7.5YR3/1) シルト 下層－暗灰色 (N3/) 粘土質シルト	
ＳＰ-214	4B	31	40	36	半円形	黒褐色 (7.5YR3/1) シルト －炭化物含む－	ＳＤ-222内で検出
ＳＰ-215	5B	58	36	17	椀　形	暗褐色 (7.5YR3/4) シルト	

小穴（ＳＰ）

総数で15個（ＳＰ－201～215）検出した。その大部分は調査区の東寄りで、とくに井戸３基の周辺に集中する。上面の形状は円形・楕円形・不定形と多様である。規模は径20～30cm・深さ５～40cmを測る。遺構内埋土は一部を除いてそのほとんどが黒褐色～暗褐色系シルトの単一層である。これらの小穴に建物を構成するような規則制のある柱穴は見出せなかったが、検出状況から曲物井戸同様、後世の耕地化の際に削平を受けた住居址が示唆される。個々の法量等については一覧表（左）を参照されたい。遺物は各小穴から須恵器・瓦器・土師器の小破片が少量出土したが、その中で図化できたものはＳＰ－202からの瓦器椀１点（26）のみである。(26) の瓦器椀は断面が半円形の高台を貼り付ける器高の低い偏平なもので、見込みには数条の平行線ミガキを施す。森島編年のⅢ－３期に比定されると思われるが、復原推定口径が17.0cmと大きく、該期では類例の少ないものである。[註5]



第14図　ＳＰ－202出土遺物実測図

＜第３遺構面＞

土坑　ＳＫ－301

調査区中央西よりの２Ａ・３Ａ区の境界で検出した。上面の形状は北西－南東方向に長いやや楕円形を呈する。規模は最大長1.7m・最大幅0.85m・深さ0.35mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。遺構内埋土は上から第１層7.5YR3／1細粒砂混じり粘土質シルト・第２層N3／暗灰色細粒砂混じり粘土質シルト・第３層2.5Y4／2暗灰黄色粘土質シルトの３層に分層される。出土遺物はすべて図化可能で、第１層と第２層から古式土師器の壺２点（27・28）・甕３点（29～31）・高杯２点（32・33）と混入遺物である石器１点（34）の計８点が出土した。

(27) は小型短頸壺で球形の体部から短く外反する口縁部に至る。(28) は (27) より大きめの短頸壺の口縁で、内外面にハケメが施される。(29～31) はいわゆる布留式甕で、口縁端部が丸味をもって肥厚するほか体部がほぼ球形を呈し、体部の外面全体に不整方向のハケメが施され

る。また、体部内面はヘラケズリを基調とするが（29・30）のように肩部または底部に指頭圧痕を残すものもみられる。高杯は杯部が段を成すもの（32）と椀形のもの（33）があるが、型式的に（32）の方が一時期古い。以上の古式土師器類は布留式期新相段階に位置付けられる。[註7]（34）は皮なめし等に用いられるサヌカイト製の削器である。

＜遺構に伴わない出土遺物＞

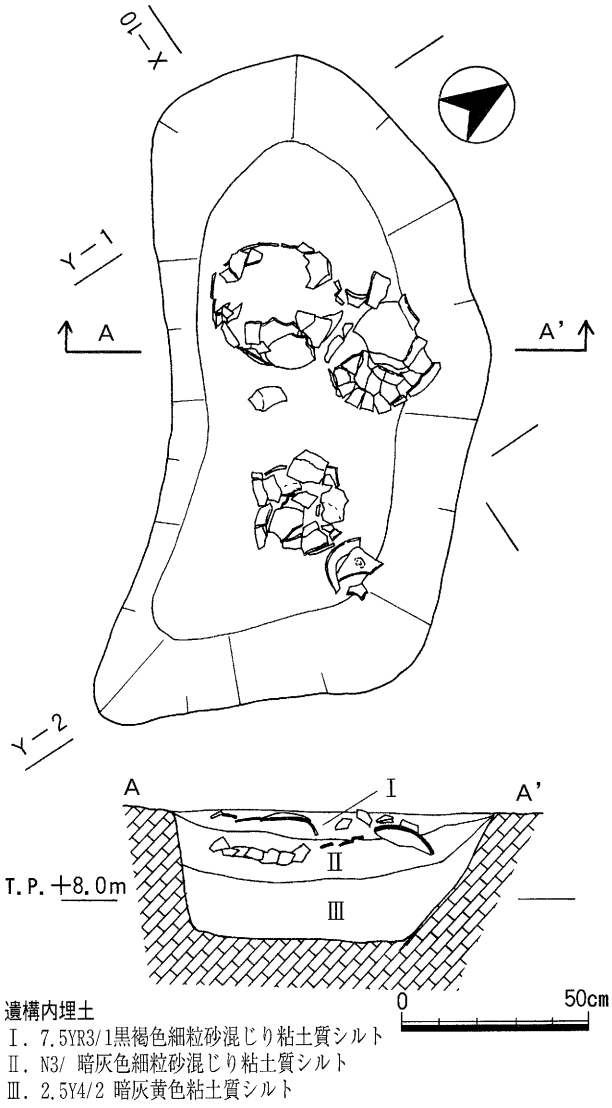
以下、遺構に伴わない出土遺物として層位別に図化できた遺物を記載する。

・第３層

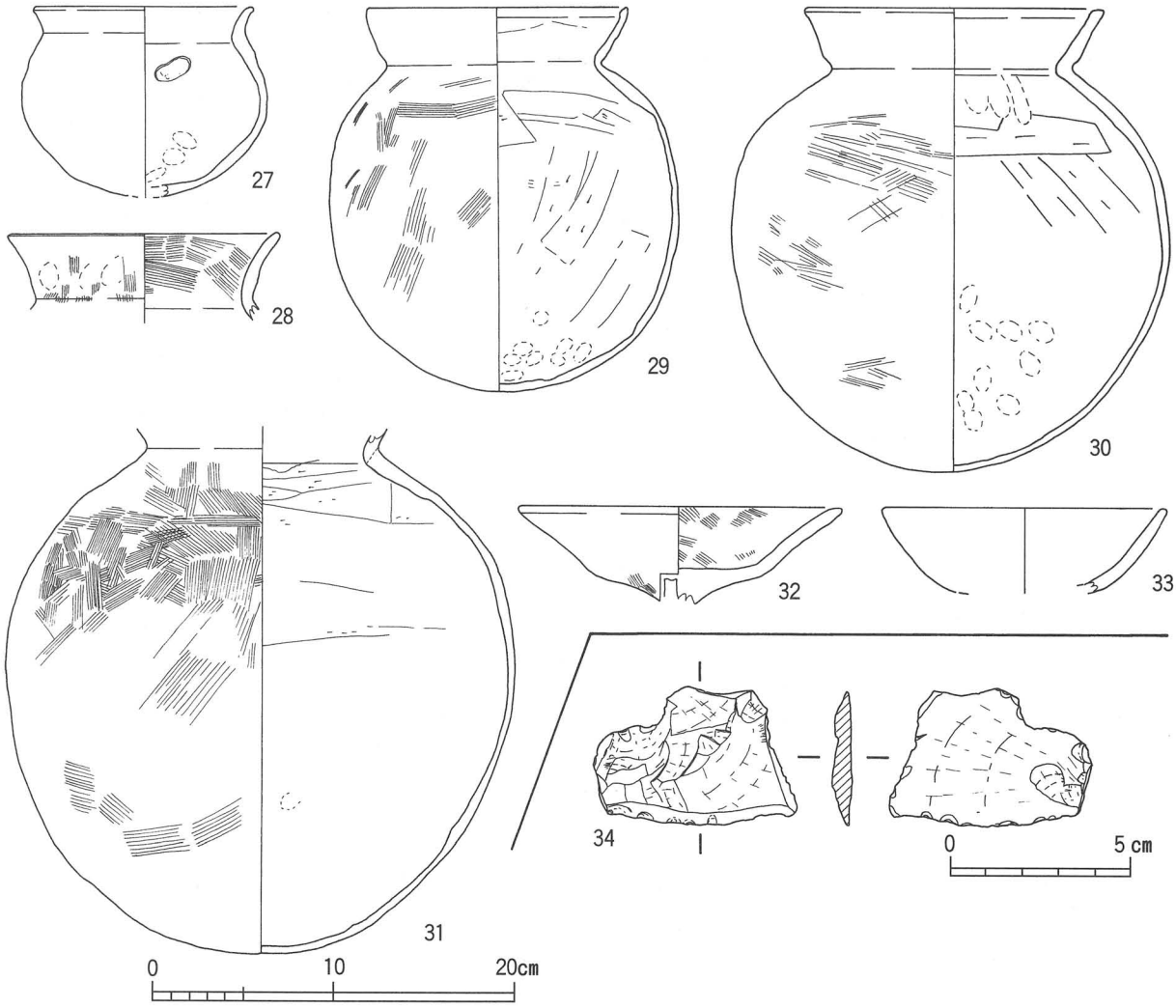
平瓦（35）と丸瓦（38）の2点があり、平瓦（35）の凸面には縄目のタタキ、丸瓦（38）の凹面には布圧痕が認められる。

・第４層

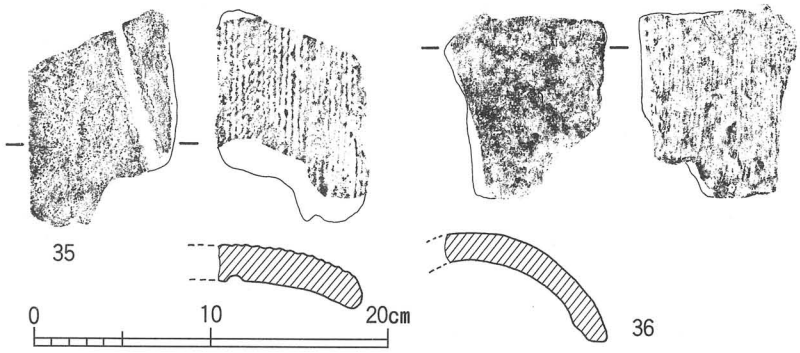
（37）の土師器甕は、「く」の字状に屈曲した口縁部から丸味を持つ端部で終わる。（38）の土師器中皿は厚手の深身で、平底とみられる底部から緩やかに内彎して立ち上がる口縁部に至る。（39～41）の瓦器小皿は、浅いやや丸底気味の底部から外反する口縁部に至る。口縁部は強めのヨコナデで仕上げており、端部は丸くおさめる。３点とも体部内面には圏線状のヘラミガキが施され、（39）についてはさらに見込みにジグザグ状の暗文を有する。（42・43）の瓦器椀はいずれも見込みに斜格子状の暗文が施されるが、時期的に（42）は器壁の厚みや体部外面のヘラミガキ・高台の様相から森島編年のⅠ－３期、（43）は体部外面のヘラミガキ消失と高台の縮小化からそれより後出のⅢ－３期[註5]にそれぞれ比定される。（44）の須恵器壺は、断面形が長方形でハの字形に開く厚みのある高台が付く。（45）は土師質の把手、（46）は瓦質脚付羽釜の脚部である。（47）は平底を呈する常滑焼の甕と思われる。（48）は口縁端部を内側に折り返す大和型の羽釜である。（49～51）は円筒埴輪の破片である。いずれも焼成は土師質で、タガの断面はしっかりとした台形状を呈する。調整は（49・50）は摩滅気味で不明であるが、（51）には外面－タテハケ・内面－タテハケとヨコハケが顕著に認められる。これらの埴輪は、川西編年のⅡ期の範疇に納まろう。（53・54）は砥石である。（53）は輝石の斑晶が多いカンラン石玄武岩[註8]で片面に擦痕が見られる。一方の（54）はガラス質で輝石と長石の微粒を含む安山岩で、片面に刻線状の擦痕が認められる。（55・56）はサヌカイト製石器で、削器（55）と剥片素材の石核（56）である。



第15図　ＳＫ－301平・断面図



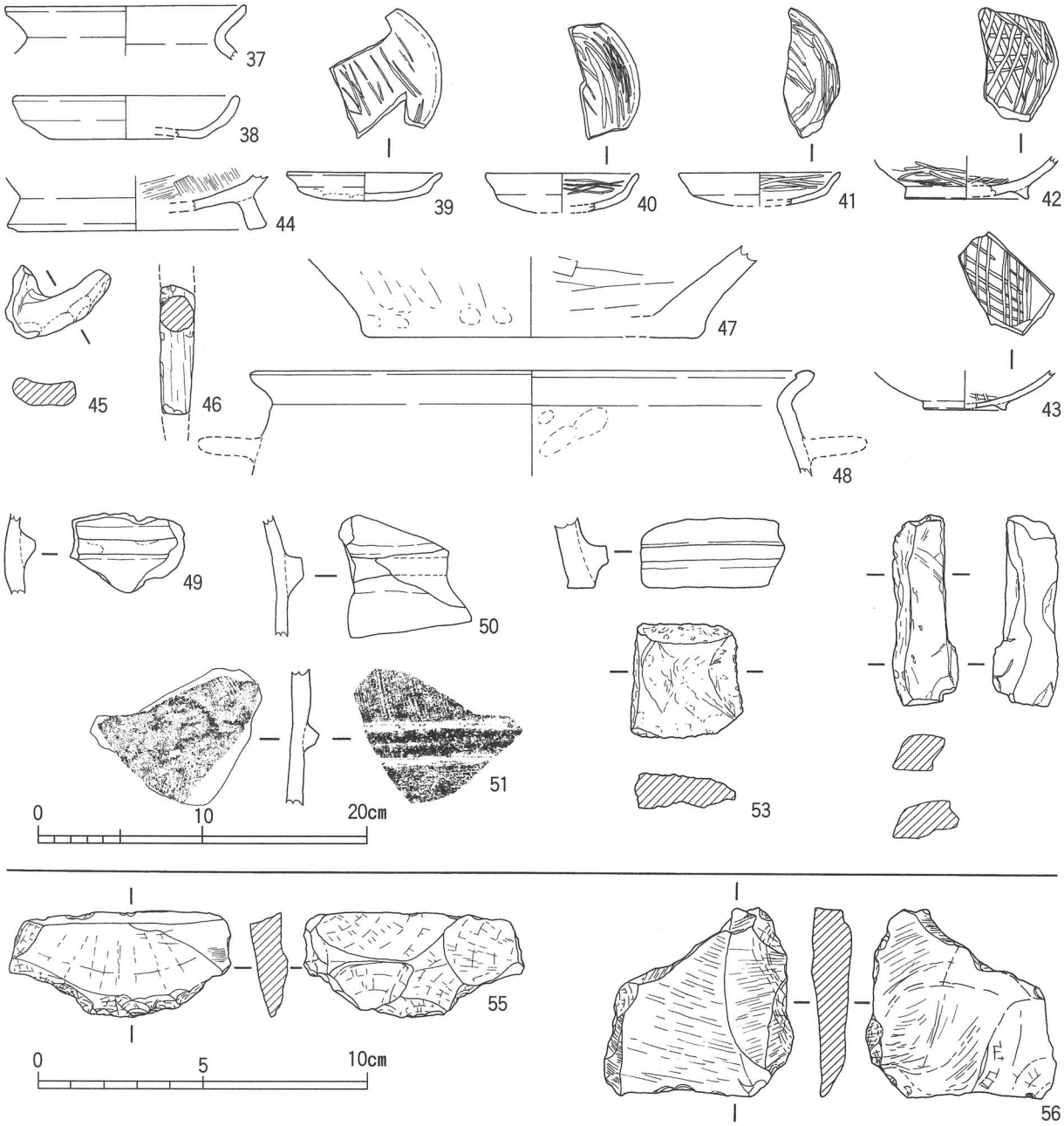
第16図　ＳＫ－301出土遺物実測図



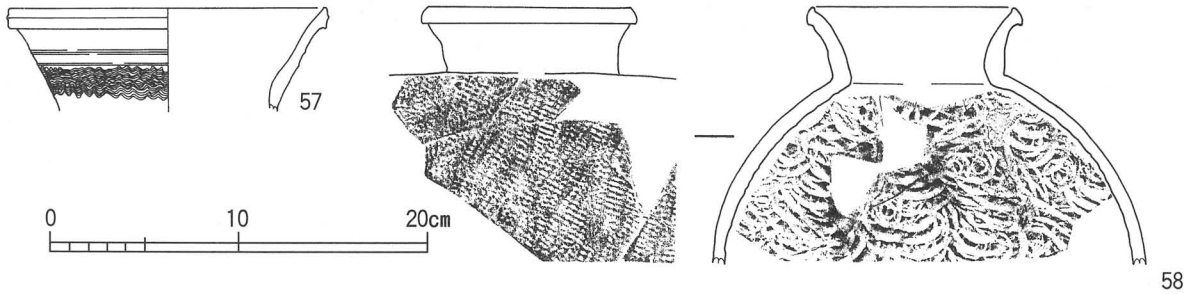
第17図　第３層出土遺物実測図

・第５層

（57）は須恵器広口壺で、やや上下に拡張する口縁端部外面には１条の稜線を有し、口頸部外面には２条の突帯の下位に波状文を施す。田辺編年のＴＫ47型式の範疇であろう。[註9]（58）は須恵器横瓶で、上下に肥厚する口縁端部を有し、外面が格子目タタキで内面には同心円文が明瞭に残る。６世紀後半の所産であろう。



第18図　第４層出土遺物実測図



第19図　第５層出土遺物実測図

第３節　出土遺物観察表

※胎土－量／粒度長は最大長（mm）／鉱物＝石→石英、長→長石、雲→雲母、角→角閃石、赤→赤色斑粒、砂→砂粒

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 (cm)　器高	調　整・手　法	色調　外面 内面	胎　土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備　考
1 八	小　皿 (土師器) ＳＸ－101	9.6 －	外面：ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	乳灰茶色	密／長(2)少、雲(微)僅、チ(1)僅	良好	1／4	
2 八	同　上	10.8	同　　上	淡灰茶色	密／雲(1)少	良好	1／4	
3 八	中　皿 (土師器) ＳＸ－101	14.4 －	内外面ヨコナデ、ナデ	淡灰褐色	密／長(0.5)僅、雲(微)少	良好	1／5	
4 八	台付壺 (土師器) ＳＸ－101	－ － 高台径 4.2 高台径 1.3	内外面ヨコナデ、ナデ。中央に穿孔？	淡灰褐色	密／雲(微)少、赤(1)多	良好	高台部のみ	
5 八	椀 (瓦器) ＳＸ－101	15.0 3.9 高台径 5.0 高台径 0.4	外面：ヨコナデ、ユビオサエ 内面：ナデ後ヘラミガキ	黒灰色	密／砂(微)僅	良好	1／5	
6 八	羽　釜 (土師器) ＳＸ－101	29.6 －	外面：ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕（頸部）１条 内面：ヨコナデ、ナデ	明褐色	粗／石(3)僅、長(3)多、角(2)僅、チ(3)少、赤(2)僅	良好	口縁部 1／8	
7 八	小　皿 (土師器) ＳＥ－201	9.1 －	内外面ヨコナデ、ナデ	淡乳褐色	密／雲(微)多、赤(1)僅	良好	1／4	
8 八	同　上	9.1 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	淡明褐色～茶褐色	密／雲(微)多、チ(2)僅、赤(3)僅	良好	1／4	
9 八	小　皿 (瓦器) ＳＥ－201	9.0 2.4	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 内面：ナデ後ヘラミガキ	黒色	密／長(微)僅	良好	完形	
10 八	椀 (土師器) ＳＥ－201	－ － 高台径 5.4 高台径 0.6	外面：ユビオサエ後ヘラミガキ、ヨコナデ、ナデ 内面：ヘラミガキ、斜格子状の暗文	黒灰色	密／砂(微)僅	良好	底部 2／3	
11 八	羽　釜 (土師器) ＳＥ－201	27.2 － 鍔径　36.7	内外面ヨコナデ、ナデ、接合痕（肩部）内外面に１条ずつ有す	外：茶灰色～乳灰色 内：暗茶灰色	粗／石(2)多、長(2)少、チ(1)少	良好	口縁部～鍔部 1／8	
14 八	小　皿 (瓦器) ＳＥ－202	9.7 2.5	内外面ヨコナデ・ナデ後密なヘラミガキ	黒色	密／砂(微)僅	良好	完形	
15 九	小　皿 (土師器) ＳＥ－203	8.1 1.6	内外面ヨコナデ、ナデ	明褐色～淡乳灰色	密／雲(微)多、赤(微)多	良好	完形	
16 九	小　皿 (瓦器) ＳＥ－203	6.5 3.0 高台径 4.0 高台径 0.7	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ジグザグ条の暗文	灰黒色	密／砂(微)僅	良好	1／4	
17 九	椀 (瓦器) ＳＥ－203	13.9 3.9 高台径 3.5 高台径 0.4	外面：ヨコナデ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、ナデ後ヘラミガキ	黒灰色	密／砂(微)僅	良好	口縁部一部欠損	
18 九	鉢 (須恵器) ＳＥ－203	－ － 底径　11.2	内外面ヨコナデ、ナデ	淡灰色	粗／長(2)多、石(1)少	良好	底部 1／3	東播系
19 九	羽　釜 (土師器) ＳＥ－203	22.2 － 鍔径　28.2	内外面ヨコナデ、ナデ、外面に接合痕（肩部）１条	乳褐色	粗／石(2)多、長(2)多、チ(2)少	良好	口縁部～鍔部 1／6	外面に煤付着
20 九	同　上	20.4 － 鍔径　30.0	同　　上	乳褐色	粗／石(3)多、長(2)多、チ(2)少、赤(2)少	良好	口縁部～鍔部 1／8	鍔部下位に煤付着
21 九	同　上	27.8 － 鍔径　38.8	外面：ユビオサエ後ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	乳灰色	密／石(2)少、長(3)多、チ(2)多、赤(1)少	良好	口縁部～鍔部 1／8	
22 九	同　上	23.3 － 鍔径　45.4	内外面ヨコナデ、ナデ	乳褐色	粗／石(2)少、長(2)少、チ(3)多、赤(3)少	良好	口縁部～鍔部 1／5	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 (cm)　器高	調　整・手　法	色調　外面 内面	胎　土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備　考
26 一○	椀 (瓦器) ＳＰ－202	17.7 3.6 高台径 4.8 高台径 0.2	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ、平行線の暗文	外：淡灰色 内：淡黒灰色	密／長(2)多、雲(0.5)多	良好	1／3	
27 一○	小型短頸壺 (土師器) ＳＫ－301	11.8 － 体部最大径 13.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面は風化により調整不明、肩部内面に径2cm前後の粘土塊付着	明褐色	粗／石(2)多、長(2)多、赤(2)多	良好	5／6	肩部外面に黒斑を有す
28 一○	短頸壺 (土師器) ＳＫ－301	14.5 －	内外面ユビオサエ・ヨコナデ後ハケナデ(8本／cm)	乳灰色	粗／石(2)多、長(2)少、チ(2)多、赤(1)少	良	口縁部 1／3	内面全域に黒斑を有す
29 一○	甕 (土師器) ＳＫ－301	14.1 20.1 体部最大径 19.2	外面：ヨコナデ、ハケナデ（風化により調整不明） 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ、ユビオサエ	淡乳灰色	やや粗／石(2)多、長(3)多、角(1)少、チ(1)多	良好	ほぼ完形	体部外面に黒斑を有す
30 一○	同　上	16.2 25.5 体部最大径 24.2	同　上	外：茶褐色 内：茶灰色	やや粗／石(2)多、長(3)多、雲(1)少、角(2)少、チ(3)少	良好	1／3	体部外面に黒斑を有す
31 一○	同　上	－ － 頸径　12.8 体部最大径 28.0	口縁部を除き同上	明褐色	粗／石(1)多、長(4)多、雲(1)多、角(2)少、チ(2)少、赤(1)少	良好	体部のみ	内外面に黒斑を有す
32 一○	高杯 (土師器) ＳＫ－301	17.2 －	外面：風化により調整不明 内面：ハケナデ、ユビオサエ	乳褐色	やや粗／石(2)僅、長(3)多、雲(1)多、角(1)僅、赤(1)僅	良好	杯部 1／2	
33	同　上	15.2 －	内外面とも風化により調整不明	明褐色	密／長(微)僅、雲(微)僅	良好	口縁部 1／4	
37	甕 (土師器) 第4層	14.4 －	内外面ともヨコナデ	乳褐色	やや粗／長(2)多、赤(1)多	良好	口縁部 1／6	
38	中　皿 (土師器) 第4層	13.3 －	内外面ともヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	密／雲(微)多	良好	1／5	
39 一一	皿 (瓦　器) 第4層	9.3 1.7	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ後ジグザク状の暗文	黒色	密／砂(微)僅	良好	1／3	
40 一一	同　上	9.2 －	同　上	黒色	密／砂(微)僅	良好	1／5	
41 一一	同　上	9.8 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ後渦巻状の暗文	黒色	密／砂(微)僅	良好	1／6	
42 一一	椀 (瓦　器) 第4層	－ － 高台径 7.4 高台径 0.8	外面：ユビオサエ後ヘラミガキ、ヨコナデ 内面：ヘラミガキ、斜格子状の暗文	黒灰色	密／砂(微)僅	良好	底部 1／3	
43 一一	同　上	－ － 高台径 4.8 高台径 0.5	外面：ユビオサエ、ヨコナデ 内面：斜格子状の暗文	黒灰色	密／砂(微)僅	良好	底部 1／3	
44	壺 (須恵器) 第4層	－ － 高台径14.0 高台径 2.0	外面：回転ナデ 内面：ヘラナデ	淡灰色	密／砂(微)僅	良好	底部 1／6	
47	甕 (陶器) 第4層	－ － 底径　19.9	外面：ユビオサエ、ナデ 内面：ヘラナデ	淡赤灰色	密／砂(微)僅、長(微)多	良好	底部 1／5	
48	羽　釜 (須恵器) 第4層	33.0 －	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	赤褐色	やや粗／石(2)少、長(2)少、雲(微)少、角(微)僅	良好	口縁部 1／8	
57 一二	広口壺 (須恵器) 第5層	16.4 －	外面：回転ヨコナデ波状文(幅1.5cm前後)、2段の凸帯を有す 内面：回転ヨコナデ	灰青色	精良／砂(微)僅	良好	1／5	
58 一二	横　瓶 (須恵器) 第5層	10.6 － 頸径　9.1	外面：回転ヨコナデ、格子状タタキ 内面：回転ヨコナデ、同心円タタキ	淡灰色	精良／砂(微)僅	良好	口縁部ほぼ完存	

第4章　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期と中世（鎌倉時代～室町時代初頭）の大きく分けて二時期の生活面を検出することができた。以下、時期毎に既往の周辺における調査結果と比較・検討しながら、その成果について概観したい。

［古墳時代］

該期の遺構については、下層確認でみつかった前期の土坑1基（ＳＫ－301）のみの検出であったが、当調査地の北側及び西側に接する道路築造の際に実施された中田遺跡調査会の発掘調査結果によれば、該期の建物遺構とそれに伴う溝及び井戸遺構が確認されている。[註1] また、当調査地の南方で東西に伸びる市道安中・教興寺線内では、当調査研究会において平成元年度に公共下水道工事に伴う第２次調査が実施されており、弥生時代後期～古墳時代前期（布留式期）の遺物包含層から大量の土器を検出、[註10] さらに住居址の壁溝を示唆する遺構を確認している。こういったことからも付近に集落が存在していた蓋然性は強く、今回の土坑もその集落遺構の一部と考えられる。ここで今回検出した土坑の下層になる第６層の河川堆積層について周辺の調査と照合すると、先述の２件の調査をはじめ北西で当調査研究会が平成元年度に実施した第９次調査においても弥生時代後期に比定される埋没河川の堆積層を確認しており、[註4] かなり大型の河川が存在したことが想定される。そして古墳時代に入って埋没した河川跡上が人為的に整地され、居住域が形成されるようになったものと考えられる。また、後の中世では井戸がこの埋没河川堆積層まで掘削され、人々の生活に欠かせぬ水脈源となっていることが断面観察から確認できた。

続く中期では遺構に伴うものではないが、第４層内に中世の遺物とともに埴輪の破片が若干みられ、当地あるいは近隣に古墳が存存した可能性を指摘する。既往の調査では昭和46年度に大阪府教育委員会によって実施された市道安中・教興寺道路工事に伴う調査、[註2] さらにその南方で平成３年度に八尾市教育委員会によって実施された公共下水道工事に伴う調査においても[註11] 今回と同時期とみられる埴輪片が検出されている。

［中世］

＜鎌倉時代＞

該期では、同一遺構面において前葉～中葉に付置付けられる集落遺構と中葉～後葉に付置付けられる農耕地の２次面を検出するに至った。前者の小穴遺構のなかで建物を構成するとみられる柱穴列は復原できなかったが、一部の埋土内に柱根を窺わせる木片や引き抜き痕が確認されることから住居であった可能性は高い。井戸については検出した３基ともすべて曲物を伴ったもので、曲物内に落ち込んでいる板片の様子からさらにその上部に桶枠等が積まれていたものとみられる。加えて、ＳＥ－201の曲物枠に付設されている建築部材の転用物やＳＥ－203の井戸底に敷き詰められた須恵器甕の体部片からは、当時の人々の井戸施設に対する創意工夫の一端が甕われる。それ以外の土器や砥石の出土遺物についても、中世における日常雑器を究明するうえで貴重な資料であることは言うまでもない。土器のなかで完形品あるいはそれに近い皿や椀が井戸底から各１点ずつ見つかっているが、これらは他の調査例から井戸鎮（しず）めに関わる祭祀用、いわゆる「供献土器」という見方もある。[註12] それ以外の破片や上層にみられる遺物は、井戸廃絶後にゴミ

捨て場として利用されていたことを物語る。井戸は現耕土から0.5m前後という比較的浅いところで検出されたわけであるが、それは井戸検出面から現耕土の堆積層間に河川の洪水を示唆する土層がみられないこともあわせて、中世以後当地が比較的安定した土地柄であったことを明示する。本調査地周辺の集落に関連した遺構は、先述の中田遺跡調査会・大阪府教育委員会[註1]・当調査研究会の第９次調査[註2]で内容的に希薄ではあるが確認されており、今回検出された遺構もそれらと有機的な関係にあると[註4]言えよう。遺跡名は異なるが、当地から西へ約150m地点で当調査研究会が昭和61年度に実施した矢作遺跡第１次調査では、11世紀末葉～13世紀末葉に至る掘立柱建物・井戸・土坑・溝・池状遺構とともに大量の遺物[註13]が検出されている。この矢作遺跡で検出された集落と本調査地周辺の集落とを同一集落と見た場合、遺構・遺物の検出密度からその中心は西の矢作遺跡にあると推測される。しかし、その実態については位置的及び距離的な問題もあり、当地の西側の両遺跡間を埋める未調査部分の解明を待って再検討したい。

中葉以降は何等かの要因で集落が廃絶あるいは移動を余儀なくせまられ、当地が居住域から生産域へと変貌していったことが、先述の井戸や小穴といった集落遺構を切り込み・削平している鋤溝群から看取される。そして室町時代に入ると、先の鋤溝にみられる畠地は消失し、調査区北西部で東西に長い土坑状の掘り込み遺構（ＳＸ－101）を検出することとなるが、該期に比定される遺構はこの１箇所のみで性格的な事象を究明するまでには至らない。室町時代については周辺の既往の調査をみても今回同様、瓦類や終末期の瓦器椀をはじめとする遺物は散見されるが、生活面として堅固たらしめる遺構は見つかっておらず不鮮明なところである。中田遺跡調査会が昭和47年度に本調査地から東へ約100mの［《北区》第６地区］と称される道路内で実施した調査[註1]では、鎌倉期～室町期に比定される柱穴や瓦集積箇所および什器等の遺物が検出され、その調査結果とこの地域の字名に地蔵堂・薬師堂・善坊寺等の寺院に関する地名が残っていることを関連づけて寺院の存在が傍証されている。さらには本調査地から南東約400m地点に現存する善坊寺の旧地であるという見方を強くしている。しかし、今回の調査ではそのような寺院に関連する遺構は確認されず、極少量の瓦片は見られるが寺院建物の存在を裏付けるには根拠が乏しく、寺域が当地まで拡がることは考えがたい。［《北区》第６地区］における調査結果から寺院の存在が指摘されているが、この調査は道路区画整備に伴う面的に制約を受けたトレンチあるいはグリッドといった狭小なものであり、寺院建物址および寺域の拡がりの詳細については［《北区》第６地区］周辺における今後の調査の累積を待たねばならない。

註

(註１)　1973『中田遺跡《北区》《南区》発掘調査概要』中田遺跡調査会

(註２)　1972『中田遺跡発掘調査概要(安中、教興寺道路工事に伴う調査)』大阪府教育委員会

(註３)　山本昭　1974『中田遺跡　日本電信電話公社大阪東地区管理部地下線埋設工事に伴う調査　中田遺跡調査報告Ⅰ』中田遺跡調査センター

(註４)　原田昌則　1992「Ⅶ中田遺跡第９次調査(NT91－９)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　八尾市文化財調査研究会報告34』(財)八尾市文化財調査研究会

(註５)　森島康雄　1995「Ⅲ土器・陶磁器　６．瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

(註６)　森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ　付編80年代の研究成果と今後の展望』日本中世土器研究会

(註７)　原田昌則　1993「Ⅱ久宝寺遺跡第１次調査(ＫＨ84－１)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　八尾市文化財調査研究会報告37』(財)八尾市文化財調査研究会
※本書の中では、第２トレンチのＳＷ－１および第７層の出土遺物から中河内地域における古墳時代初頭～前期(庄内式～布留式)の器種分類および編年的位置付けが論じられている。

(註８)　川西宏幸　1978『円筒埴輪総論』考古学雑誌

(註９)　田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

(註10)　青木勘時　1989「15．中田遺跡(ＮＴ89－２)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度(財)八尾市文化財調査研究会報告28』(財)八尾市文化財調査研究会

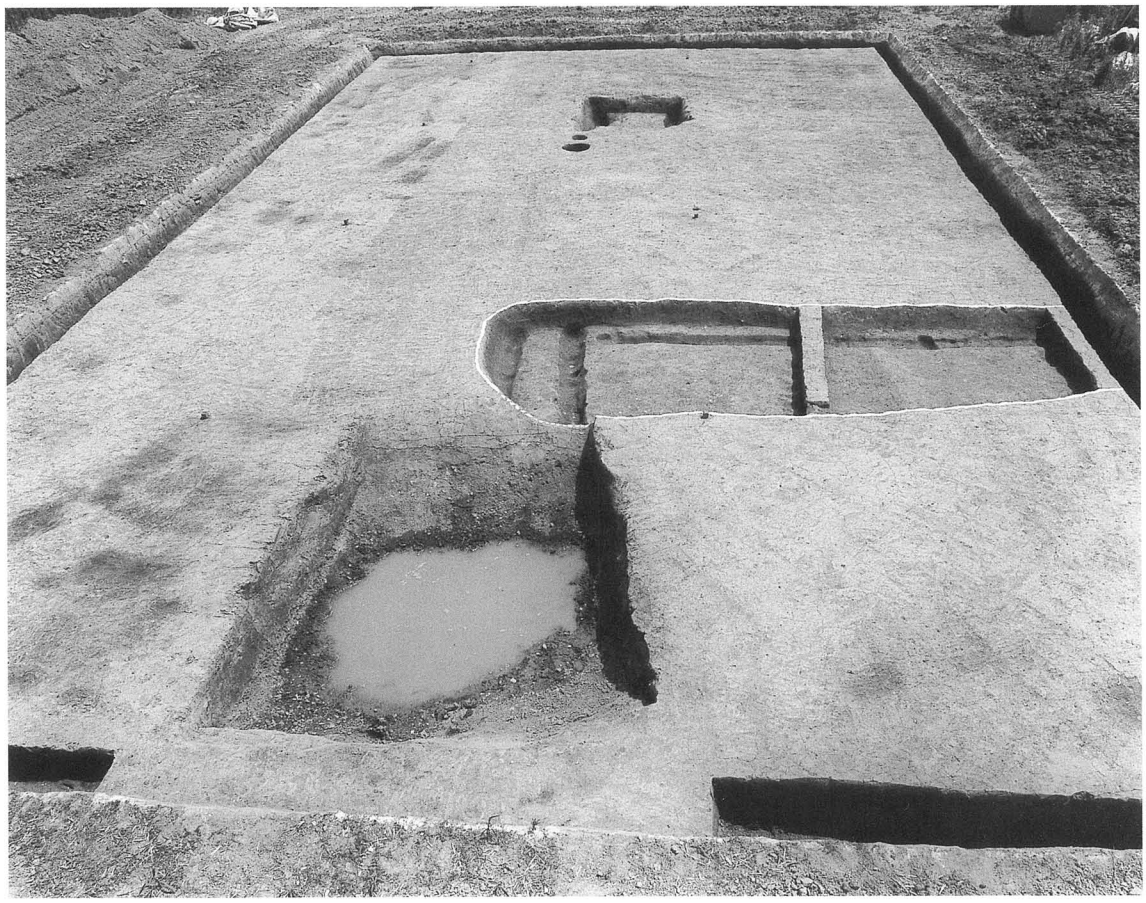
(註11)　吉田野々　1992「８．中田遺跡(91－293)の調査」『八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書Ⅱ　八尾市文化財調査報告26』八尾市教育委員会

(註12)　中世の井戸祭祀については、広島県の「草戸千軒」遺跡にみられる竹筒や呪符を用いた実例が有名であるが、(財)東大阪市文化財協会が実施した「若江遺跡第27次発掘調査報告(1988)」の報告のなかで今回の井戸と同様、井戸底に見られる瓦器椀や土師器皿などの完形品から井戸廃絶時に供献されたものと推定されている。しかし、完形品の土器の出土のみをもって祭祀とするかどうかには多くの問題があり、先述の「草戸千軒」遺跡のように明らかに祭祀行為を示す遺物が出土しない限り断定できない。ここで井戸内埋没遺物について多くの調査例から、多角的な検討を要することを付け加えておきたい。

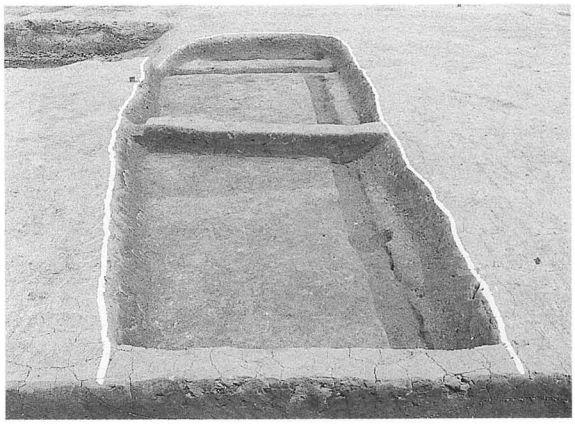
(註13)　原田昌則　1989「Ⅰ矢作遺跡(第１次調査)発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要平成元年度(財)八尾市文化財調査研究会報告22』(財)八尾市文化財調査研究会

調査風景（南東から）

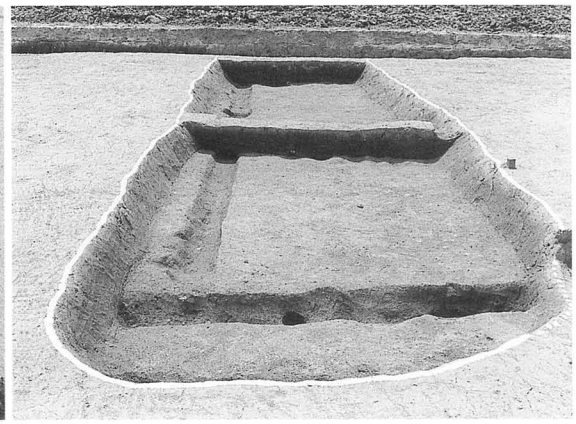
図　　版



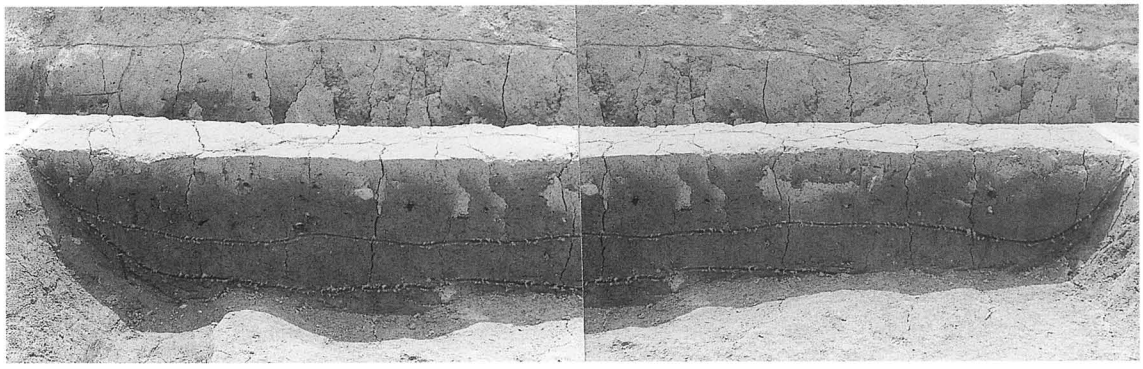
第１遺構面全景＜室町時代初頭＞（北から）



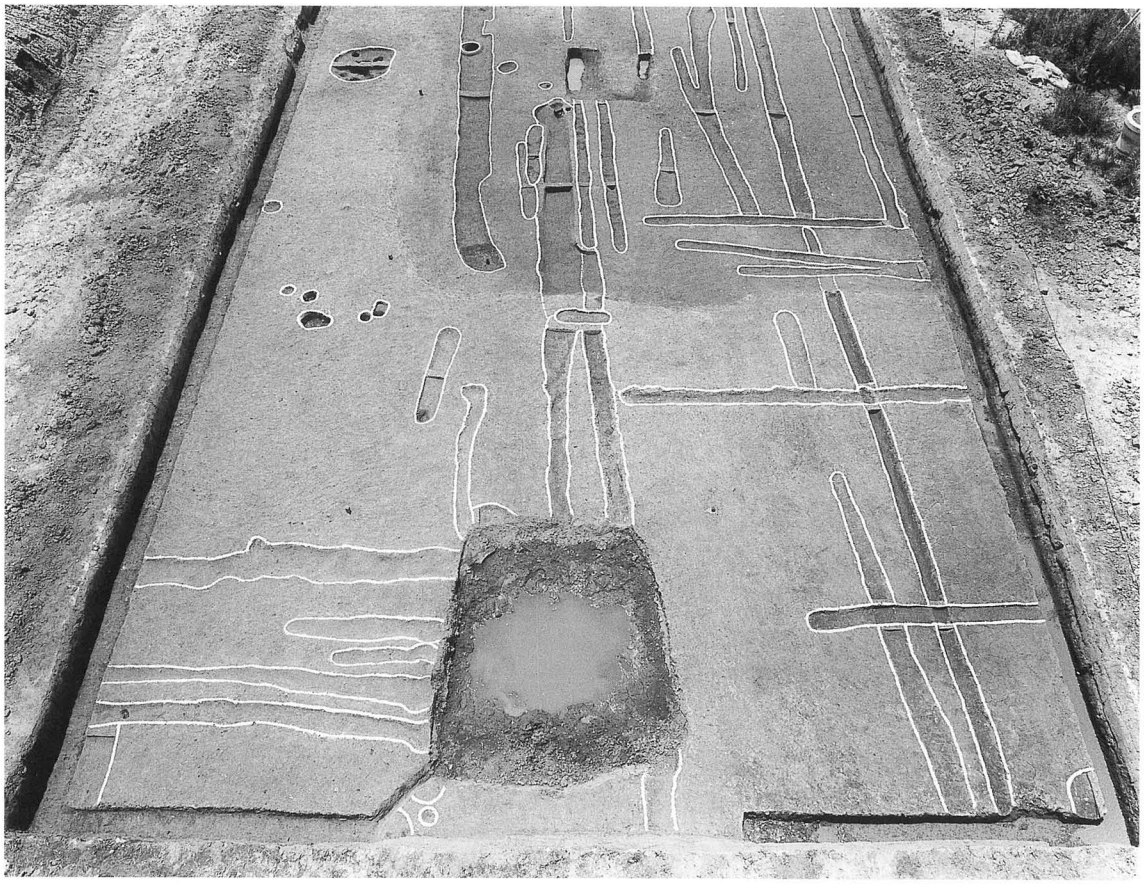
ＳＥ101（東から）



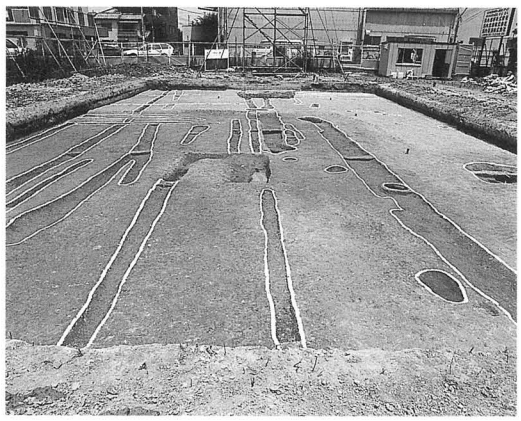
ＳＤ101（西から）



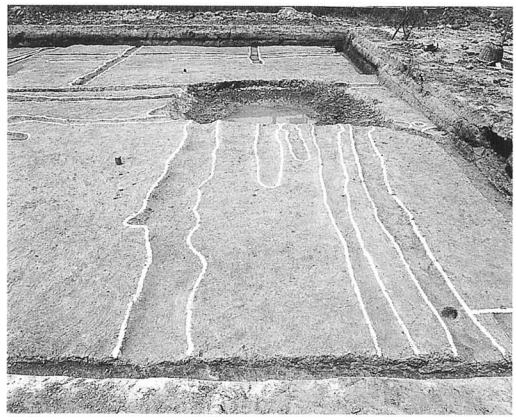
同上　ＳＸ－101西部セクション西壁（東から）



第２遺構面全景＜鎌倉時代＞（北から）

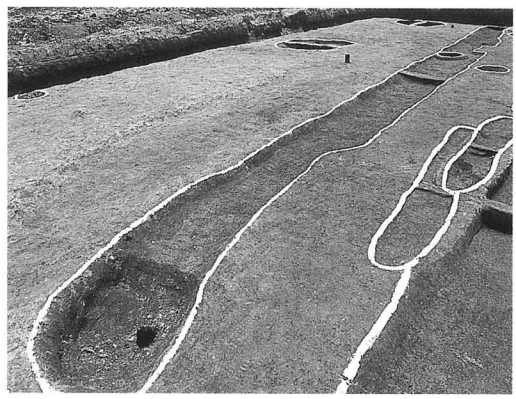


同上（南から）



同上　北部（東から）

同上　中央東部（東から）



同上　南東部（北西から）

ＳＥ－201　上部（南から）

同上　完掘断ち割り状況（南から）

図版四

ＳＥ－202（南から）

同上　井戸底部（南から）

ＳＥ－203　上部（東から）

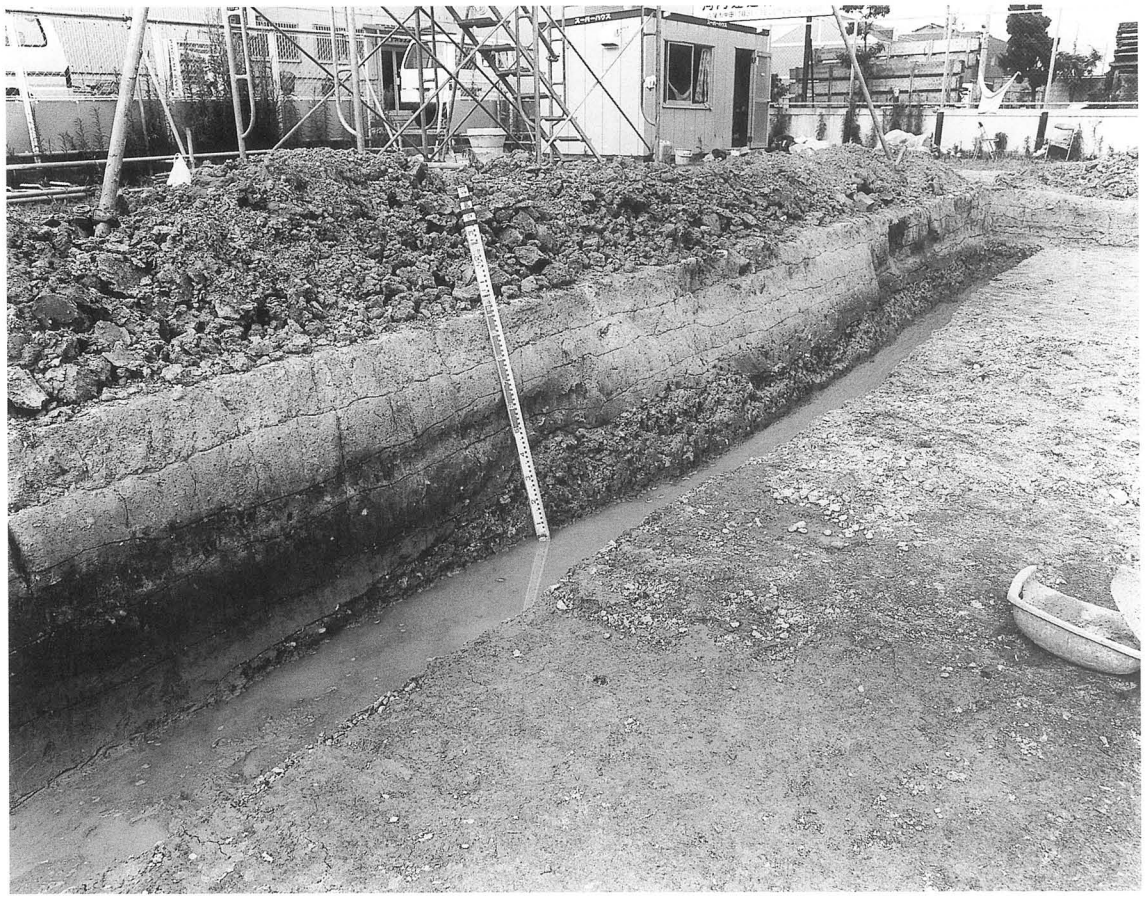
同上　完掘断ち割り状況（東から）

図版六

ＳＫ－301（南東から）

同上　遺物出土状況（南東から）

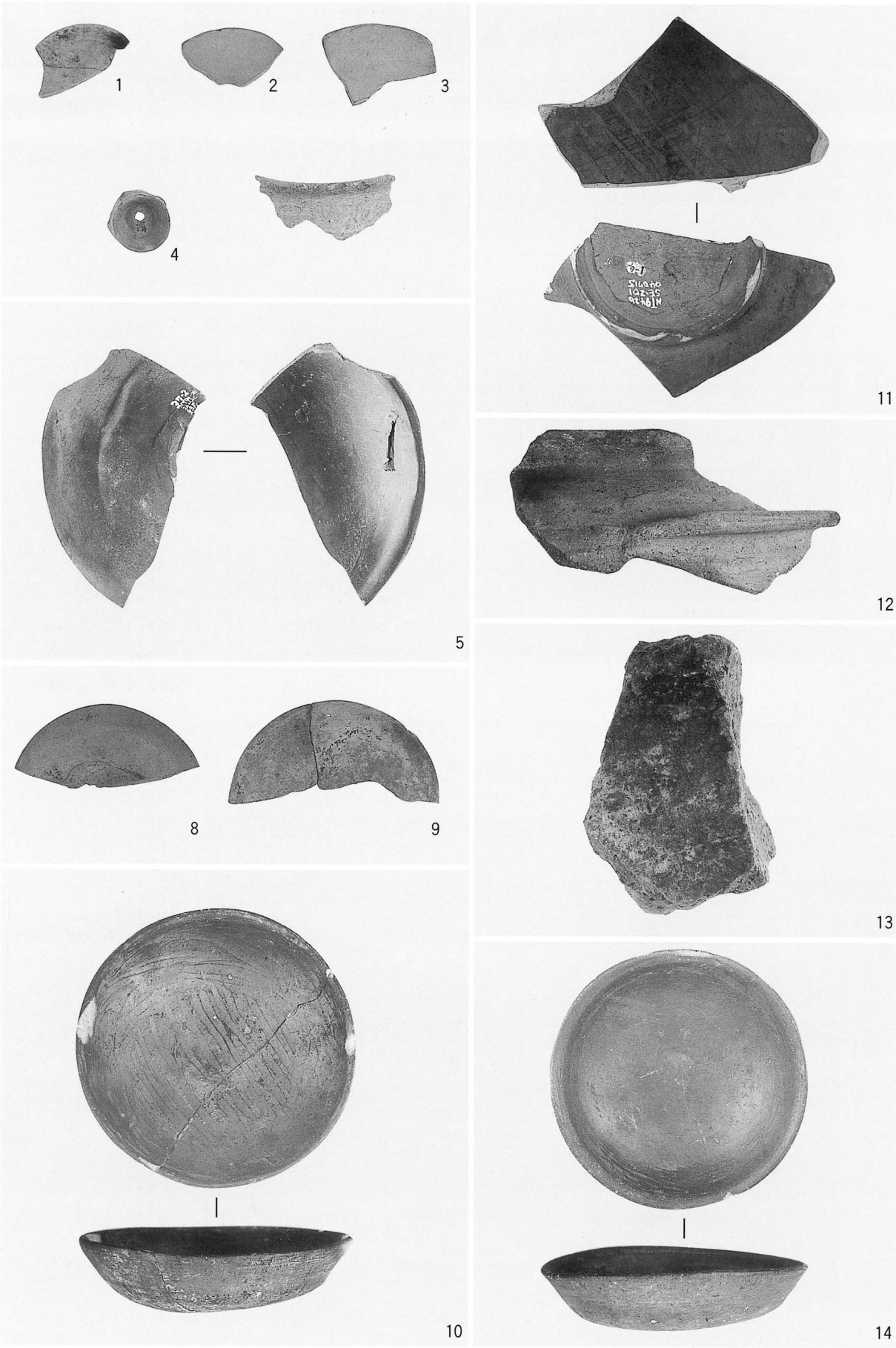
図版七



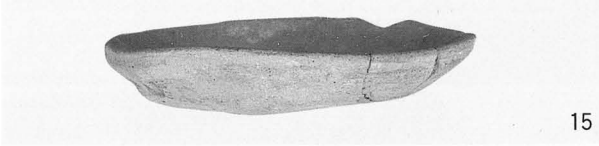
調査区北壁（南西から）

調査区近景（北東から）

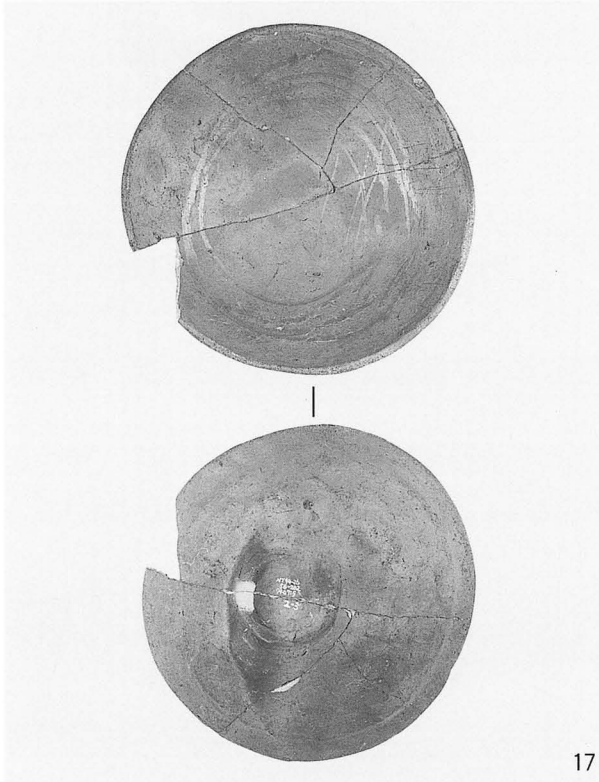
図版八　出土遺物

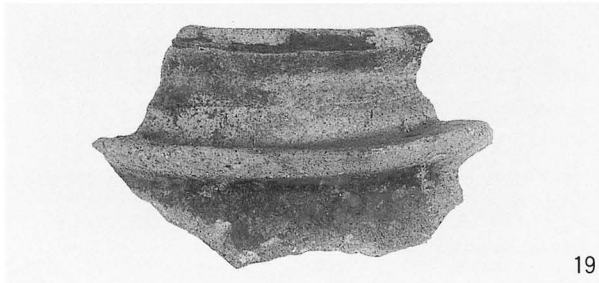


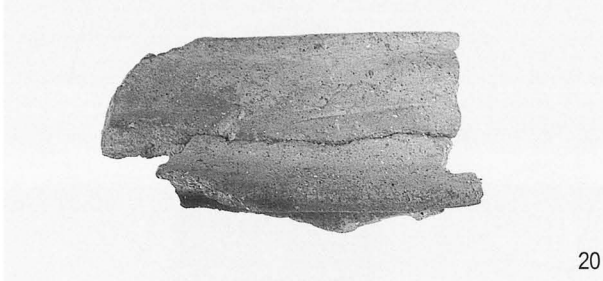
ＳＸ－101（１～６）、ＳＥ－201（８～13）、ＳＥ－202（14）

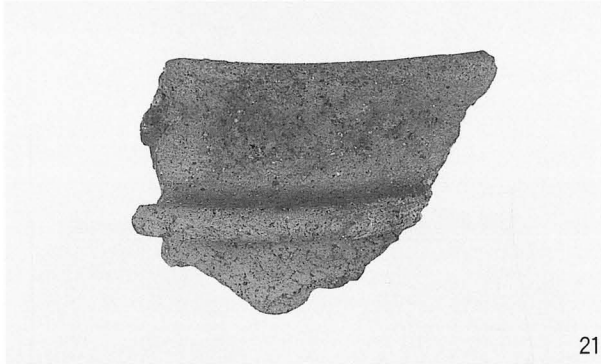

15

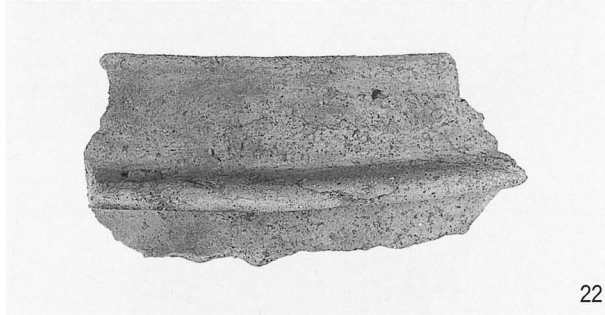
16

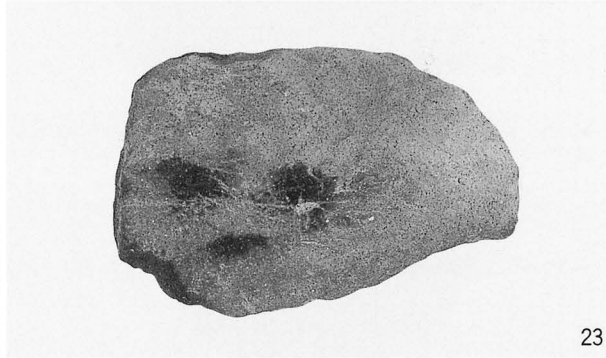

17


19

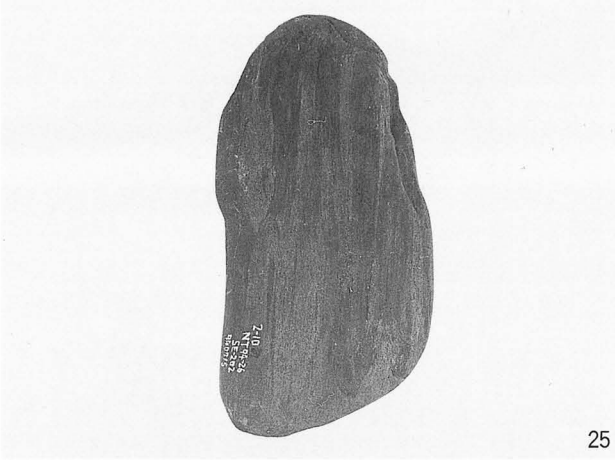

20

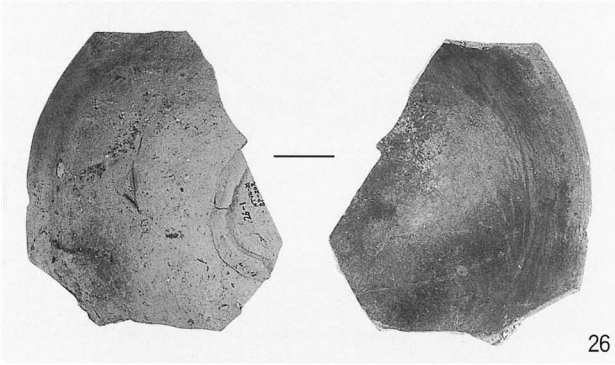

21

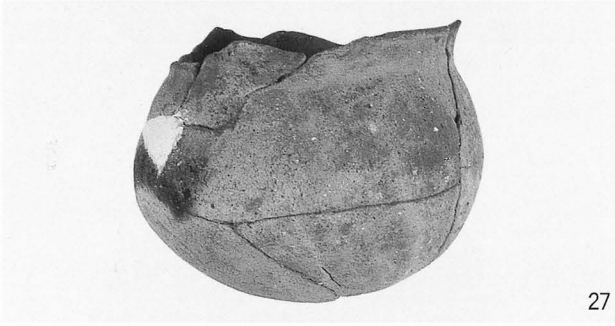

22

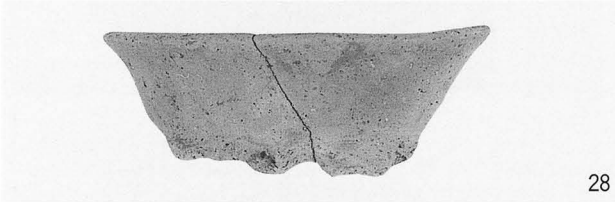

23

24


25


26

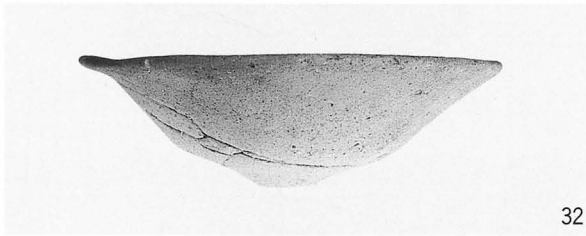

27

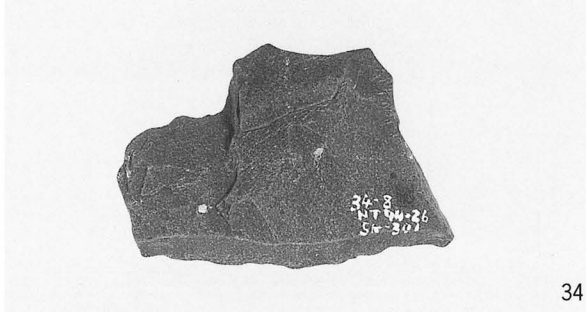

28

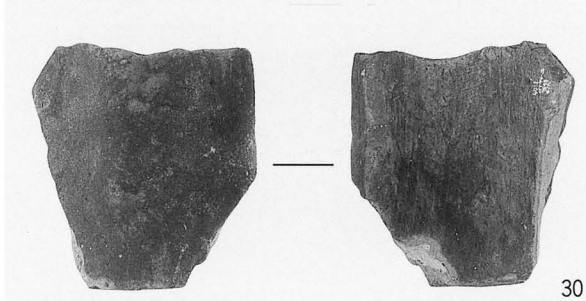
29

30

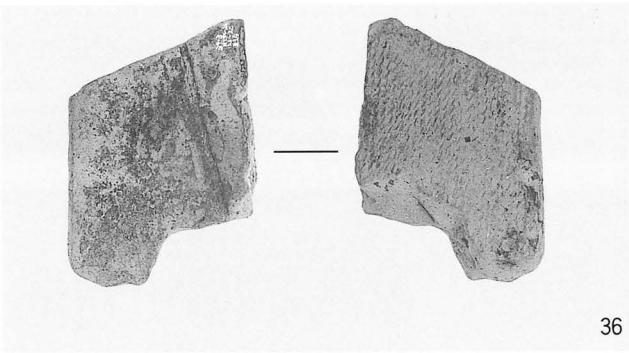
31

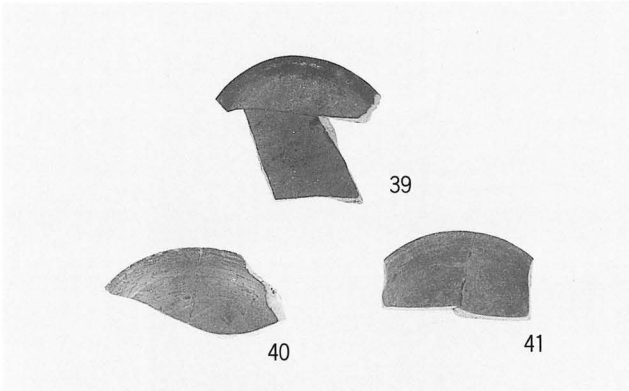

32

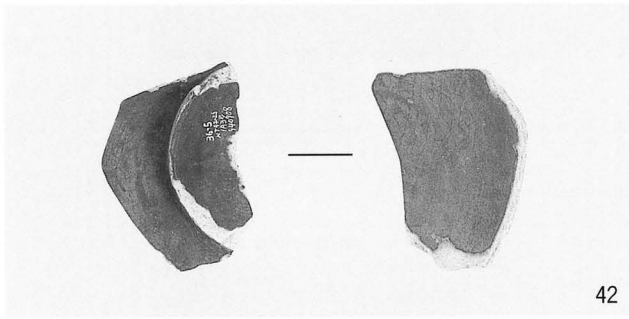

34

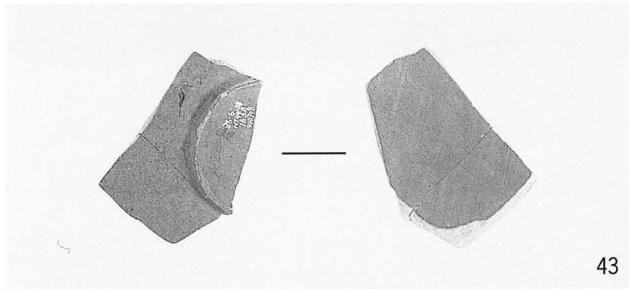

30

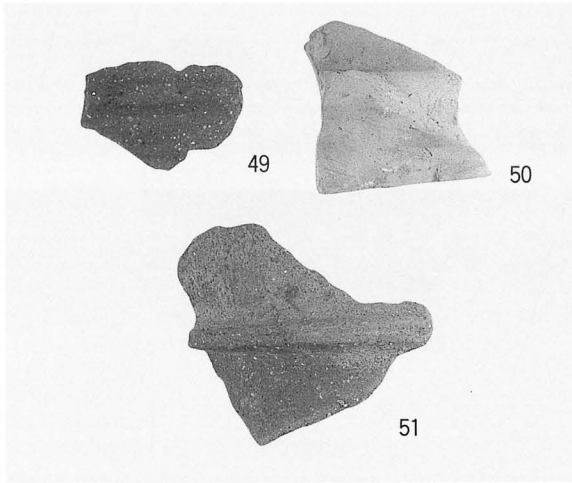
ＳＥ－203（25）、ＳＰ202（26）、ＳＫ301（27～32・34）、第３層（35）

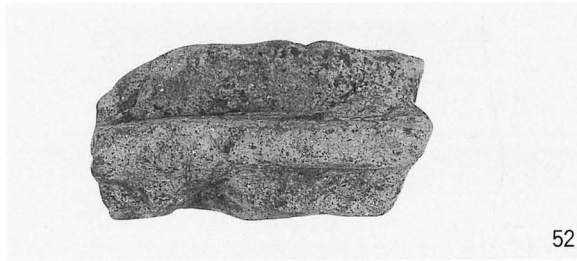


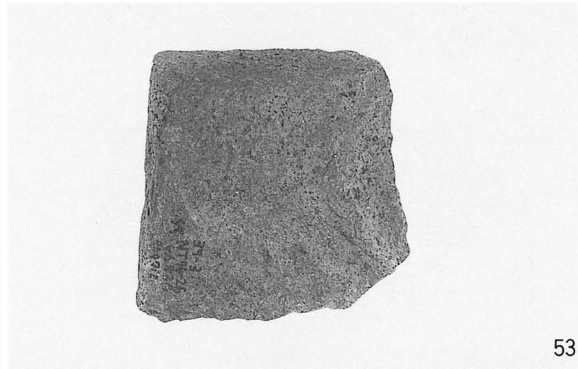


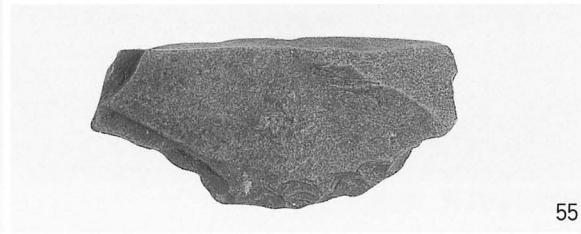




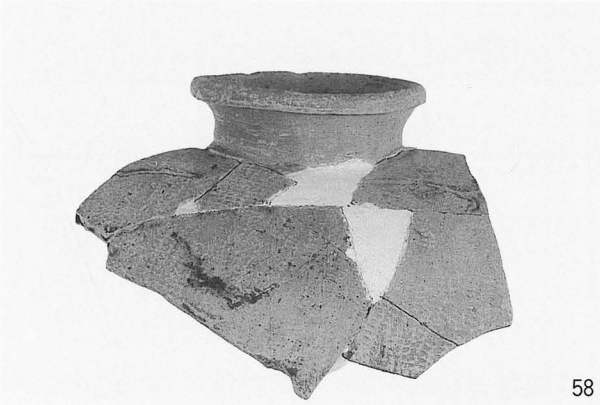




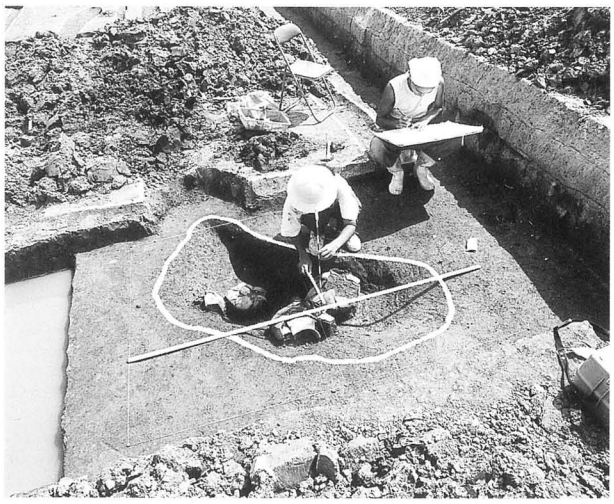




第３層（36）、第４層（39～43・45・46・49～55）



第４層（56）、第５層（57・58）、ＳＥ－201＜木製品＞（７）



遺構実測風景（北東から）

Ⅳ　中田遺跡第30次調査（ＮＴ95－30）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市刑部２丁目地内で実施した公共下水道工事（７－37工区）に伴う中田遺跡第30次調査（ＮＴ95－30）の発掘調査報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋338－３号　平成７年９月11日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託をうけて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成７年９月20日に着手し、同年10月13日に終了した。調査面積は約56㎡である。

1．現地調査には、垣内洋平・國方真奈美・山内千恵子の参加を得た。

1．内業整理には上記諸氏の他、赤澤茂美・磯上サカエ・岩本順子・田島和惠・都築聡子・中谷嘉多・八田雅美の参加を得た。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

1．本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の１地形図から起こした座標北を示している。

本　文　目　次

第１章　はじめに……107
第２章　調査概要……109
　第１節　調査方法……109
　第２節　基本層序と出土遺物……110
　第３節　検出遺構と出土遺物……112
第３章　まとめ……125

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図(S＝1/5000) ・・・・・・・108
第２図　調査区位置図(S＝1/1500) ・・・・・・・109
第３図　基本層序(S＝1/100) ・・・・・・・・・・・・111
第４図　No.1　平面・断面図(S＝1/50) ・・・112
第５図　No.1・2　出土遺物(S＝1/4) ・・・112
第６図　No.2　平面・断面図(S＝1/50) ・・・113
第７図　No.3　平面・断面図(S＝1/50) ・・・114
第８図　No.3　出土遺物(S＝1/4) ・・・・・・・・114
第９図　No.4　平面・断面図(S＝1/50) ・・・115
第10図　No.4　出土遺物(S＝1/4・1/2) ・・・115
第11図　No.5　平面・断面図(S＝1/50) ・・・116
第12図　No.6　平面・断面図(S＝1/50) ・・・116
第13図　No.7　平面・断面図(S＝1/50) ・・・117
第14図　No.5～8　出土遺物(S＝1/4)・・・・117
第15図　No.8　平面・断面図(S＝1/50)・・・・118
第16図　No.9　平面・断面図(S＝1/50)・・・・118
第17図　No.9　出土遺物(S＝1/4)・・・・・・・・・119
第18図　No.10　平面・断面図(S＝1/50)・・・・120
第19図　No.10　出土遺物(S＝1/4)・・・・・・・・・120
第20図　No.11　平面・断面図(S＝1/50)・・・・121
第21図　No.12　平面・断面図(S＝1/50)・・・・122
第22図　No.11・12　出土遺物(S＝1/4)・・・・122
第23図　No.13　平面・断面図(S＝1/50)・・・・122
第24図　No.13　出土遺物(S＝1/4)・・・・・・・・123
第25図　No.14　平面・断面図(S＝1/50)・・・・124
第26図　No.14　出土遺物(S＝1/4)・・・・・・・・・125

図　版　目　次

図版１　No.1　第⑪層上面（西から）
　　No.2　第⑥層上面（東から）
　　No.3　ＳＤ031上層板材出土状況（南から）
　　No.4　第⑤層上面（北から）
図版２　No.4　ＳＫ041（西から）
　　No.5　第⑪層上面（南から）
　　No.7　第⑥層上面（北から）
図版３　No.9　第③層下面（西から）
　　No.11　第⑦層上面（西から）
　　No.13　第⑦層上面（北から）
　　No.13　調査状況
図版４　出土遺物　No.1・2・3・4・8
図版５　出土遺物　No.4・8・9
図版６　出土遺物　No.9・10
図版７　出土遺物　No.10・13
図版８　出土遺物　No.12・13・14

No.1　最終面上面（西から）
No.2　第⑥層下面（東から）
No.3　第④層下面（東から）
No.4　第⑪層上面（北から）
No.6　第⑤層上面（南から）
No.8　第⑦層下面（東から）
No.10　第③層下面（北から）
No.12　第⑥層上面（東から）
No.14　最終面上面（東から）
No.13　調査状況

第１章　　はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目の範囲に広がる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

当遺跡は昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は古墳時代前期を中心とし、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は中田遺跡東端部にあたり、東約200ｍには現在の玉串川が北流している。周辺での調査としては、公共下水道工事に伴い、南側の東西道路上で⑧第６次調査（ＮＴ90－６）・㉒第28次調査（ＮＴ94－28）、西側の南北道路上で⑮第15次調査（ＮＴ93－15）が当調査研究会により実施されている。⑧の東部では布留式期・奈良時代の遺構が検出され、東端区における布留式期の土壙、奈良時代の小穴は土器埋納遺構と考えられている。㉒では主に平安時代末から鎌倉時代初頭の集落遺構・遺物包含層が、⑮では弥生時代後期前半における二面の遺構面が検出されている。

さらに南部をみると⑯第17次調査（ＮＴ93－17）・⑪第11次調査（ＮＴ92－11）・⑳第24次調査（ＮＴ94－24）・⑰第18次調査（ＮＴ93－18）、八尾市教育委員会による①～③、他が実施されている。③は『刑部土坑』と称され庄内式期古相の標識資料となっている土坑検出地点であるが、多量の出土土器のうちの多くを吉備地方の土器が占めるという特異性が注目されていた。そ

番号	調査主体	調査年月	調査原因	文献	発行
①	八尾市教育委員会	昭和49年７月～９月	遺跡範囲確認	中田遺跡：中田遺跡調査報告Ⅱ	1975
②	八尾市教育委員会	昭和51年９月～10月	変電所建設	八尾市文化財調査報告４	1979
③	八尾市教育委員会	昭和53年４月	電気管路埋設	八尾市文化財調査報告７	1981
④	市教委(86－532)	昭和62年８月～９月	共同住宅建設	八尾市文化財調査報告17	1988
⑤	研究会(ＮＴ87－01)	昭和63年２月～３月	共同住宅建設	財団法人八尾市文化財調査研究会報告16	1988
⑥	市教委(89－331)	平成元年９月	事務所・住宅建設	八尾市文化財調査報告20	1990
⑦	市教委(90－330)	平成２年10月	倉庫建設	八尾市文化財調査報告22	1991
⑧	研究会(ＮＴ90－06)	平成３年１月～２月	公共下水道	財団法人八尾市文化財調査研究会報告49	1995
⑨	研究会(ＮＴ91－07)	平成３年５月	共同住宅建設	財団法人八尾市文化財調査研究会報告34	1992
⑩	市教委(91－503)	平成４年１月	公共下水道	八尾市文化財調査報告28	1990
⑪	研究会(ＮＴ92－11)	平成４年11月～５年３月	公共下水道	財団法人八尾市文化財調査研究会報告39	1993
⑫	市教委(92－314)	平成４年12月	公共下水道	八尾市文化財調査報告28	1990
⑬	研究会(ＮＴ92－12)	平成５年１月	共同住宅建設	財団法人八尾市文化財調査研究会報告39	1993
⑭	研究会(ＮＴ92－14)	平成５年１月～３月	公共下水道	財団法人八尾市文化財調査研究会報告56	1997
⑮	研究会(ＮＴ92－15)	平成５年３月～４月	公共下水道	財団法人八尾市文化財調査研究会報告56	1997
⑯	研究会(ＮＴ93－17)	平成５年７月～８月	共同住宅建設	財団法人八尾市文化財調査研究会報告43	1994
⑰	研究会(ＮＴ93－18)	平成５年10月	電気管路埋設	財団法人八尾市文化財調査研究会報告43	1994
⑱	研究会(ＮＴ93－21)	平成５年10月	公共下水道	財団法人八尾市文化財調査研究会報告43	1994
⑲	研究会(ＮＴ93－22)	平成６年１月～２月	電気管路埋設	財団法人八尾市文化財調査研究会報告43	1994
⑳	研究会(ＮＴ94－24)	平成６年４月	共同住宅建設	財団法人八尾市文化財調査研究会報告49	1995
㉑	研究会(ＮＴ94－25)	平成６年５月～６月	公共下水道	財団法人八尾市文化財調査研究会報告56	1997
㉒	研究会(ＮＴ94－28)	平成６年11月～12月	公共下水道	財団法人八尾市文化財調査研究会報告49	1995
㉓	研究会(ＮＴ95－30)	平成７年９月～10月	公共下水道	今回の調査	
㉔	研究会(ＮＴ95－31)	平成７年11月	共同住宅建設	財団法人八尾市文化財調査研究会報告56	1997
㉕	市教委(95－22)	平成７年11月～８年１月	公共下水道	八尾市文化財調査報告37	1997
㉖	研究会(ＮＴ95－32)	平成７年12月	防火水槽	財団法人八尾市文化財調査研究会報告56	1997

周辺での中田遺跡調査一覧表

して⑯で検出された弥生時代後期の土器集積からも、吉備地方の影響が指摘される『特殊器台』を思わせる大型器台や、これに伴うと考えられる連続S字状文を施した大型の壺形土器片が出土している。これらの調査成果からみて、弥生時代後期～古墳時代前期において、当地と吉備地方とは何らかの強い関連があったことが窺え、また両遺構ともに土器の出土状況が非常に祭祀色の強いものであることも特筆されよう。なお⑳では弥生時代後期頃の埋没河川が検出され、この河川の西側にこれらの集落が展開していたものと考えられ、⑪北部でも当該期の遺物包含層が確認されている。

古墳時代では⑯や⑪北部で包含層から埴輪片が出土しており注目される。奈良時代では⑯で大規模な建物を想定させる柱穴が、平安時代では⑳で集落遺構が検出されている。

第1図　調査区位置図（S＝1／5000）

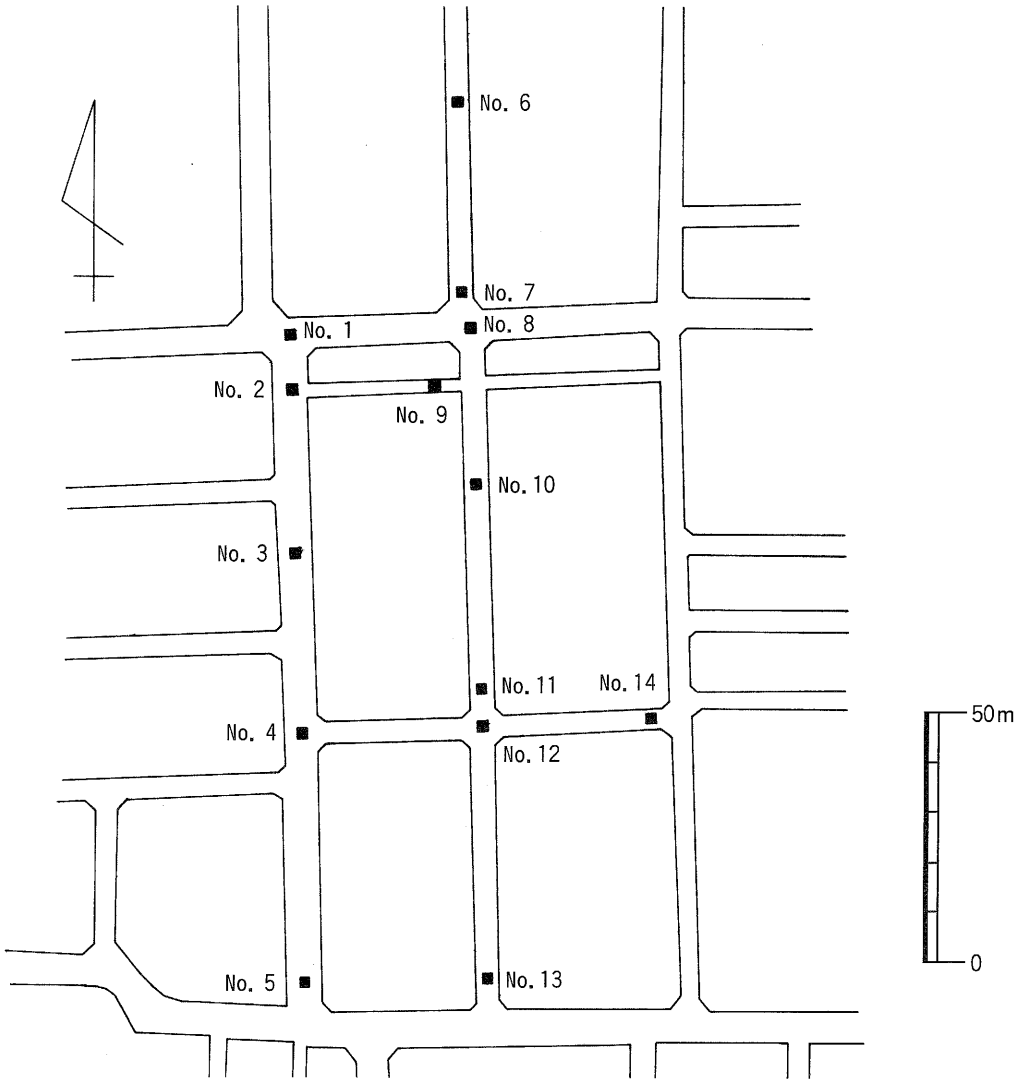
第２章　調査概要

第１節　調査方法

今回の調査は、当調査研究会が中田遺跡内で行った第30次調査にあたる。公共下水道工事に伴う調査であり、調査地は約２ｍ四方の人孔部分14か所で、南北約180ｍ・東西約80ｍの範囲に拡がっている。

調査区名は北西部から№１～№14とし、１日に付き人孔１箇所のペースで調査を実施し、順番は工事工程に合わせた。

調査は地表下約1.0ｍ～1.2ｍまでを機械掘削し、以下は工事深度に応じて地表下約1.5ｍ～2.1ｍまでを人力掘削により実施した。各調査区の土層断面については、基本的に南壁・東壁を観察・記録の対象としたが、遺構や撹乱の状況で他の壁を対象とした地区もあり、この場合は第３図の土層断面図作成にあたって裏トレースを用いている。層名は調査地全域を対象とした基本層序を第○層と表現し、各調査区毎の細分層序については○を付していない。遺構名は遺構略号＋三桁の数字で表し、数字の最初の二桁（01～14）は調査区№である。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝１／1500）

第２節　基本層序と出土遺物

調査地内の現地表面の標高は、北東部が約11.0m、南西部が約10.6mを測り、東から西に下がる緩やかな傾斜地形が認められる。これは当地が、東方約200mを北流する玉串川により形成された自然堤防上に位置していることに起因するものである。そして玉串川付近ではこの傾斜がさらに顕著になり、現地表面の標高は約12.0mを測る。

第①層は上部がアスファルト、下部は近年の盛土及びガス・水道管等の埋管に伴う撹乱層で、層厚は0.4m～0.7mを測る。

第②層（暗灰色～黒灰色細砂混じり粘土）は旧耕土で、現地表面に平行するようにレベル差が認められる。

第③層（灰褐色～青灰色粘土混じり細砂）の砂を基調とする層は、第②層に伴う床土の性格を有する層と思われる。ほとんど遺物を含んでいない。№１では層厚約0.7mを測り、他の地区に比して厚い堆積となっているが、その詳細については次節で述べる。第②・③層は№５ではみられなかった。

第④層（灰褐色～褐灰色細砂混じり粘土）・第⑤層（灰黄褐色～褐灰色細砂混じり粘土）は類似した層相であり、ほぼ調査地全域でみられ、それぞれ鎌倉時代・平安時代後期頃の遺物包含層である。なお北部の№６では第④層相当層は砂礫層となっており、これは洪水砂層の可能性がある。

標高9.5m前後に堆積する第⑥層（灰色～暗灰色細砂混じり粘質シルト）は奈良時代頃の遺物包含層であるが、出土遺物の量はごく少量である。

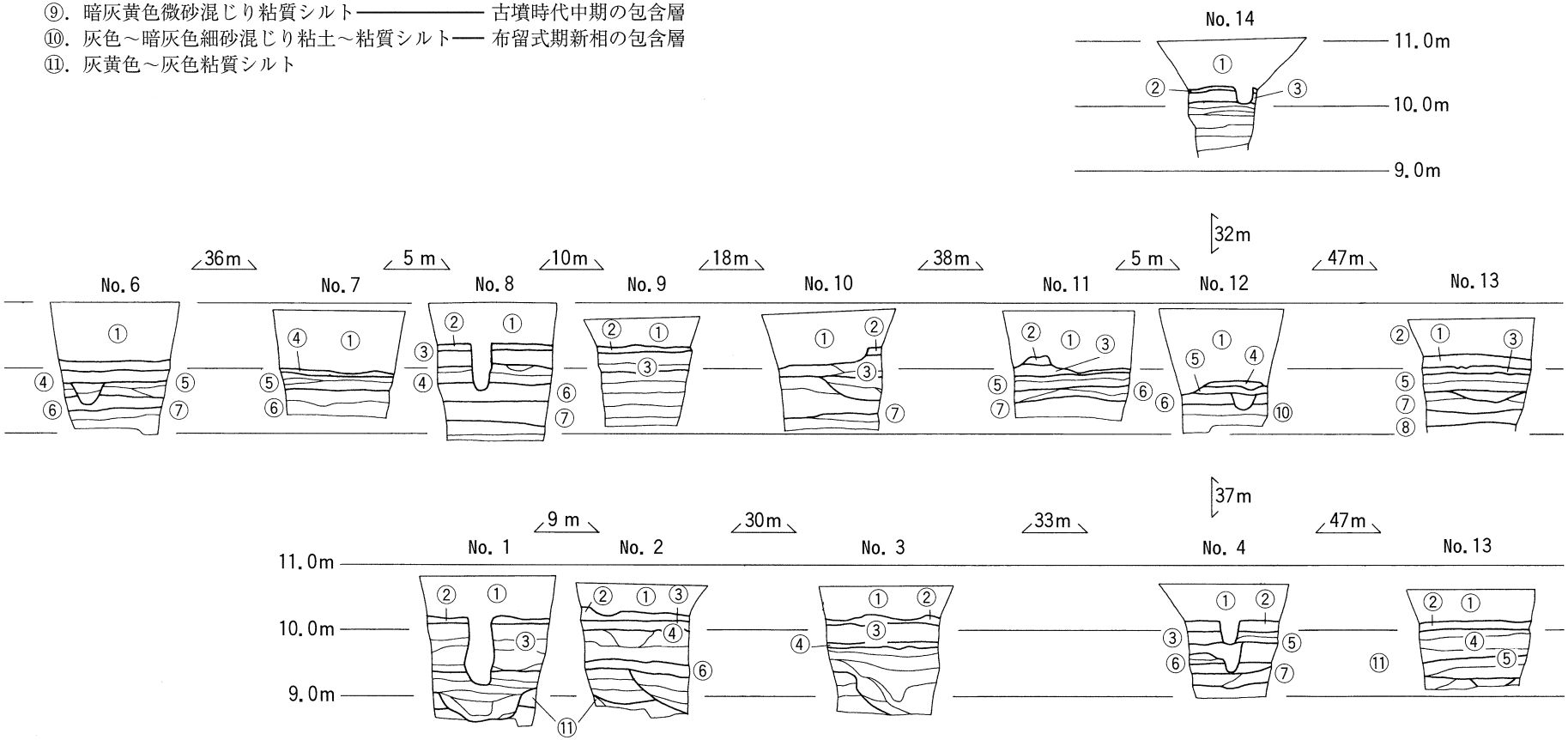
第⑦層（灰色～黄灰褐色細砂混じり粘質シルト）は古墳時代中期～後期の包含層で、№６・10では埴輪が検出されている。なお№13でのみみられた第⑧層（灰青色粗砂混じり粘質シルト）も古墳時代後期の遺物包含層と考えられるが、土圧により破損した状況の須恵器横瓶が出土していることから、落ち込み等の遺構埋土である可能性もあろう。

第⑨層（暗灰黄色微砂混じり粘質シルト）は、№４でのみみられた古墳時代中期の遺物包含層である。なお第⑥・⑦・⑨層は層相が類似している。

第⑩層（灰色～暗灰色細砂混じり粘土～粘質シルト）は、今回の調査地中、№12でのみ検出された古墳時代前期（布留式期新相）の遺物包含層である。

第⑪層（灰黄色～灰色粘質シルト）は、主に西部の調査区で、標高9.2m前後で確認した。西側の第15次調査地北部において、弥生時代後期の遺構面を形成している層と思われる。当該期の遺構は検出されなかったが、№１では上層から土器が出土しており、包含層の可能性がある。また№１では、これ以下に灰青色シルト～微砂層、黄褐色砂層といった水成層が認められる。河川堆積土層であろう。

①．アスファルト・盛土・撹乱
②．暗灰色～黒灰色細砂混じり粘土――――― 旧耕土
③．灰褐色～青灰色粘土混じり細砂――――― 床土
④．灰褐色～褐灰色細砂混じり粘土 ――――― 鎌倉時代の包含層
⑤．灰黄褐色～褐灰色細砂混じり粘土――――― 平安時代の包含層
⑥．灰色～暗灰色細砂混じり粘質シルト――――― 奈良時代の包含層
⑦．灰色～黄灰褐色細砂混じり粘質シルト――――― 古墳時代中期～後期の包含層
⑧．灰青色粗砂混じり粘質シルト
⑨．暗灰黄色微砂混じり粘質シルト――――― 古墳時代中期の包含層
⑩．灰色～暗灰色細砂混じり粘土～粘質シルト――― 布留式期新相の包含層
⑪．灰黄色～灰色粘質シルト



第３図　基本層序（Ｓ＝１／100）

第３節　検出遺構と出土遺物

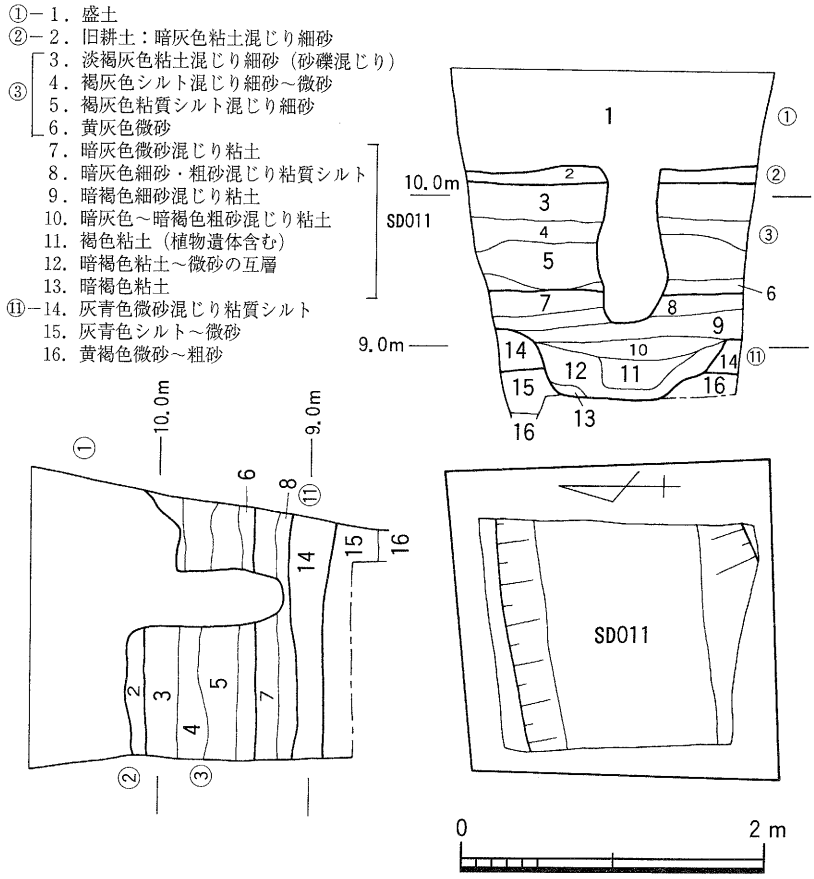
〈No.１〉

第⑪層上面で溝１条（ＳＤ011）を検出した。なおこの上位に堆積する第③層は、砂を基調とする層であり、ほぼ水平に四層に分層が可能である。均質な土層で遺物を全く含んでいない。このことからこの第③層は洪水によるものか、あるいはＳＤ011の埋め戻しに伴う人為的なものとも考えられ、ＳＤ011上層部分と捉えられよう。当調査区は大規模な溝の中心に位置しているのであろう。第⑪層からは弥生時代後期の土器が出土している。

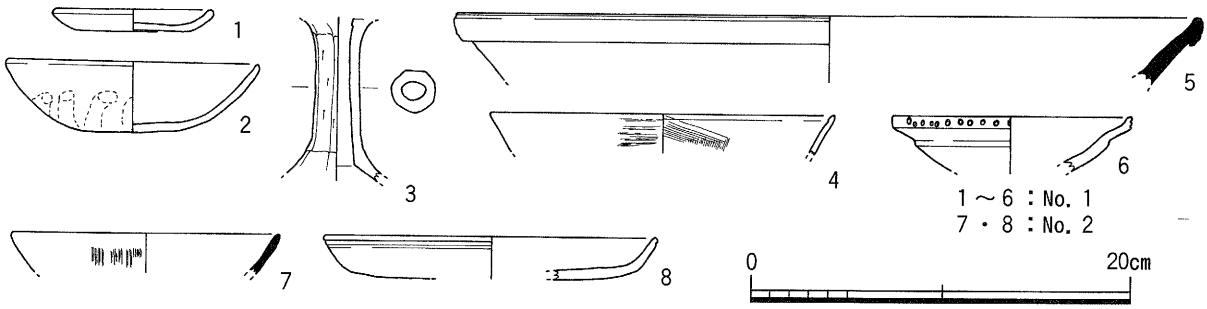
ＳＤ011

東西方向の溝で、深さ約1.4mを測り、幅は不明である。断面形状は逆台形を呈する。埋土は大まかにみて上層が褐灰色系粘土混じり砂（第③層）、中層が暗灰色細砂混じり粘土～粘質シルト（第７・８層）、下層が暗褐色系粘土（第９～13層）で、水成層の様相である。

遺物は中層・下層から、平安時代を中心に、弥生時代後期以降の土器等が出土している（１～６）。土師器皿（１）・杯（２）・高杯（３）は中層からの出土で、平安時代に比定されるものである。２は外面下半に指頭痕が残り、口縁部ヨコナデ、底部内面はナデである。奈良時代の土師器皿（４）・古墳時代中期の須恵器甕（５）・弥生時代後期の高杯（６）は下層からの出土である。４は外面ヘラミガキで、内面に二段の放射状暗文を施す。６は口縁端部に竹管文を巡らせるもので、生駒西麓産の胎土である。



第４図　No.１　平面・断面図（Ｓ＝１／50）



第５図　No.１・２　出土遺物（Ｓ＝１／４）

〈No.２〉

第⑥層上面で溝１条（ＳＤ021）、下面で土坑１基（ＳＫ021）を検出した。

第⑥層上位の第④層からは13世紀頃までの土器が出土しており、図化しえたものは同安窯系青磁椀（７）・土師器皿（８）である。第⑥層下位の第12～15層からは古墳時代中期～奈良時代頃の土器が出土している。

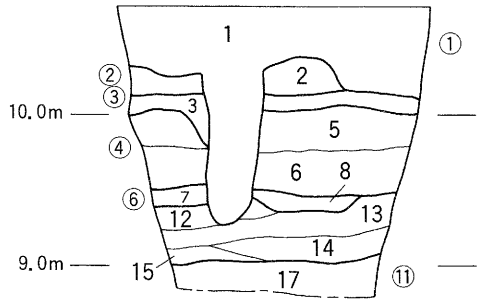
ＳＤ021

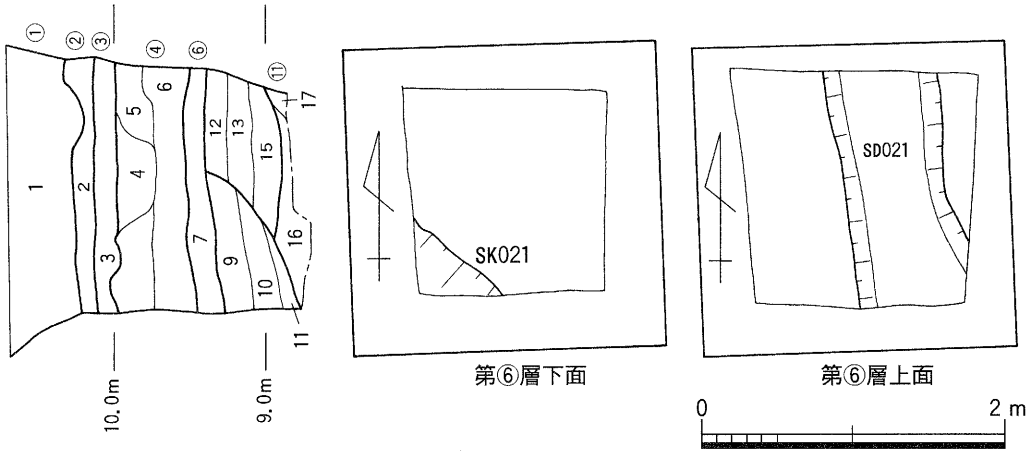
南北方向の溝で、幅約70cm・深さ約15cmを測る。断面皿状で、埋土は褐灰色細砂混じり粘質シルトである。13世紀頃の瓦器椀等の土器が出土しているが、図化しえるものはなかった。

ＳＫ021

調査区南西角に位置し、南西に落ち込む。幅90cm以上・深さ60cm以上を測る。埋土は上から灰黄褐色シルト・淡灰青色シルト・灰色細砂混じり粘土～シルトである。埋土の状況から溝の可能性がある。遺物は出土していないが、層位的にみて時期は平安時代頃に比定される。

①－１．盛土
②－２．旧耕土：黒灰色粘土混じり微砂～細砂
③－３．青灰色細砂混じりシルト
４．灰褐色細砂～礫混じりシルト
④［５．褐灰色粗砂～礫混じり粘土
６．褐灰色細砂混じり粘土］
⑥－７．褐灰黄色微砂混じり粘質シルト
８．褐灰色細砂混じり粘質シルト－SD021
９．灰黄褐色シルト
10．淡灰青色シルト
11．灰色細砂混じり粘土～シルト］SK021
12．褐灰色細砂混じり粘質シルト
13．暗灰黄色細砂混じりシルト
14．灰黄色粗砂混じりシルト
15．暗灰黄色粘質シルト
⑪［16．灰色シルト
17．暗灰黄色粘質シルト］





第６図　No.２　平面・断面図（Ｓ＝１／50）

〈No.３〉

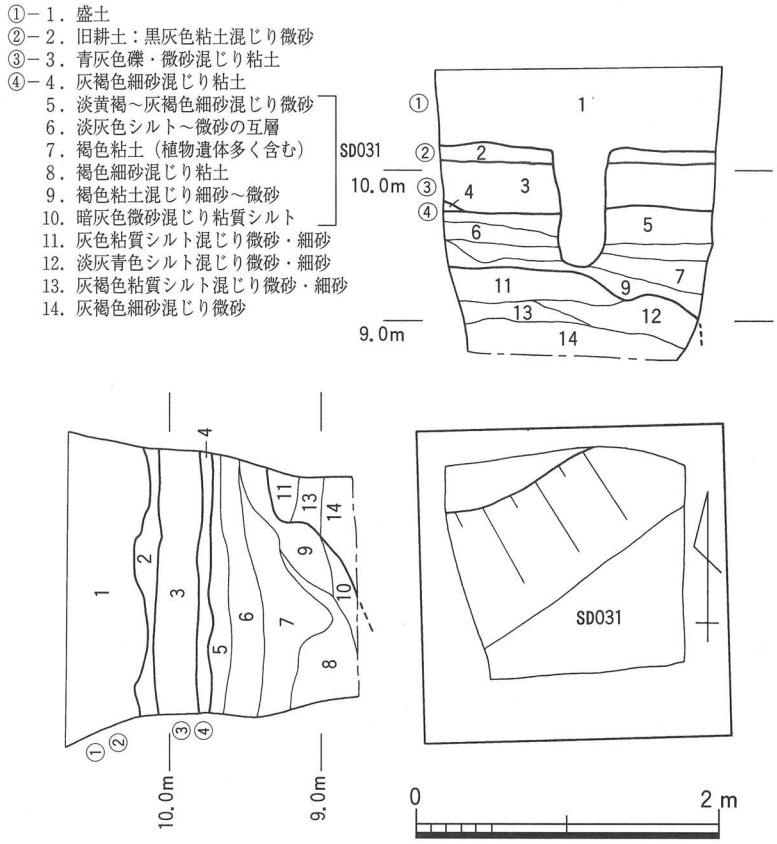
第④層下面で溝１条（ＳＤ031）を検出した。

ＳＤ031

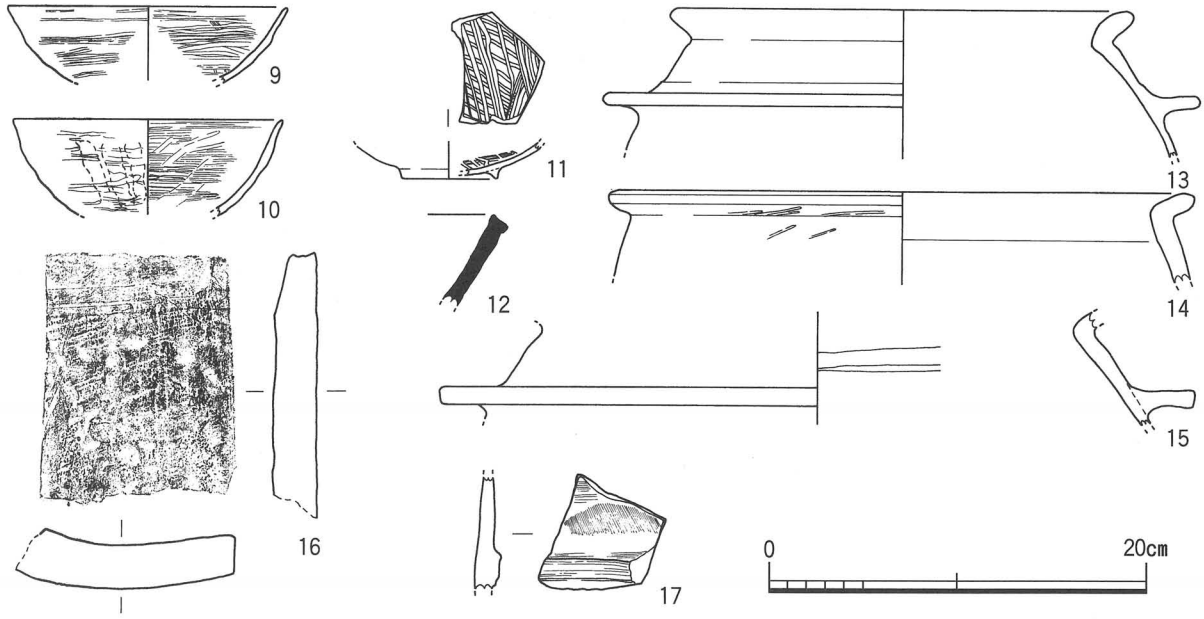
北東－南西方向にのびる溝で、北の肩部を検出した。深さは1.0m以上を測る。埋土はおおまかにみて、上層が灰褐色系微砂～シルトの互層（第５・６層）、中層が植物遺体を多く含む褐色粘土（第７層）、下層が褐色系砂混じり粘土（第８～10層）で、滞水状況が窺える。なおベースとなるのは砂を基調とする層（第11層～第14層）で、ここからも同時期の土器が出土しており、

前述の北部No.１のＳＤ011と同様、ＳＤ031は調査区全体を含む溝と考えられる。

遺物は12世紀頃の土器・瓦の他、埴輪が出土している（９～17）。図化しえたのは瓦器椀（９～11）・東播系須恵器鉢（12）・土師器羽釜（13～15）・平瓦（16）・円筒埴輪（17）である。12は口縁部形態から11世紀末頃に比定されるものである。[註1] また上層から建築材と思われる薄板材（長さ107㎝・幅８㎝・厚さ0.4㎝）が１点出土している。



第７図　No.２　平面・断面図（Ｓ＝１／50）

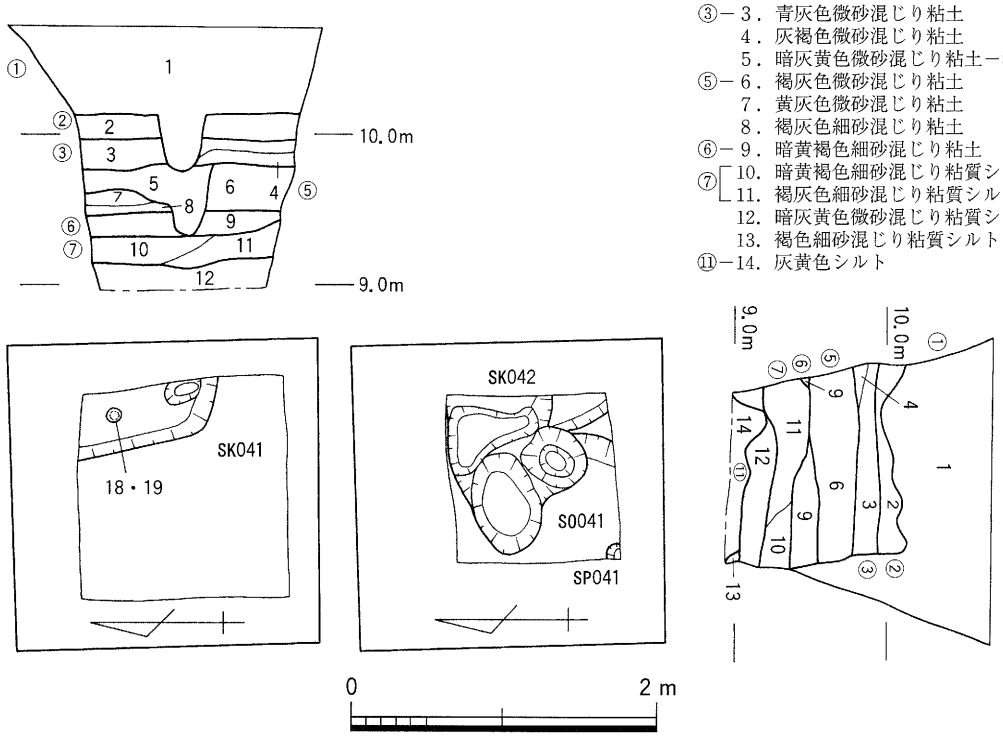


第８図　No.３　出土遺物（Ｓ＝１／４）

〈No.４〉

第⑤層上面で土坑１基（ＳＫ041）、第⑪層上面で落ち込み１基（ＳＯ041）、またＳＯ041の底部で土坑１基（ＳＫ042）・ピット１個（ＳＰ041）を検出した。なお第⑪層上面遺構を覆う第⑦層（第10層）からは、古墳時代後期の土器（21・22）の他、滑石製紡錘車１点（23）が出土した。

①－１．盛土
②－２．旧耕土：暗灰黒色微砂混じり粘土
③－３．青灰色微砂混じり粘土
　　４．灰褐色微砂混じり粘土
　　５．暗灰黄色微砂混じり粘土－SK041
⑤－６．褐灰色微砂混じり粘土
　　７．黄灰色微砂混じり粘土
　　８．褐灰色細砂混じり粘土
⑥－９．暗黄褐色細砂混じり粘土
⑦┌10．暗黄褐色細砂混じり粘質シルト
　└11．褐灰色細砂混じり粘質シルト
　　12．暗灰黄色微砂混じり粘質シルト－SO041
　　13．褐色細砂混じり粘質シルト－SP041
⑪－14．灰黄色シルト



第９図　No. 4　平面・断面図（Ｓ＝１／50）

これは一部を欠損しているが、法量は直径3.50㎝・高さ1.65㎝・重量30.75g・上面直径2.05㎝・孔径0.6㎝を測る。側面に８方向、底面に６方向の鋸歯文、側面・底面に圏線文、そして上面には斜放射状に線刻を施している。

ＳＫ041

調査区北東部に位置し、平面形は方形の角部の状況を呈する。深さ15㎝～25㎝で、底南部では深さ約50㎝のピット状に落ち込む部分がみられる。埋土は暗灰黄色微砂混じり粘土である。遺物は、土師器皿が正位で二枚重ね状態で出土している（上－18、下－19）他、瓦器椀等があり、時期は12世紀代に比定される。ベースとなる第⑤層からも同時期の瓦器椀（20）が出土している。

ＳＯ041

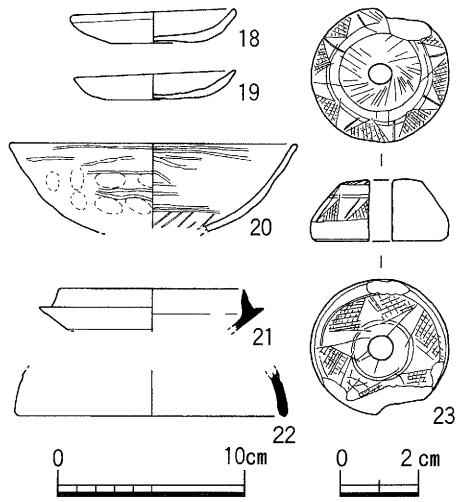
調査区南東部を肩とし、北に向かって深さ約20㎝落ち込んでいる。埋土は暗灰黄色微砂混じり粘質シルトである。古墳時代中期～後期の土器が出土している。

ＳＫ042

1.0m×0.8mの平面不定形の土坑である。底部は凹凸があり、深さ２㎝～29㎝で三箇所が落ち込む。埋土は上層が淡灰黄色微砂～シルト、下層が褐色細砂混じり粘質シルトである。本来三つのピットであったのかもしれない。時期不明の土師器片が出土している。

ＳＰ041

調査区南西角に位置し、深さ約８㎝、埋土は褐色細砂混じり粘質シルトである。



第10図　No. 4　出土遺物（Ｓ＝1/4、1/2）

〈No.5〉

第⑪層上面で土坑１基（ＳＫ051）・ピット１個（ＳＰ051）を検出した。時期は不明であるが、これらを覆う第⑤層から瓦器皿（24）・黒色土器椀（25）が出土していることから、平安～鎌倉時代頃と考えられる。

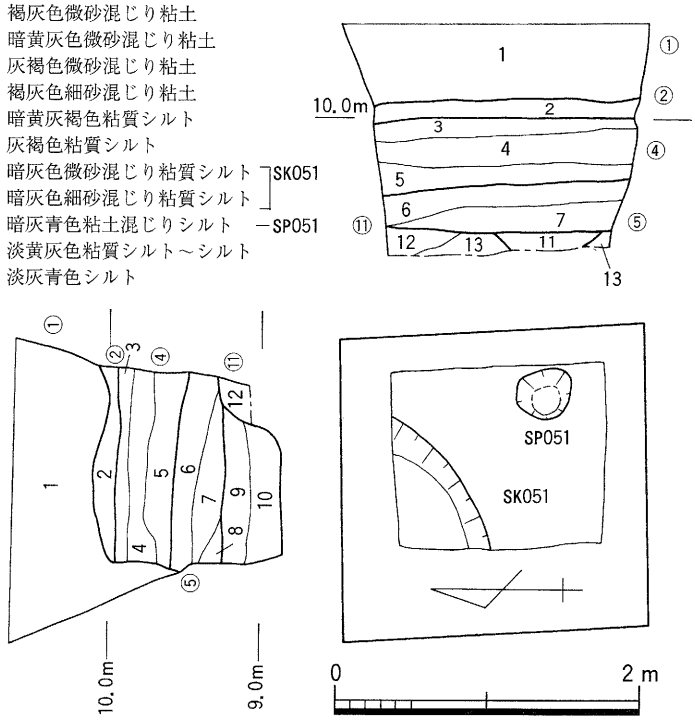
ＳＫ051

調査区北部に位置し、検出部分の肩のラインは弧状を呈する。深さ約40cmを測り、埋土は上層が暗灰色微砂混じり粘質シルト、下層が暗灰色細砂混じり粘質シルトである。遺物は時期不明の土師器・須恵器片が出土している。

ＳＰ051

40cm×32cm、深さ45cmを測り、埋土は上層が暗灰青色粘土混じりシルト（第11層）、下層が暗灰色粘土である。遺物は時期不明の土器片が出土している。

①－１．盛土
②－２．旧耕土：暗灰色粘土混じり微砂
④ ３．褐灰色微砂混じり粘土
　 ４．暗黄灰色微砂混じり粘土
　 ５．灰褐色微砂混じり粘土
⑤ ６．褐灰色細砂混じり粘土
　 ７．暗黄灰褐色粘質シルト
　 ８．灰褐色粘質シルト
　 ９．暗灰色微砂混じり粘質シルト ┐SK051
　 10．暗灰色細砂混じり粘質シルト ┘
　 11．暗灰青色粘土混じりシルト　－SP051
⑪ 12．淡黄灰色粘質シルト～シルト
　 13．淡灰青色シルト



第11図　No. 5　平面・断面図（Ｓ＝１／50）

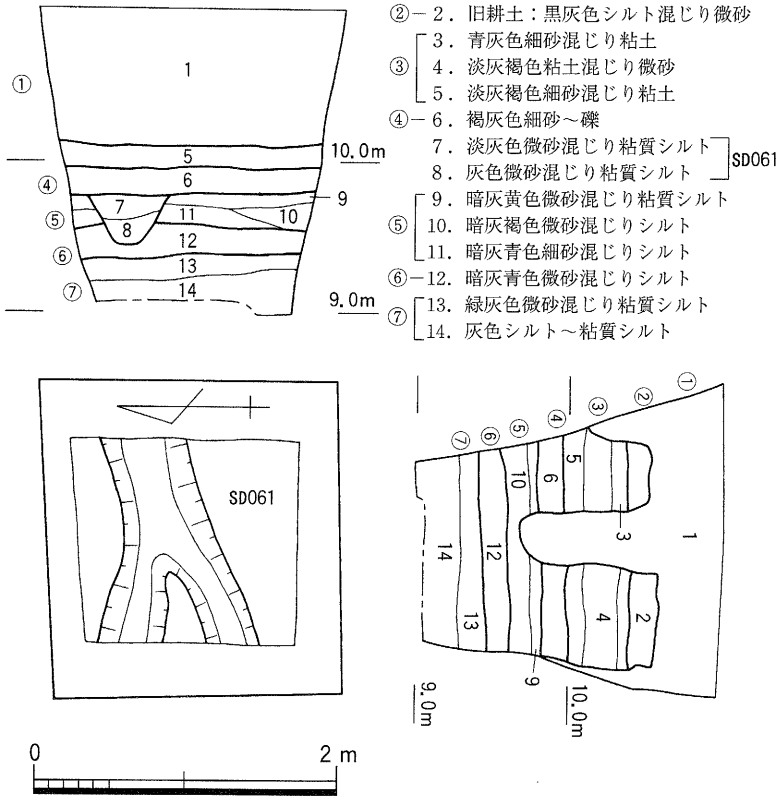
〈No.6〉

第⑤層上面から切り込まれる溝１条（ＳＤ061）を検出した。第⑤層からは奈良～平安時代に比定される土師器甕（27）、第⑥層からは古墳時代後期の須恵器杯身（28）が出土している。

ＳＤ061

東西方向の溝で、幅約50cm・深さ約30cmを測り、西部では幅約40cm（北）と約30cm（南）の２条の溝に分岐している。断面逆台形を呈し、埋土は上層が淡灰色微砂混じり粘質シルト、下層が灰色微砂～粘質シルトで、当初は流水していたと考えられる。遺物は出土していないが、層位的には鎌倉時代以降に比定されるものである。

①－１．盛土
②－２．旧耕土：黒灰色シルト混じり微砂
③ ３．青灰色細砂混じり粘土
　 ４．淡灰褐色粘土混じり微砂
　 ５．淡灰褐色細砂混じり粘土
④－６．褐灰色細砂～礫
　 ７．淡灰色微砂混じり粘質シルト ┐SD061
　 ８．灰色微砂混じり粘質シルト ┘
⑤ ９．暗灰黄色微砂混じり粘質シルト
　 10．暗灰褐色微砂混じりシルト
　 11．暗灰青色細砂混じりシルト
⑥－12．暗灰青色微砂混じりシルト
⑦ 13．緑灰色微砂混じり粘質シルト
　 14．灰色シルト～粘質シルト



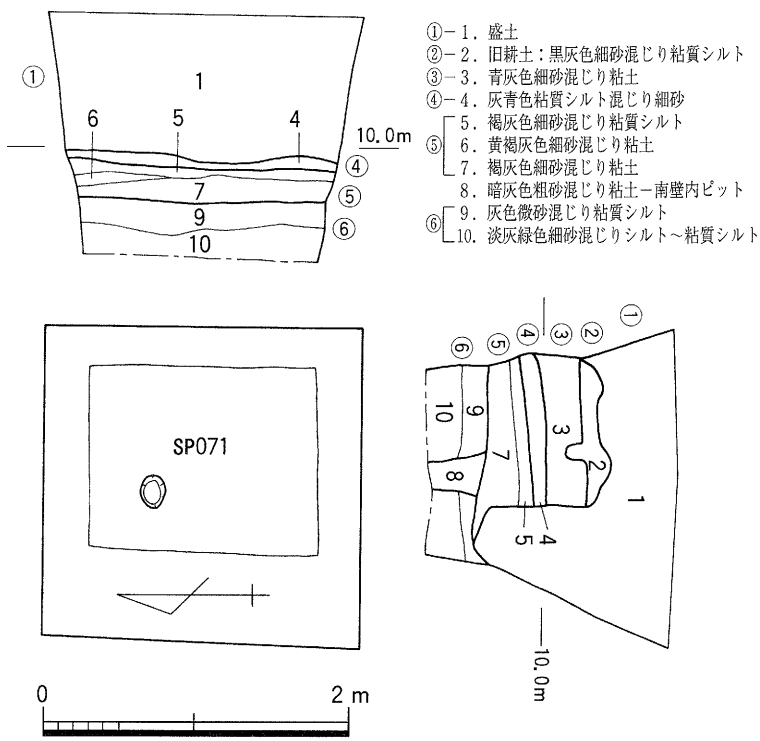
第12図　No. 6　平面・断面図（Ｓ＝１／50）

〈No.7〉

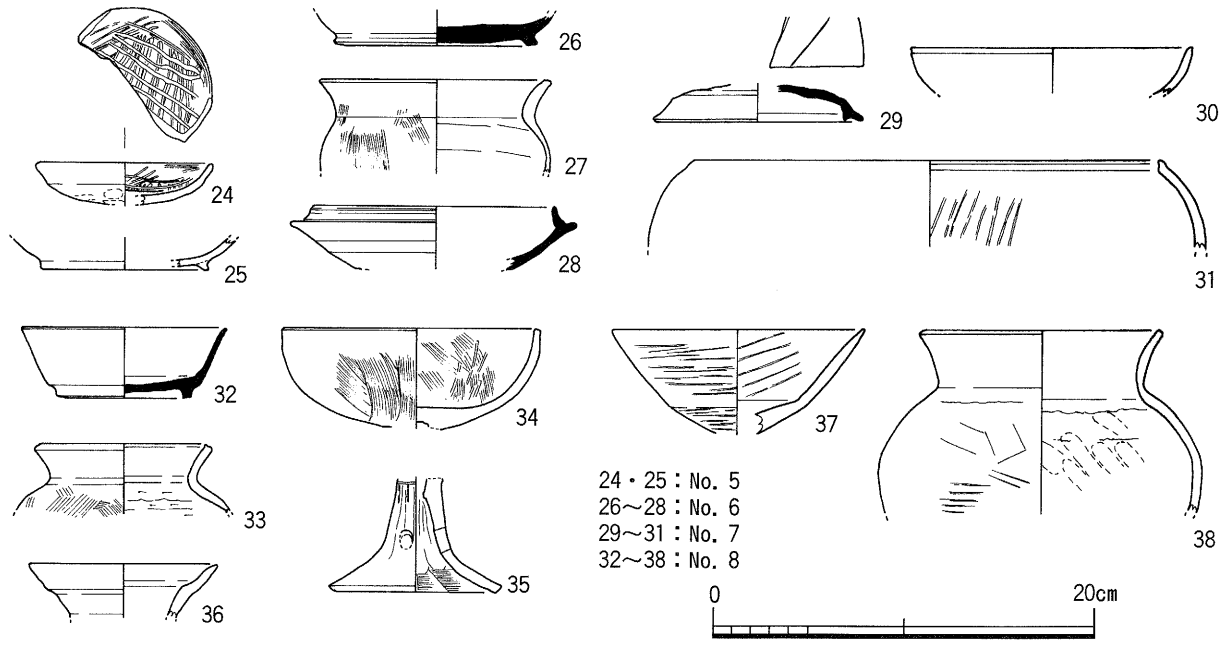
第⑥層上面でピット１個（ＳＰ071）を検出した。第⑥層からは、土師器杯（30）・鉢（31）等飛鳥～奈良時代の土器、この上位の第⑤層からは平安時代までの土器が出土している。第⑤層からの飛鳥時代に比定される須恵器杯蓋（29）は天井部外面にヘラ記号を有する。

ＳＰ071

平面形は22cm×18cmの楕円形を呈し、深さ12cm以上を測り、埋土は暗灰色粗砂混じり粘土である。遺物は出土していないが、層位的にみて時期は平安時代頃と考えられる。なおＳＰ071から南に約1.2mの南壁内にも同様のピットが確認できた。



第13図　No. 7　平面・断面図（Ｓ＝１／50）



第14図　No. 5～8　出土遺物（Ｓ＝１／４）

〈No.8〉

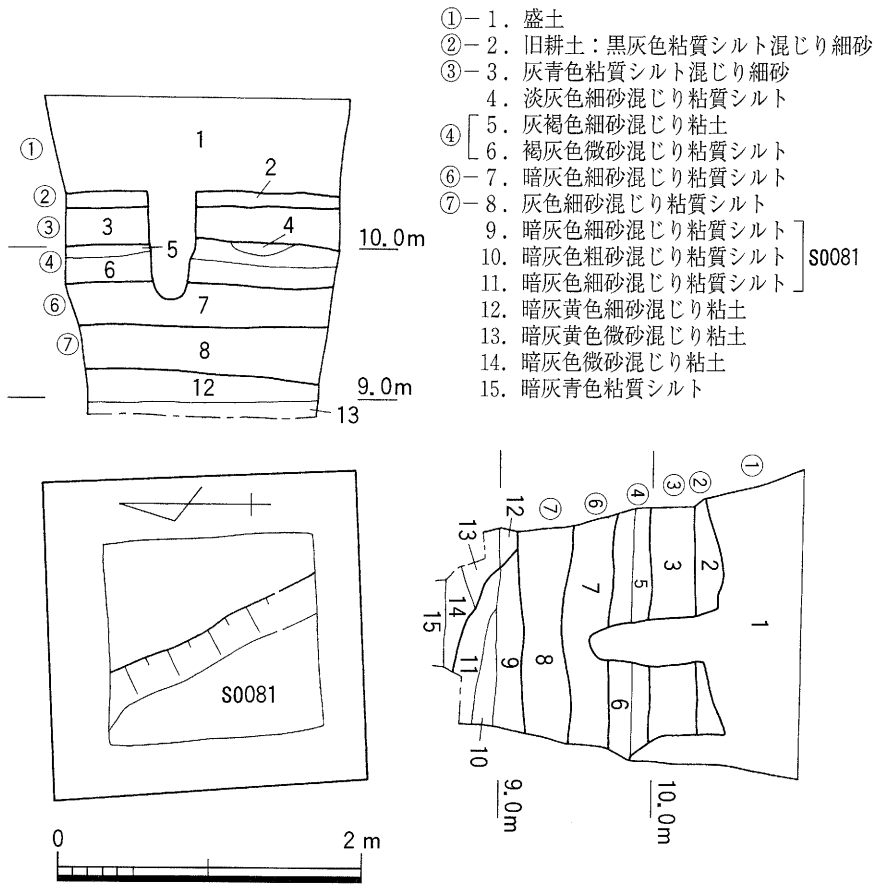
第⑦層下面で落ち込み１基（ＳＯ081）を検出した。第⑦層からは古墳時代中期頃に比定される土師器甕（33）・高杯（34・35）、古墳時代前期庄内式期頃に比定される土師器壺（36）が、また上位の第⑥層からは奈良時代の須恵器杯身（32）、第④層からは鎌倉時代頃の土器が出土し

ている。

ＳＯ081

調査区中央から西に向かって深さ約40㎝落ち込むもので、検出部の肩のラインは北西－南東方向の直線的なものである。埋土はおおまかに暗灰色系砂混じり粘質シルトである。

出土遺物には古墳時代中期頃までの土器があり、図化しえたものには土師器高杯（37）・甕（38）がある。37は古墳時代前期庄内式期に比定されるものである。38は古墳時代中期頃のものと考えられる。



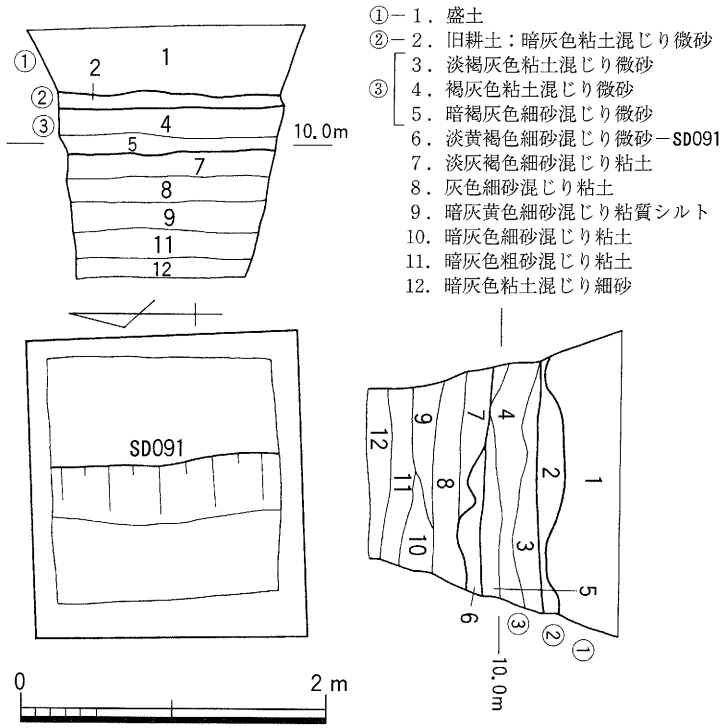
第15図　No. 8　平面・断面図（Ｓ＝１／50）

〈No.９〉

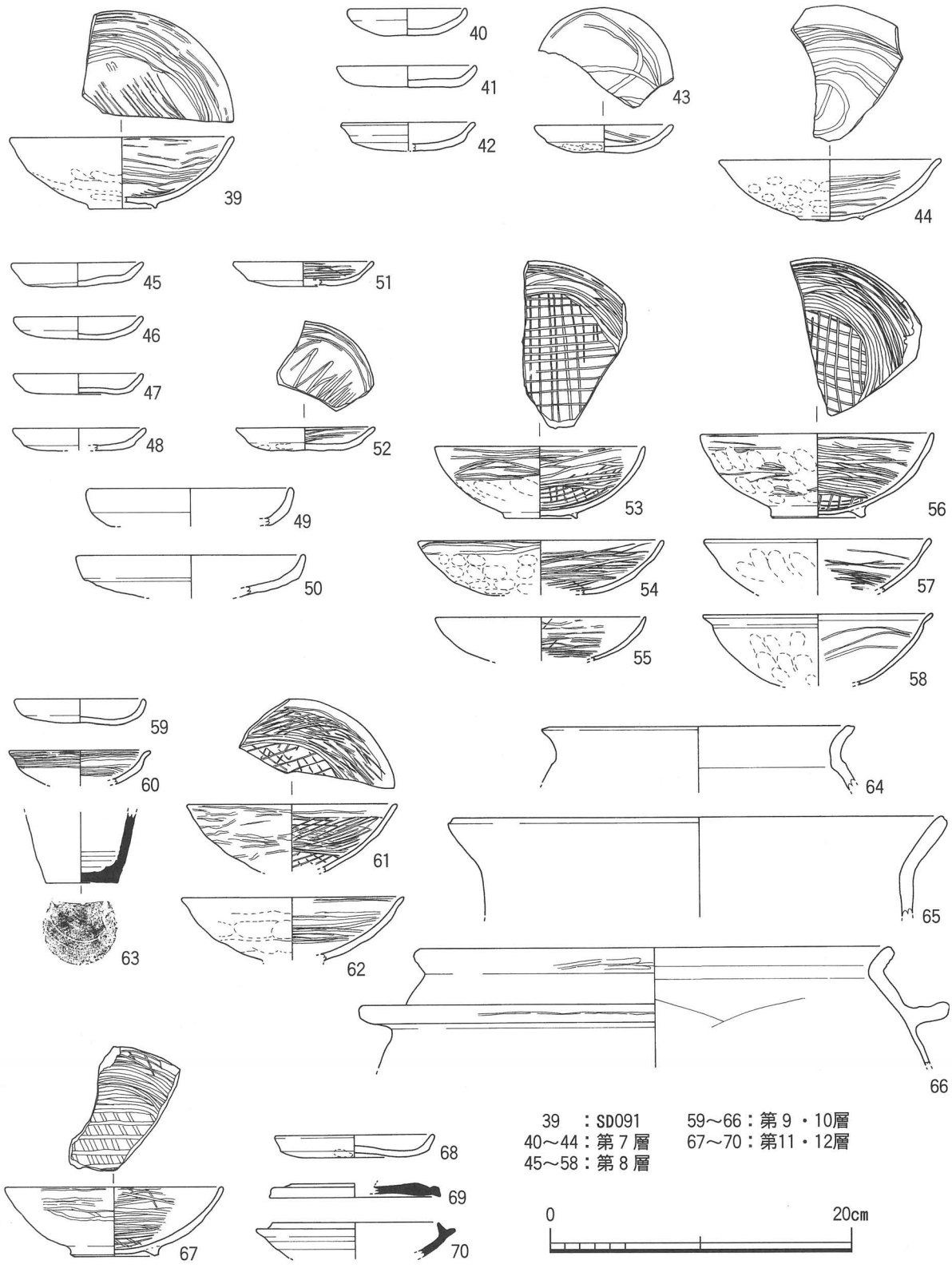
第③層下面で溝１条（ＳＤ091）を検出した。以下の土層堆積状況（第７～12層）は北西部No.１に類似する水成層の様相を呈しており、おそらく同様に調査区全体が溝に含まれるものと考えられる。ただ遺物の出土状況では当地の方が量的に非常に密であることがいえ、またやや新しい13世紀代のものがみられることからNo.１のＳＤ011と同一の溝であるかどうかは断定しえない。出土遺物は各層から主に12～13世紀代の土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・瓦が出土しており、下層では他に埴輪や飛鳥～奈良時代の土器も少量含まれている（39～70）。最上部第７層からの瓦器椀（44）は13世紀中葉頃に比定され、これが埋没時期を示すものかもしれない。

ＳＤ091

調査区中央で南北方向の直線的な東肩を検出した。幅90㎝以上で、底部は起伏があり、深さは約20㎝を測る。埋土は第③層に類似する淡黄褐色細砂混じり微砂で、流水



第16図　No. 9　平面・断面図（Ｓ＝１／50）

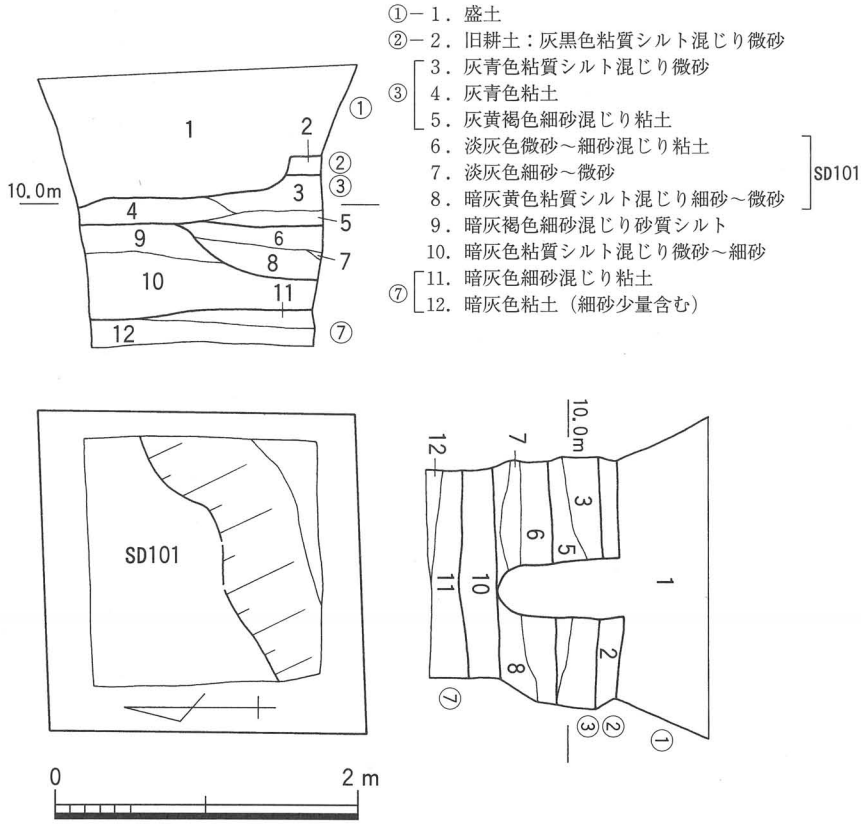


第17図　No. 9　出土遺物（Ｓ＝１／４）

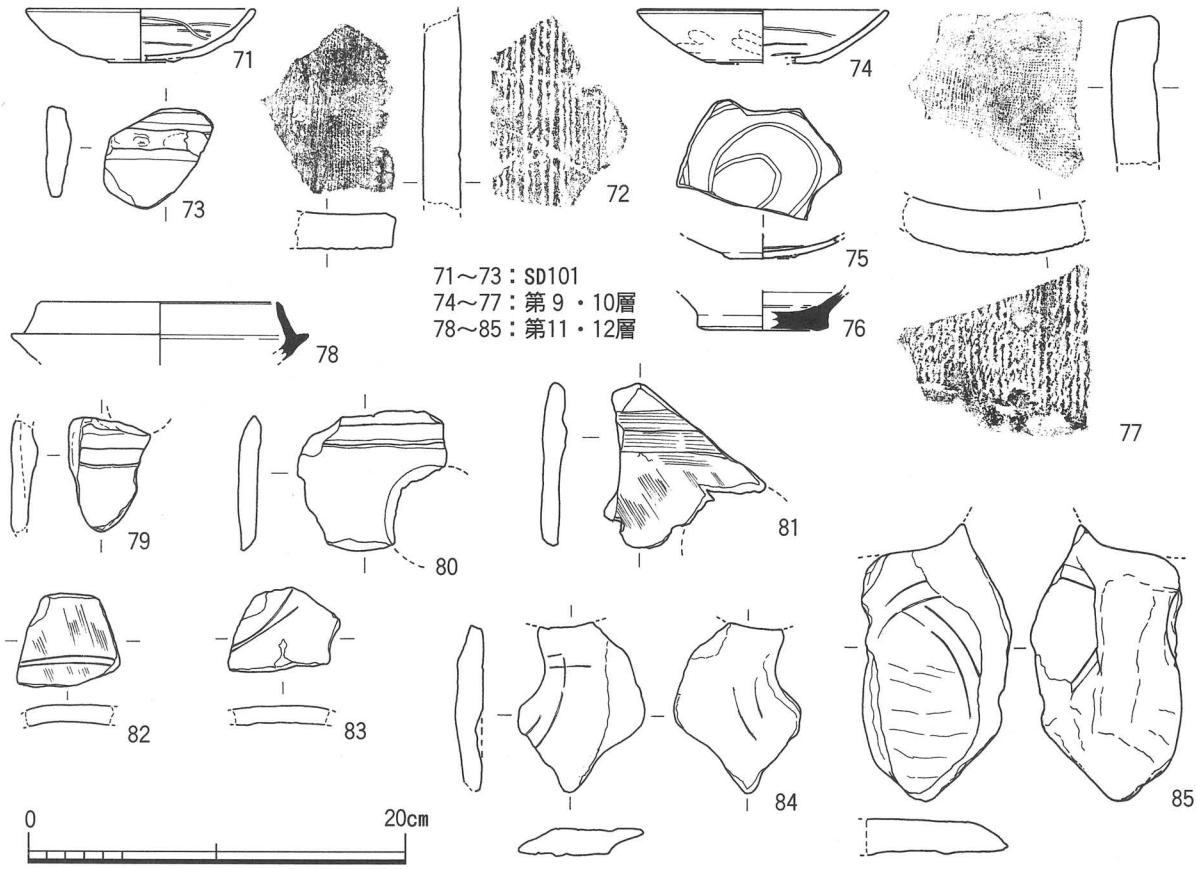
状況が窺える。遺物は12～13世紀頃の土器が出土しており、図化しえたものには12世紀後半に比定される瓦器椀（39）がある。

〈No.10〉

第③層下面で溝１条(ＳＤ101)を検出した。また調査区南部、標高約9.1m～9.3mに堆積する第⑦層中の主に南壁内から、比較的まとまった状態で埴輪片（79～85）が出土しており、このことは付近に古墳の存在を示唆するものであろう。埴輪には円筒埴輪（79～81）、線刻を施す形象埴輪（82～85）があり、破片数は同量程度出土している。円筒埴輪はいずれも円形スカシを有するもので、色調は淡褐色～明褐色を呈する。タガは低く退化しており、調整は81にナナメハケが認められる。84・85は両面に二本線による弧状の線刻を施すもので、蓋形埴輪の立飾部分と考えられる。淡橙色を呈し、胎土等の特徴からも同一個体であろう。82



第18図　No.10　平面・断面図（Ｓ＝１／50）



第19図　No.10　出土遺物（Ｓ＝１／４）

・83は器種不明で、82は明褐色、83は淡黄褐色を呈する。これらの埴輪の時期は、円筒埴輪の特徴から６世紀代と考えられ、同層からの須恵器杯身(78)は６世紀前半に比定されるものである。

ＳＤ101

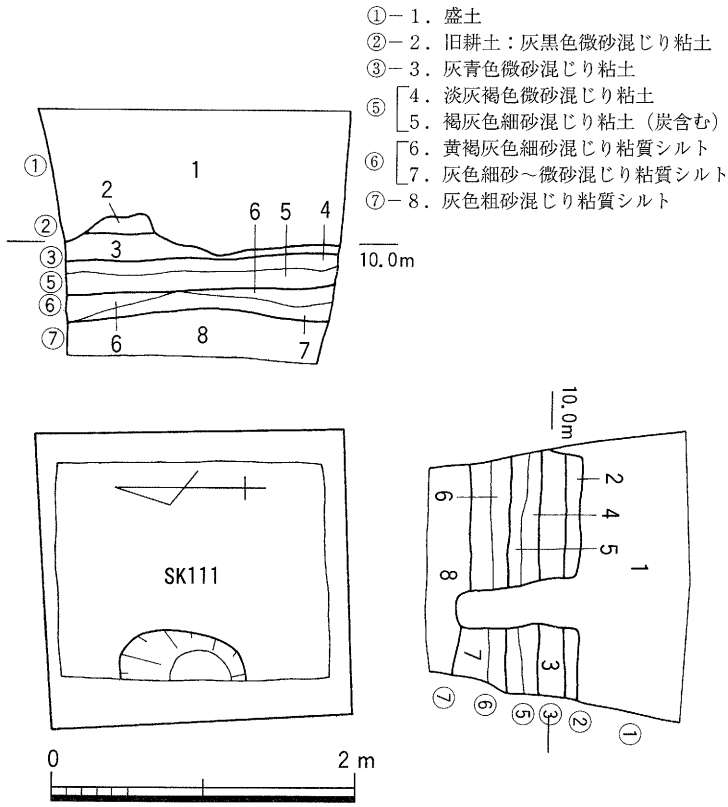
調査区中央から南東に向かって深さ約40cm落ち込み、検出部の肩は北東－南西方向の蛇行するラインを呈する。埋土は淡灰色～暗灰黄色の細砂～微砂を基調とし、流水状況が窺える。遺物は13～14世紀頃の土器・瓦の他埴輪が出土している。図化しえたものは瓦器椀(71)・平瓦(72)・円筒埴輪（73）である。なおベースとなる第９・10層にも同時期の遺物、瓦器椀（74・75）・白磁碗（76）・平瓦（77）他が含まれており、このことから調査区全体が深さ約60cmを測る溝内に収まり、ＳＤ101はその最終堆積部分であると考えられる。

〈No.11〉

第⑦層上面で土坑１基（ＳＫ111）を検出した。第⑦層からは古墳時代後期～奈良時代の土器、上位の第⑥層からは奈良時代頃の土器、第⑤層からは平安時代頃の土器・瓦が出土している。図化しえたものは第⑤層の土師器皿（86）、第⑥層の土師器杯（87）である。86は灯明皿で、灯芯痕が認められる。

ＳＫ111

西壁際で検出した土坑で調査区外に続く。検出部分の平面形は楕円形の半分というもので、規模は長辺84cm・短辺33cm以上・深さ約12cmを測る。埋土は暗灰色細砂混じり粘質シルトである。遺物は出土していないが、層位的にみて時期は奈良時代頃の可能性が高い。



第20図　No.11　平面・断面図（Ｓ＝１／50）

〈No.12〉

当地区では第①層盛土が厚くなっており、旧耕土・床土にあたる第②・③層は認められなかった。遺構は第⑥層上面で溝１条（ＳＤ121）・ピット１個（ＳＰ121）を検出した。両遺構から遺物は出土していないが、層位的には平安時代以降に比定されるものである。各層の出土遺物は、第④層からは瓦器椀等の中世頃の土器、第⑤層からは黒色土器等の平安時代頃の土器、第⑥層からは古墳時代後期～奈良時代頃の土器がある。図化しえたものは第⑥層の須恵器甕（88）である。また標高約9.4m以下では、今回の調査地中で唯一、古墳時代前期（布留式期新相）に比定される包含層（第⑩層）が確認された。図化しえた土器は甕（89・90）・高杯（91）である。

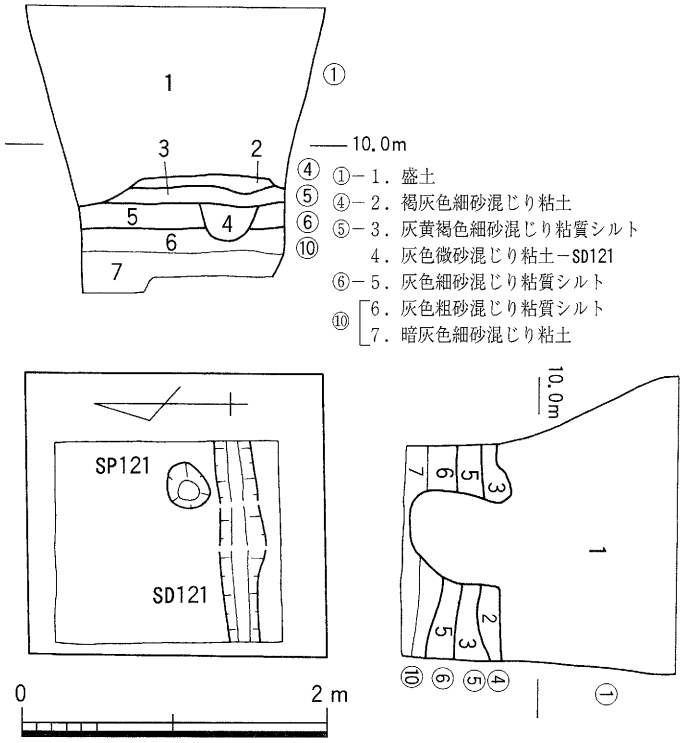
ＳＤ121

東西方向の直線的な溝で、幅約30cm・深さ約20cmを測る。断面逆台形に近く、埋土は灰色微砂

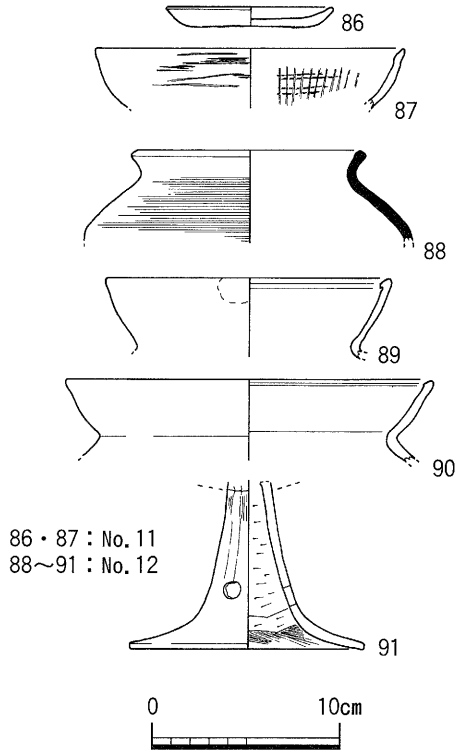
混じり粘土である。

ＳＰ121

平面形は31㎝×26㎝の楕円形を呈し、深さ約８㎝を測る。埋土はＳＤ121と同様灰色微砂混じり粘土である。



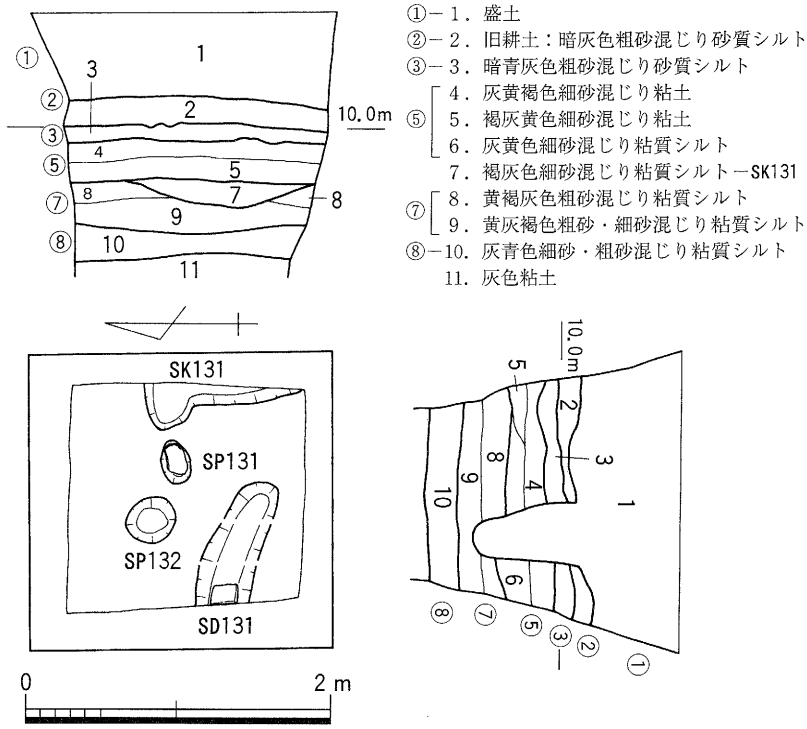
第21図　No.12　平面・断面図（Ｓ＝１／50）



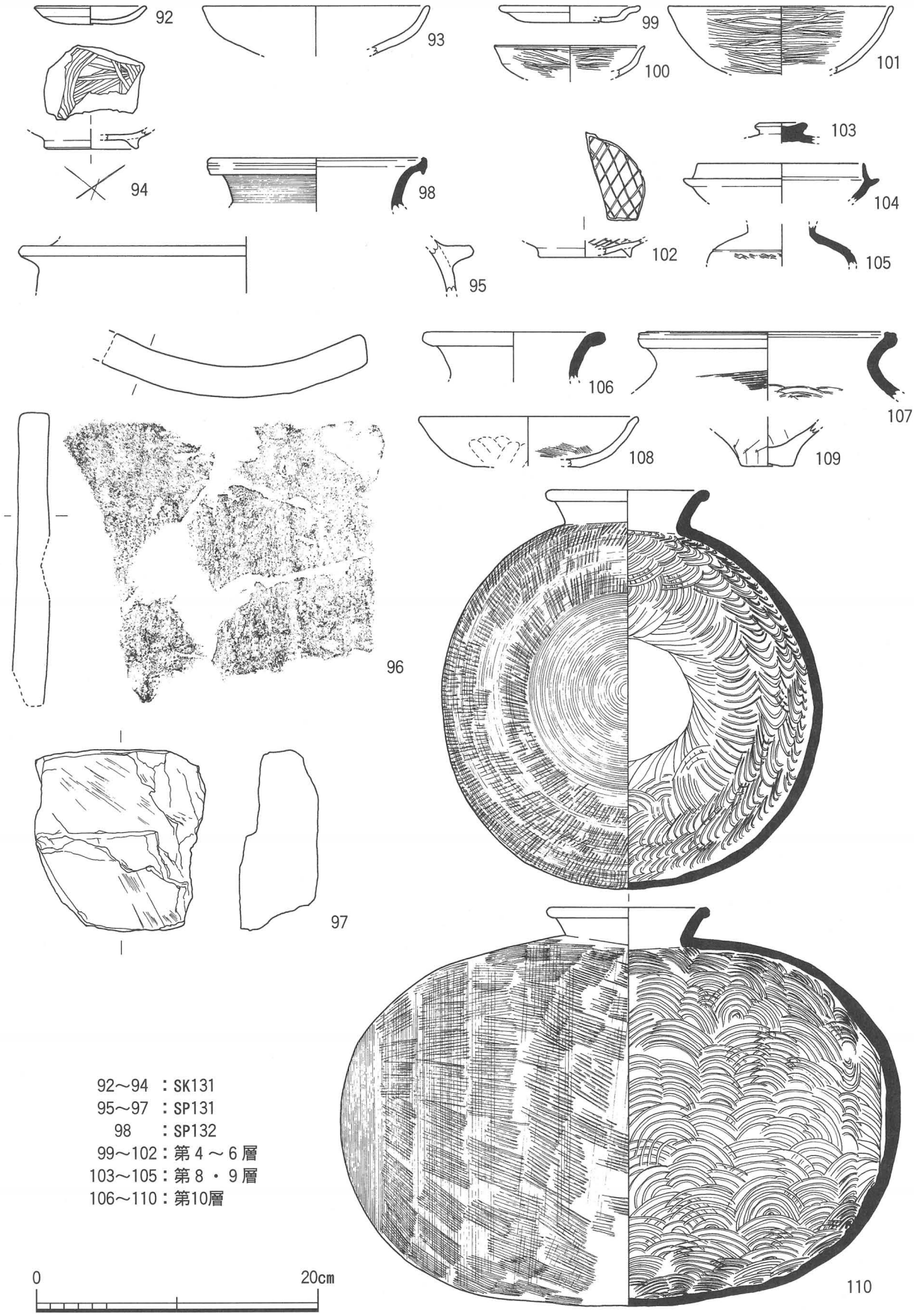
第22図　No.11・12　出土遺物（Ｓ＝１／４）

〈No.13〉

第⑦層上面で土坑１基（ＳＫ131）・溝１条（ＳＤ131）・ピット１個（ＳＰ131）、第⑧層上面でピット１個（ＳＰ132）を検出した。ＳＰ132も第⑦層上面遺構の可能性がある。各層の出土遺物は、第⑤層からは平安時代末頃の土器、第⑦層からは古墳時代後期頃の土器、第⑧層からは古墳時代後期～奈良時代頃の他、弥生時代後期の土器がある。図化しえたものは第⑤層の土師器皿(99)・瓦器皿(100)・椀(101・102)、第⑦層の須恵器杯蓋(103)・杯身(104)・甕(105)、第⑧層の須恵器壺(106)・甕(107)・土師器杯(108)・弥生土器壺



第23図　No.13　平面・断面図（Ｓ＝１／50）



第24図　No.13　出土遺物（Ｓ＝１／４）

(109)・須恵器横瓶（110）である。なお110は、第⑧層北壁内から土圧で押しつぶされた状態で出土した。掘り込み等は認められなかったが、第⑧層は落ち込み等の遺構に伴うものかもしれない。

ＳＫ131

東壁際で検出した平面不定形な土坑で、東部は調査区外に続く。断面皿状で、深さ約20cmを測る。埋土は褐灰色細砂混じり粘質シルトである。遺物は平安時代後期頃に比定される土器が出土しており、土師器皿（92・93）・瓦器椀（94）を図化した。94は底部外面にヘラ記号を有する。

ＳＤ131

調査区南西部に位置し、西は調査区外に続く。検出長90cm・幅約35cm・深さ約８cmを測る。断面逆台形で、埋土は暗灰褐色細砂混じり粘質シルトである。なお底部西壁際で約15cm角の石を検出したが、後述するＳＰ131と同様、根石を有するピットがあったのかもしれない。13世紀頃の土器が出土しているが、図化しえるものはなかった。

ＳＰ131

平面形は30cm×20cmの楕円形を呈する。底部には根石(97)と、さらにその上に割った平瓦（96）を敷いている。96は凸面縄目、凹面布目で、96の凹面及び97は全体に煤けている。深さは瓦上面までが約10cm、底部までが約32cmを測る。埋土は暗灰褐色細砂混じり粘質シルトである。13世紀頃の土器が出土しているが、図化しえたものは土師器羽釜（95）のみである。

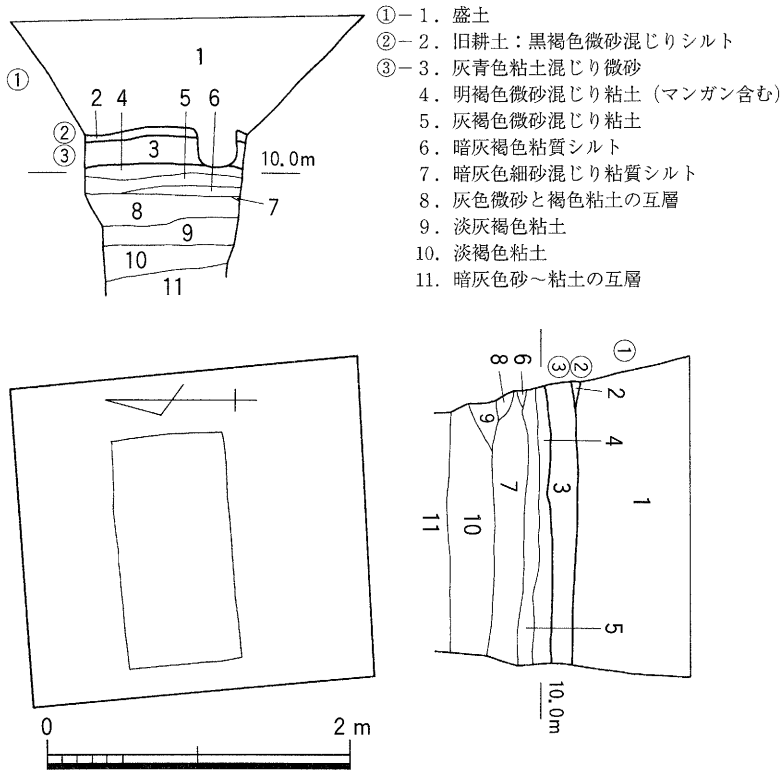
ＳＰ132

平面形は直径約30cmのほぼ円形を呈し、深さ約15cmを測る。埋土は黄灰褐色細砂混じり粘質シルトである。６世紀頃までの土器が出土しており、須恵器甕（98）を図化した。

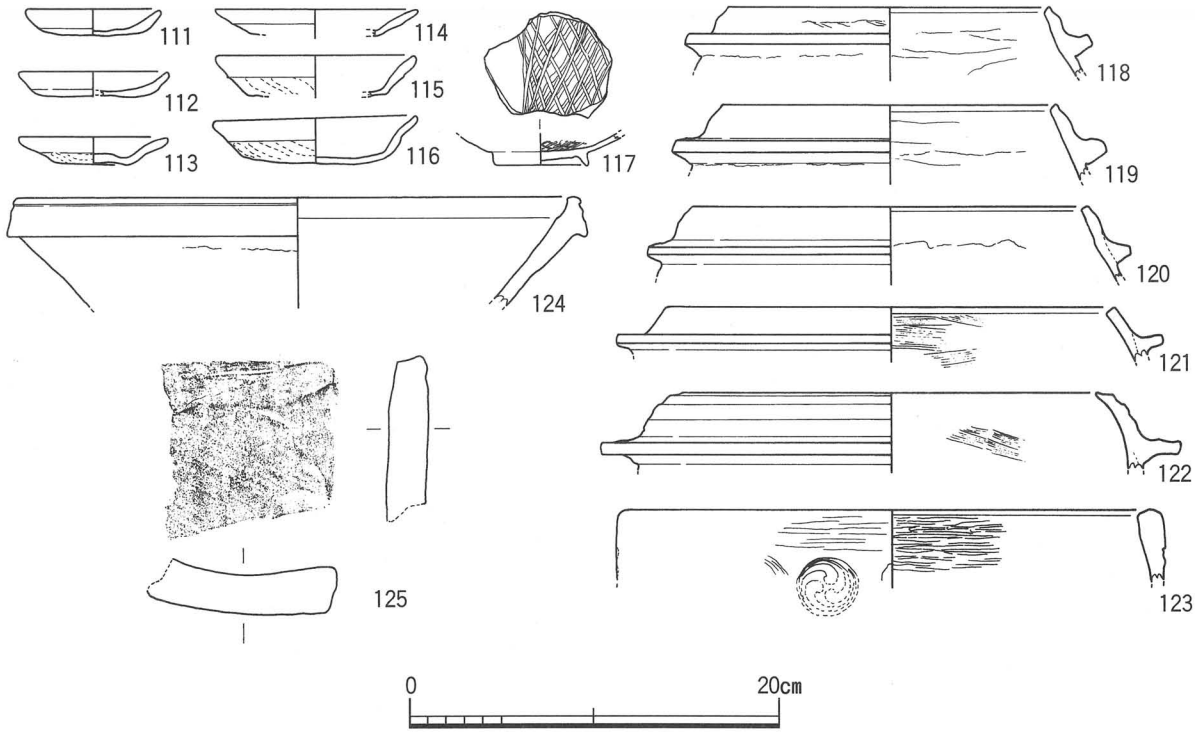
〈No.14〉

北西部のNo.10とほぼ同様の堆積状況を呈している。第４層以下（標高約10.1m以下）は、河川あるいは溝の滞水堆積状況を呈しており、南壁での堆積状況からは溝の流心は調査区東側に求められる。埋土中には植物遺体を含み、特に第９・10層には多くみられる。

遺物は埋土全体から13～15世紀の土器・瓦等が出土している。図化しえたものは土師器皿（111～116）・瓦器椀(117)・三足釜(118～121)・羽釜(122)・火鉢(123)・東播系須恵器鉢(124)・平瓦(125)である。123は口縁部外面に「三つ巴文」のスタンプを巡らせるものである。



第25図　No.14　平面・断面図（Ｓ＝１／50）



第26図　No.14　出土遺物（Ｓ＝１／４）

第３章　まとめ

今回の調査は下水道工事の人孔部分という小面積の調査ではあったが、弥生時代後期から鎌倉時代の遺構・遺物を検出することができた。

弥生時代後期では遺構や明確な遺物包含層は認められず、二次堆積としての土器が数点検出されたのみであった。当調査地の西140ｍの第15次調査地[註2]では、標高9.2ｍ前後で弥生時代後期前半・後半の遺構面が検出されている。当調査地内でも、西部に位置するNo.１・２・４・５で認められた第⑪層がこの遺構面にあたると考えられるが、当地では古墳時代中期以降の集落域となっている。

古墳時代前期ではNo.12でのみ布留式期新相の遺物包含層（第⑩層）が確認された。他の地区ではこれに相当する層はみられず、集落域として捉えられるものか、あるいはこの集落域がどのように拡がるのかは、周辺の調査成果に期待したい。

古墳時代中期～後期ではNo.４・８・11・13で遺構が検出された。No.４では包含層からではあるが滑石製紡錘車（23）が出土している。滑石製紡錘車は八尾市域では亀井遺跡１点[註3]、池島・福万寺遺跡４点[註4]、萱振遺跡３点[註5・6]の出土が認められている。No.10では比較的まとまった状態で埴輪が検出され、付近に古墳の存在が考えられる。出土した埴輪には円筒埴輪・蓋形埴輪があり、円筒埴輪の時期は６世紀代と考えられるものである。近年、八尾市域では、山賀古墳[註7]・萱振２号墳[註8]等、平地部に立地する後期古墳が検出されるようになった。この両古墳からは埴輪は検出されていな

いが、埴輪を持ちえた有力階層の墓の存在も検討しなければならない。前期古墳では萱振１号墳[註9]や美園古墳、また当遺跡内でも南西約600ｍの第19次調査[註11]において、家形・船形埴輪等をもつ古墳が検出[註10]されており、これらは在地の有力層と大王権との関わりを物語るものと考えられている。[註12]今回出土した埴輪が古墳に伴うものであるならば、被葬者はこの在地の有力層の系譜を引くものとも想定できよう。

飛鳥～奈良時代では、№４・６・７・８・11・12で南西部の第６次調査地[註13]と同様に標高9.5ｍ前後で遺物包含層が確認された。遺物の量は少量であった。

平安時代後期～鎌倉・室町時代では調査地のほぼ全域で遺構・遺物が検出された。周辺では南西約200ｍの第24次調査[註14]において、平安時代末期の掘立柱建物・井戸等の集落遺構が検出されている。今回の調査では№１～３・９・10・14で東西方向、北西－南東方向の大規模な溝の存在が想定され、この溝はその規模の大きさからも集落や屋敷地を画する「堀」、「区画溝」等の性格が考えられよう。西側の市教委調査地[註15]でも同様の溝が検出されており関連が窺われる。なお当遺跡第８次調査[註16]においても、鎌倉時代を中心とする同様の溝が確認されている。またこれらの溝からの遺物に瓦が含まれていることが注目される。当地が『続日本紀』にみえる「弓削寺・由義寺・由義宮・弓削行宮」が所在したとされる「西京」の推定地に近く、寺院等の存在も想定しなければならない。

註

註１　森田　稔　1987.12「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会

註２　西村公助　1997「Ⅰ中田遺跡第15次調査（ＮＴ93－15）」『中田遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告56』財団法人八尾市文化財調査研究会

註３　寺川史郎・尾谷雅彦・他　1980「亀井・城山」財団法人大阪文化財センター

註４　森本　徹　1995.3「池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅻ　－90－1･90－4調査区（1990～1992年度）の調査概要－」財団法人大阪文化財センター

註５　広瀬雅信・他　1992「萱振遺跡」『大阪府文化財調査報告書　第39輯』大阪府教育委員会

註６　原田昌則　1995「5.萱振遺跡第16次調査（ＫＦ94－16）」『平成６年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

註７　森井貞雄・高橋雅子・他　1983「山賀（その２）」財団法人大阪文化財センター

註８　西村公助　1990「萱振遺跡発掘調査概要報告」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』

註９　前掲書註４

註10　渡辺昌宏・他　1985「美園」財団法人大阪文化財センター

註11　坪田真一　1994「35.中田遺跡第19次調査（ＮＴ93－19）」『平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

註12　吉田野乃　1996.3「史跡　心合寺山古墳基礎発掘調査報告書」『八尾市文化財調査報告35　史跡整備事業調査報告１』八尾市教育委員会

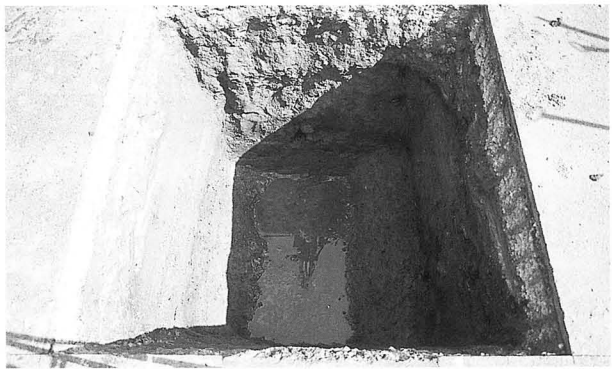
註13　成海佳子　1995「Ⅱ　中田遺跡第６次調査（ＮＴ90－6）」『中田遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』財団法人八尾市文化財調査研究会

註14　原田昌則　1995「Ⅳ　中田遺跡第24次調査（ＮＴ94－24）」『中田遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』財団法人八尾市文化財調査研究会

註15　吉田野乃　1997.3「10.中田遺跡（95－22）の調査」『八尾市文化財調査報告37』八尾市教育委員会

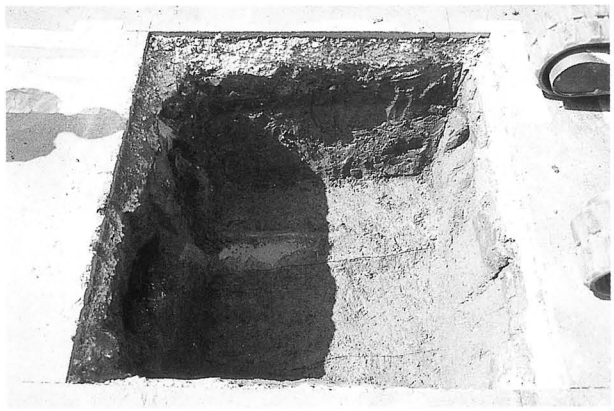
註16　坪田真一　1995「Ⅲ　中田遺跡第８次調査（ＮＴ91－8）」『中田遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』財団法人八尾市文化財調査研究会

図　　版



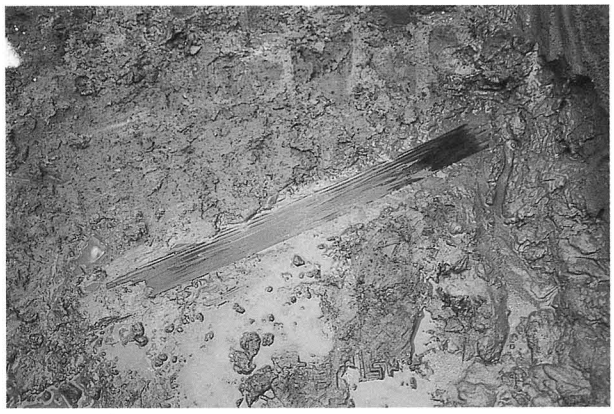
No.1　第⑪層上面（西から）

No.1　最終面上面（西から）

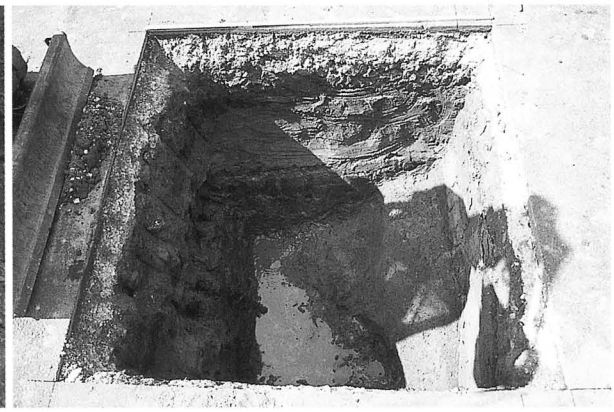


No.2　第⑥層上面（東から）

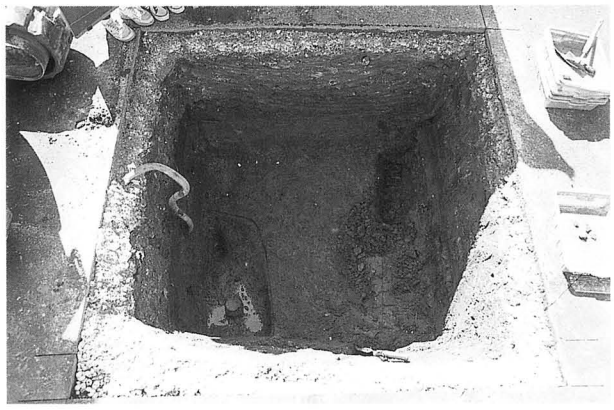
No.2　第⑥層下面（東から）



No.3　ＳＤ031上層板材出土状況（南から）



No.3　第④層下面（東から）



No.4　第⑤層上面（北から）

No.4　第⑪層上面（北から）